

徳島大学キャンパスマスタープラン 本編
2024.03.27役員会承認



目次

徳島大学キャンパスマスタープラン 本編

目次	1～ 2
学長からのメッセージ	3
徳島大学の理念と目標	4
徳島大学基本方針	4
徳島大学の沿革	5～ 8
第1章 キャンパスマスタープランの目的と基本的な考え方	
1-1 キャンパスマスタープランの目的	9
1-2 キャンパスマスタープランの必要性	9
1-3 徳島大学キャンパスマスタープラン基本理念	10
第2章 キャンパス整備の考え方	
2-1 キャンパスの整備方針	11～ 12
2-2 キャンパスの活用方針	12
第3章 保有キャンパスの概要	
3-1 キャンパスの位置	13
3-2 施設の現況	14
第4章 キャンパスの将来構想(イメージ)	
4-1 南常三島キャンパスの将来構想	15～ 16
4-2 蔵本キャンパスの将来構想	17～ 18
第5章 キャンパスの整備計画	
5-1 キャンパス共通の整備計画	
1. キャンパスの問題点	19～ 20
2. キャンパスの問題点への対応	21
3. サステイナブルキャンパスに向けた取組	22
4. キャンパスイメージの骨格となる軸線と外部空間	23～ 24
5. カラースキーム	25～ 26

5-2 南常三島キャンパス

1. キャンパスの概要	27～ 28
2. キャンパスの現状と課題・方針	29～ 30
3. ゾーニング計画	31～ 34
4. キャンパス動線計画	35～ 38
5. キャンパス空間整備計画	39～ 40
6. ライフライン計画	41～ 53
7. 防災	54

5-3 蔵本キャンパス

1. キャンパスの概要	55～ 56
2. キャンパスの現状と課題	57～ 58
3. ゾーニング計画	59～ 60
4. ライフライン計画	61～ 66

徳島大学キャンパスマスタープラン 資料編

南常三島キャンパス動線整備計画(駐車場計画)	1～ 2
南常三島キャンパス動線整備計画(駐輪場計画)	3～ 4
南常三島キャンパスパブリック計画	5～ 8
南常三島キャンパス現況写真	9～ 10
蔵本キャンパス現況写真	11～ 12

学長からのメッセージ



国立大学法人 徳島大学長
河村 保彦

徳島大学では、本学が育成する人物像や目指す方向性を学内外に向けて示した「INDIGO宣言」を2023年4月に策定しました。

この背景には、世界はかつてない速度で変貌を続けており、超スマート社会Society5.0への期待が高まる一方で、少子高齢化の加速、自然環境の悪化や感染症の拡大など、多くの不安が未来に影を落としています。このような複雑で高度な課題解決に必要とされる人材を育成し、徳島県に位置する高等教育機関としてのあるべき姿を掲げる必要があります。

阿波の藍(INDIGO)は、かつて品質向上への誠実な取り組みにより日本全国を席卷し、徳島(阿波)は、全国有数の都市を有する地域として繁栄しました。深く輝く藍色は世界の人々に「ジャパンプルー」として愛されてきたことに加えて、防虫性、耐候性、薬効など、藍は多様な機能で人々の生活を豊かにし、社会の発展に貢献してきました。

藍の染色では、さまざまな物質が共生する藍甕(あいがめ)に生地を浸けてから外気にさらす工程を繰り返すことで、鮮やかな藍色があらわれます。これは徳島大学が目指す人材育成そのものです。多様なヒト、モノ、コトが行き交う中で学内外との交流を繰り返して人材が成長し、幅広い能力で社会に貢献する。本学はそのような学びの場でありたいと願います。

徳島大学では、このような思いを込めた「INDIGO宣言」に基づき、「教育」「研究」「社会との共創」「医療」「組織運営」における重点目標と戦略を示した「徳島大学VISION」を2023年10月に定めました。これは、2027年度までの第4期中期目標・中期計画達成や2030年のSDGs達成、さらにその先の未来において地域と社会の多様な幸せの実現を目指すための、本学のさまざまな取り組みのアウトラインを学内外に示すものです。今後は「徳島大学VISION」を指針として、大学一丸となって「深く輝く、未来を紡ぐ大学」を目指します。

徳島大学キャンパスマスタープラン2023では、「徳島大学VISION」の重点目標と戦略を推し進めるため、キャンパス全体を多様なステークホルダーが連携し共創する場であるイノベーション・commons(共創拠点)整備を推進していくとともに、各組織が所有している施設について占有意識を改革し、スペースの共用化と平準化を図り大学キャンパスは地域の公共財産として、地域社会と共に大学のさらなる発展を目指していきます。

【徳島VISIONにおける5つの骨子】

【教育】 進取の気風の醸成と未来を切り拓く人材育成

【研究】 イノベーションを創出するプラットフォームの構築

【社会との共創】 地域の中核となり、世界の課題を解決する社会連携の推進

【医療】 高度、先進、全人的医療の提供と人間愛に溢れた医療人育成

【組織運営】 魅力と活力ある経営体としての大学へ

徳島大学の理念と目標

理念	国立大学法人徳島大学は、自主と自律の精神に基づき、真理の探究と知の創造に努め、卓越した学術及び文化を継承し向上させ、世界に開かれた大学として、豊かで健全な未来社会の実現に貢献する。	
目標	教育	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学生が志をもって学び、感じ、考え、生涯にわたって学び続ける知と実践にわたる体系的な教育を行う。 2. 自律して人類の諸問題の解決に立ち向かう、進取の気風を身につけた人材の育成を行う。
	研究	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自由な発想により真理を探究する研究を行う。 2. 人類の問題を解決する研究を行う。 3. 研究成果を社会に迅速に還元し、国際及び地域社会の平和な発展に貢献する。
	社会貢献	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域社会と世界を結ぶ知的なネットワークの拠点となり、平和で文化的な国際社会と活力ある地域社会を構築する。 2. 産官学の組織と連携し、社会の発展基盤を支える拠点となり、大学の開放と社会人の学び直しを支援し、地域社会に新産業を創出することに貢献する。

徳島大学基本方針

教育	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学生が志をもって学び、感じ、考え、生涯にわたって学び続ける知と実践にわたる体系的な教育を行う。 2. 専門知識と技術を身につけ、自律して社会の諸問題に立ち向かい、リーダーシップをもって、課題解決にあたることのできる進取の気風を身につけた人材の育成を行う。 3. 高度な専門知識・最先端技術を修得するとともに、広範な応用力、深い洞察力、豊かな創造力を身につけ、国際的・学際的に展開できる人材の育成を行う。 4. 学生の学修成果の把握と教育評価を基礎とした教育の質保証を行う。
研究	<ol style="list-style-type: none"> 1. 本学の個性、強みを活かし、生命科学、理工科学及び地域科学の研究分野をさらに強化する。 2. 独創的な学際融合分野の研究を推進するため、国内連携のみならず、世界を視野に入れた研究機関との連携を推進する。 3. 大学の最大の資源は人材という観点から、優秀な研究者を採用するとともに、若手研究者、女性研究者に重点を置いた人材育成を行う。 4. 大学の知を活用し、イノベーションによる新技術開発や新産業創出などの研究成果を積極的に社会に還元する。
社会貢献	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域社会から世界へ活躍できるグローバルリーダーを輩出するため、地域社会や国際社会のニーズに対応した人材養成を行う。 2. 地域の知の拠点としての責務を果たすため、自治体、企業、NPO法人等と協働して、地域産業の振興と雇用の創出、文化の継承、高度医療の提供、環境と防災対応など地域課題への解決を担う。 3. 地域社会においてニーズの高い生涯学習や産業人材の育成等社会人の学び直しを支援する。

徳島大学の沿革

徳島大学は昭和24年に、旧制の徳島師範学校、徳島青年師範学校、徳島医科大学、徳島医学専門学校、徳島高等学校および徳島工業専門学校を包括して設置された。

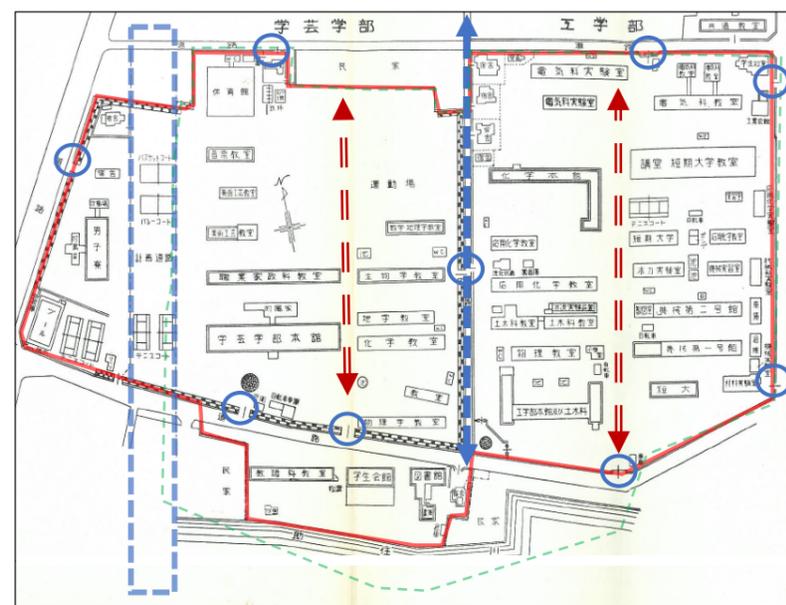
大学の沿革は、以下のとおりである。

南常三島キャンパス 年表

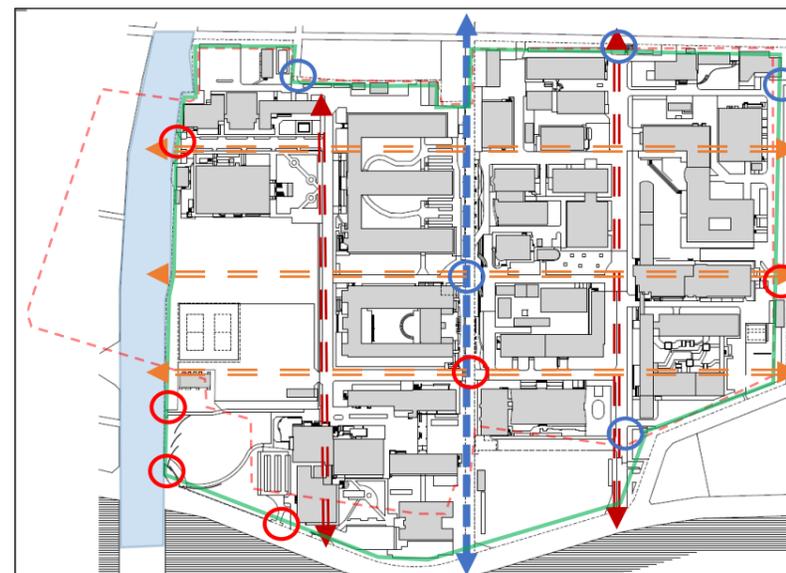
明治7年(1874年) 5月	徳島師範期成学校の創設(旧徳島城西の丸藩校跡、のち徳島県師範学校・官立徳島師範学校などに改称し、1949年5月徳島大学学芸部となる。1899年5月 常三島町に移転)
大正11年(1922年) 3月	徳島県立実業補修学校教員養成所の設置(のち徳島県立青年学校教員養成所、官立徳島青年師範学校に改称し、1949年5月徳島大学学芸学部となる)
10月	官立徳島高等工業学校を常三島町に設置(土木・機械・応用科学の3学科、応用化学科に薬学部の母体となる製薬化学部を設置、のち徳島工業専門学校に改称し、1949年5月徳島大学工学部となる)
昭和20年(1945年) 7月	徳島市中心部が空襲被災 徳島師範学校・徳島工業専門学校・徳島医学専門学校の校舎焼失
昭和24年(1949年) 5月	国立大学徳島大学の設置(学芸学部・医学部・工学部の3学部) 徳島医科大学附属病院を徳島大学医学部附属病院と改称
昭和27年(1952年) 5月	附属図書館を常三島地区に設置、医学部図書分館を蔵本分館と改称
昭和34年(1959年) 4月	常三島地区に学生会館を開館
昭和39年(1964年) 4月	大学院工学研究科を設置
昭和40年(1965年) 4月	教養部を設置(1993年3月廃止)
昭和61年(1986年) 4月	総合科学部(総合科学科)を設置、教育学部附属の小学校・中学校・幼稚園・養護学校を鳴門教育大学に移管 大学開放実践センターを設置
平成 3年(1991年) 4月	地域共同研究センター(現在の産学官連携プラザ)を設置
平成 5年(1993年) 10月	併設工業短期大学部が廃止転換され、工学部に夜間主コースを設置
平成 6年(1994年) 4月	大学院人間・自然環境研究科を設置
平成 8年(1996年) 7月	サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーを設置
平成14年(2002年) 4月	留学生センターを設置
平成18年(2006年) 4月	大学院ソシオテクノサイエンス研究部および先端技術科学教育部を設置
平成21年(2009年) 4月	大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部および総合科学教育部を設置
平成26年(2014年) 1月	保健管理センターを改組し、保健管理・総合相談センターを設置
平成28年(2016年) 4月	総合科学部3学科を総合科学部社会総合科学科に改組 工学部7学科を理工学部理工学科に改組 生物資源産業学部生物資源産業学科を新設 大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部を大学院総合科学研究部に改組 大学院ソシオテクノサイエンス研究部を大学院理工学研究部に改組 大学院生物資源産業学研究部を新設 教養教育院の新設
平成29年(2017年) 4月	大学院総合科学研究部、大学院理工学研究部及び大学院生物資源産業学研究部を改組し、大学院社会産業理工学研究部を設置 創新教育センターを新設 技術支援部を新設
平成30年(2018年) 4月	産業院を新設
平成31年(2019年) 3月	ポストLEDフォトンクス研究所を新設
令和 2年(2020年) 4月	大学院総合科学教育部と大学院先端技術科学教育部を改組し、大学院創成科学研究科を設置 バイオイノベーション研究所を設置



昭和36年当時の航空写真(南常三島キャンパス)



南常三島キャンパス配置図(昭和36年当時)



南常三島キャンパス配置図(令和元年)

<凡例>

- ←→ キャンパス主軸
- ←→ キャンパス副軸
- ←→ キャンパス内公道
- 吉野川大橋開通前のキャンパスの敷地境界線
- 現在のキャンパスの敷地境界線
- 都市計画通路(国道11号線バイパス)の計画地
- キャンパス入口
- 新たに整備された入口

それぞれ前身の学校をもとに、キャンパス西側を総合科学部(当時の学芸学部)、キャンパス東側を理工学部(当時の工学部)として、戦中に空襲で焼失した校舎等の復旧に併せて整備計画がすすめられた。

1973年の吉野川大橋の開通により、キャンパス内を国道11号線バイパスが通ることとなり、現在のキャンパスの形状へと至る。

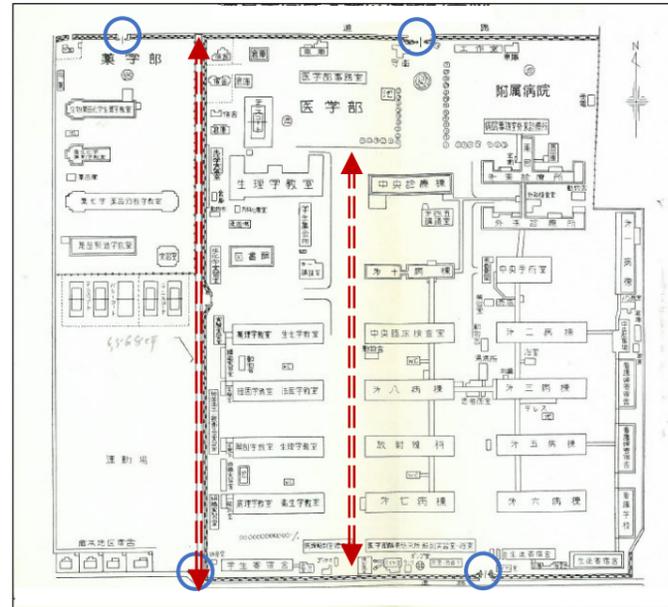
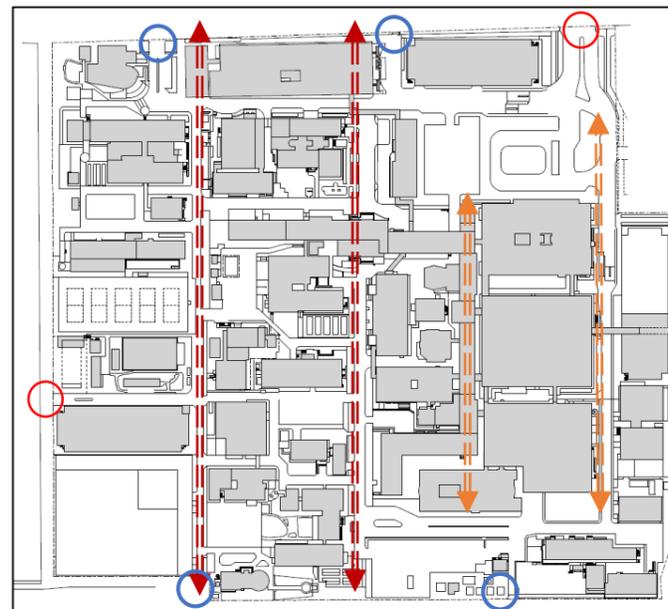
その後、改組により1986年に総合科学部の設置(教育学部廃止)、2016年には生物資源産業学部が設置された。

キャンパスを縦断する市道に面する塀が取り払われ、東西キャンパスをつなぐ動線が新たに整備された。

前身の学校の主動線を継承しながら、キャンパスが一体となるように整備を進めている。

蔵本キャンパス 年表

昭和12年(1937年) 4月	徳島高等工業学校に製薬化学科を増設
昭和18年(1943年) 2月	徳島県立医学専門学校の設置(仮校舎は旧徳島城内の徳島県立商品陳列所。のち官立徳島医学専門学校に改称し、1949年5月徳島大学医学部となる)
4月	新蔵町の徳島市民病院を移管し、徳島県立徳島医学専門学校附属医院と改称
昭和20年(1945年) 7月	徳島市中心部が空襲被災 徳島師範学校・徳島工業専門学校・徳島医学専門学校の校舎焼失
昭和22年(1947年) 9月	徳島医学専門学校が蔵本町の旧陸軍43連隊跡地に移転
昭和23年(1948年) 2月	徳島医科大学の設置(蔵本町1949年5月 徳島大学医学部となる)
昭和24年(1949年) 5月	国立大学徳島大学の設置(学芸学部・医学部・工学部の3学部) 徳島医科大学附属病院を徳島大学医学部附属病院と改称
7月	大学事務局を医学部から新蔵町2丁目現在の医学部附属病院分院内に移転
昭和26年(1951年) 4月	薬学部を設置(同年3月工学部薬学科を廃止)
昭和27年(1952年) 5月	附属図書館を常三島地区に設置、医学部図書館を蔵本分館と改称
昭和30年(1955年) 4月	大学院医学研究科を設置
昭和36年(1961年) 4月	医学部附属酵素研究施設(現在の疾患酵素学研究センター)を設置
昭和39年(1964年) 4月	医学部に栄養学科を設置
昭和40年(1965年) 4月	大学院薬学研究科を設置
9月	大塚講堂竣工
昭和44年(1969年) 4月	大学院栄養学研究科を設置
昭和50年(1975年) 4月	薬学部附属薬用植物園(現在の薬学部附属医薬資源教育研究センター)を設置
昭和51年(1976年) 10月	歯学部を設置
昭和54年(1979年) 4月	歯学部附属病院を設置
昭和57年(1982年) 12月	医学部に全国初の倫理委員会を設置
昭和62年(1987年) 10月	医学部附属看護学校・診療放射線技師学校・臨床検査技師学校を改組し、徳島大学医療技術短期大学部を併設(2005年3月廃止)
平成 2年(1990年) 12月	長井記念ホール竣工
平成10年(1998年) 4月	ゲノム機能研究センターを設置
平成13年(2001年) 10月	徳島大学医療技術短期大学部を改組し、医学部保健学科を設置
平成15年(2003年) 10月	医学部附属病院と歯学部附属病院を統合し、医学部・歯学部附属病院とする
平成16年(2004年) 4月	大学院ヘルスバイオサイエンス研究部、および医科学・口腔科学・栄養生命科学・薬科学の4教育部を設置
平成18年(2006年) 4月	薬学部を6年制の薬学科および4年制の創製薬科学科に改組 大学院保健科学教育部の設置 助産学専攻科の設置
平成19年(2007年) 4月	歯学部口腔保健学科の設置 疾患酵素学研究センターの設置(分子酵素学研究センターの転換)
平成20年(2008年) 4月	大学院保健科学教育部博士後期課程を設置 疾患ゲノム研究センターを設置(ゲノム機能研究センターの転換)
平成22年(2010年) 4月	徳島大学病院の設置(医学部・歯学部附属病院の転換)
平成23年(2011年) 4月	大学院口腔科学教育部修士課程を設置
平成24年(2012年) 4月	助産学専攻科を廃止し、保健科学教育部に博士前期課程助産学実践コースを設置 疾患プロテオゲノム研究センターの設置(疾患ゲノム研究センターの転換)
平成25年(2013年) 4月	藤井節郎記念医科学センターを設置
平成26年(2014年) 4月	医学部栄養学科を改組し、医科栄養学科を設置
平成27年(2015年) 4月	大学院ヘルスバイオサイエンス研究部を大学院医歯薬学研究部に改組 大学院口腔科学教育部口腔保健学専攻(博士後期課程)を設置
平成28年(2016年) 4月	疾患酵素学研究センター及び疾患プロテオゲノム研究センターを改組し、先端酵素学研究所を新設
令和 4年(2022年) 4月	大学院医科学教育部を大学院医学研究科に、大学院口腔科学教育部を大学院口腔科学研究科に、大学院薬科学教育部を大学院薬学研究科に、大学院栄養生命科学教育部を大学院医科栄養学研究科に、大学院保健科学教育部を大学院保健科学研究科に改称
7月	


昭和36年当時の航空写真(蔵本キャンパス)

蔵本キャンパス配置図(昭和36年当時)

蔵本キャンパス配置図(令和元年)
<凡例>

-  キャンパス主軸
-  キャンパス副軸
-  キャンパス入口
-  新たに整備された入口

戦時中の空襲により校舎と附属病院を焼失した徳島医学専門学校は、1947年に旧陸軍43連隊の約5万坪の敷地と旧兵舎23棟が移管されたことで、蔵本町へと移転し、現在の蔵本キャンパスとなった。

その後、工学部薬学科から学部へと独立した薬学部が1952年に蔵本キャンパスへと移転し、さらには1976年に歯学部が設置された。

キャンパス東側に病院施設、キャンパス西側に教育研究施設が並ぶ位置関係は継承されながらも、施設の高層化や老朽化した病院施設の再開発整備、自家用車の普及による立体駐車場の建設等、施設群は活発に変化してきた。

国道に面するキャンパス北側に病院用の入口を新たに設け、学校と病院の動線が分けて整備が進められた。また病院施設内には「ホスピタルストリート」として主動線が整備され、渡り廊下を通して多くの患者が、病院内を行き来できるようになっている。

第1章 キャンパスマスタープランの目的と基本的な考え方

1-1 キャンパスマスタープランの目的

国立大学法人等を取り巻く様々な課題に適切に対応し、魅力あるキャンパスづくりを戦略的に推進するためには、中長期的視点に立ったビジョンを学内外の関係者が共有し、キャンパスの課題解決に取り組みながら、効率的かつ効果的にキャンパスの発展を図ることが重要である。

そのためには、徳島大学基本方針を踏まえ、キャンパスの目指すべき具体的な姿、キャンパス環境の向上や既存資産の効率的活用の方向性及び整備のための優先的課題を明確にした上で、施設整備方針につながる「キャンパスマスタープラン」を策定する。

1-2 キャンパスマスタープランの必要性

徳島大学では教育研究環境の質的充実、老朽化する施設の安全性の確保、環境への負荷の低減、地域との連携を強化することなど取り組むべき様々な課題が山積している状況である。一方で、場当たりの整備を行うことにより、敷地の有効活用の視点を欠いた建て詰まり現象や利用者の視点を欠いた調和の取れていないキャンパス環境など懸念される例も見受けられる。

これらの課題に適切に対応しつつ良好なキャンパス環境の形成を図るためには、新たな施設整備を主眼においた従来の「施設長期計画」から、教育研究活動の基盤となるキャンパス全体の整備・活用を図るキャンパスマスタープランを策定し、長期的視点に立った計画的な整備を行うことが重要である。



1-3 徳島大学キャンパスマスタープラン基本理念

徳島大学では、各キャンパスの長期的な将来像を基本とし、大学を取り巻く状況の変化や本学のキャンパス整備の進展や課題を踏まえ、キャンパスマスタープランの基本理念を次のとおり定める。

徳島大学キャンパスマスタープラン基本理念

徳島大学は「徳島の地(知)の拠点」として、社会のニーズを踏まえた人材の育成、徳島大学の強みや特色を生かした研究の強化、地元自治体との連携強化による地域社会への貢献等を推進すると共に、世界を視野に各分野の機能強化を図ることとしている。

その目的達成のために、「徳島大学の理念・目標」、「徳島大学改革プラン」、「第3期中期目標・中期計画」及び「第4次国立大学法人等施設整備5か年計画」等を踏まえて、次のとおりキャンパス整備の基本方針を定め、学生・教職員をはじめとした施設利用者にとって快適で魅力あるキャンパスづくりを推進する。

- 世界水準の教育・研究を可能とするキャンパスづくり
 - ・教育・研究活動を支え、学生・教職員に魅力あるキャンパスの形成
 - ・世界トップ100を目指した教育・研究拠点の形成
- 社会をリードするイノベーション創出のためのキャンパスづくり
 - ・イノベーション教育を支える環境づくり
 - ・産学官連携を推進する研究環境の創出
- 国際化を推進するグローバルなキャンパスづくり
 - ・国際交流を活性化するためのスペースの創出
 - ・国際的な研究ネットワーク構築に向けた環境づくり
 - ・留学生や外国人研究者の受入環境の整備
- 地域に開かれたキャンパスづくり
 - ・多様な社会連携を可能とする場の創出
 - ・大学の知の資産を提供・活用する場の創出
 - ・地域の中核病院として高度医療を提供する環境の創出

以上の視点に立ったキャンパスづくりに際して、次の点に最大限配慮する。

- ・大学の歴史と伝統の継承
- ・地域との調和
- ・安全・安心・快適さの確保
- ・地球環境問題への対応
- ・共同利用スペースの創出
- ・資産の有効活用と全学的な施設マネジメントの推進

(※平成28年11月24日 平成28年度 第19回役員会承認)

第2章 キャンパス整備の考え方

「徳島大学キャンパスマスタープラン基本理念」に基づく、キャンパスの整備方針及び活用方針を定め、キャンパスの将来像実現に向けたキャンパスづくりを目指す。

また、キャンパスの伝統的またはシンボリックな施設等及び樹木を特定し、「変えてはいけない部分」と将来を見据えて戦略的に「変えていく部分」を明確にした上でのキャンパスづくりを目指す。

2-1 キャンパスの整備方針

■ 基本理念

- 世界水準の教育・研究を可能とするキャンパスづくり
 - ・教育・研究活動を支え、学生・教職員に魅力あるキャンパスの形成
 - ・世界トップ100を目指した教育・研究拠点の形成

■ 整備方針

- 様々な教育分野でのアクティブラーニングが可能なスペースを図書館、講義棟などに整備する。
- 教育体制、研究体制の変化に柔軟に対応できるよう、様々な規模や内容の教育に対応できるフレキシブルな使い方のできるスペースや、異分野交流スペース、共同研究利用のためのコラボレーションラボ等を整備する。
- 女性教職員、女子学生に配慮した環境整備を行う。
- 大学院生、ポストドクターのための研究スペースの確保を行う。
- 限られた用地、施設を有効に活用するためにも、建物の集約化、高層化を進め、教育・研究の充実を図るとともに新施設を建設するためのスペースを計画的に準備する。

【整備方針:平成29年1月18日 学長企画会議 確認】

■ 基本理念

- 社会をリードするイノベーション創出のためのキャンパスづくり
 - ・イノベーション教育を支える環境づくり
 - ・産学官連携を推進する研究環境の創出

■ 整備方針

- 異分野交流や産学官連携によるイノベーション創出を目指すために、プロジェクト研究のためのスペース、レンタルラボ及びインキュベーションスペースを整備する。その際には多様な研究課題に対応するために、フレキシブルな施設整備とする。

【整備方針:平成29年1月18日 学長企画会議 確認】

■ 基本理念

- 国際化を推進するグローバルなネットワークキャンパスづくり
 - ・国際交流を活性化するためのスペースの創出
 - ・国際的な研究ネットワーク構築に向けた環境づくり
 - ・留学生や外国人研究者の受入環境の整備

■ 整備方針

- イングリッシュカフェなど留学生と交流しながら互いの言語を学び合う空間を整備する。
- 留学生や外国人研究者のため、宗教・異文化へ配慮した整備を行う。
- 国際共同研究、海外の大学等と連携した教育が可能な施設の整備を進める。
- 留学生や外国人研究者を積極的に受け入れていくために、キャンパス内やその周辺部に宿舍を整備する。その際、日本人学生も居住できる混住型とすることで、国際交流を活性化させる。

【整備方針:平成29年1月18日 学長企画会議 確認】

■ 基本理念

- 地域に開かれたキャンパスづくり
 - ・多様な社会連携を可能とする場の創出
 - ・大学の知の資産を提供・活用する場の創出
 - ・地域の中核病院として高度医療を提供する環境の創出

■ 整備方針

- 大学の知の資産を地域に提供するため、研究・学習成果の展示、サイエンスカフェなどを実施できる施設を整備する。
- 地域との交流の促進及び生涯学習の場として各キャンパスの既存の施設の充実を図る。

【整備方針:平成29年1月18日 学長企画会議 確認】

■ グランドデザイン

■ 整備方針

- 教育・研究・学習・生活・地域交流環境等の施設整備に際しては、ユニバーサルデザインに配慮する。
- 構内の樹木、緑地等の積極的な活用及び周辺景観にも配慮した整備を行う。
- 地球環境保全に配慮した施設整備を進める。
- 屋外、屋内の施設案内情報について、表示を統一し多言語表示を併記するなど改善を行う。
- 学生のニーズを把握し、施設整備に反映する。
- 学外者も利用可能な施設については、収益が見込めるため、民間資金等による整備を検討する。
- 生物資源産業学部については既存施設の活用も含め、教育・研究に支障のないよう整備方針を検討する。
- 建物等の老朽化に対しては、優先度を踏まえた施設整備を進めていく。
- リノベーションの際には適正な規模の検討を行い、施設の有効活用に向けた検討を行う。
- 施設利用者の現状を踏まえ、利用しやすかつ安全なキャンパスを実現するため、駐車場、駐輪場、車道、歩道の整備を進める。

【整備方針:平成29年1月18日 学長企画会議 確認】

2-2 キャンパスの活用方針

- (1) 土地及び施設に対する部局の占有意識を撤廃し、教育研究の発展のためキャンパスが持つ資産を最大限に活用する。
- (2) 既存施設の利用実態を踏まえ、全学的な視点から弾力的にスペースの再配分を行い、共同利用などによる一層のスペースの有効活用を促進する。
- (3) 計画的な施設資産の改修、修繕を進め、既存施設の長寿命化を図ることで、施設の維持管理コストの低減、平準化を進める。

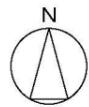
第3章 保有キャンパスの概要

3-1 キャンパスの位置

徳島大学は、徳島市の中心部に位置しており、学生・教職員が教育研究活動を行う主要キャンパスとして南常三島キャンパス、蔵本キャンパスを保有している。

徳島大学の位置する徳島市は人口約25万人の都市であり、江戸時代には徳島藩の城下町として栄え、幕末には藍産業の発展により国内で人口が上位10位に入る城下町でもあった。

また、徳島県の政治・経済・文化の中心であり、古来より近畿地方との繋がりが深く、現在でも神戸淡路鳴門自動車道や関西地方のテレビ・ラジオを通じて人的・物的・経済的な交流が盛んである。地理的な特色としては「四国三郎」と呼ばれる四国一の大河、吉野川の河口に位置し、紀伊水道に面している。



県内位置図



(出典：国土地理院ホームページより。標準地図、白地図を加工して作成)

3-2 施設の現況

徳島大学における施設の保有面積は約37万5千㎡であり、膨大な施設を効果的・効率的に施設整備や維持管理を行うためには、従来のライフサイクルから長寿命化のライフサイクルへ転換することにより、既存施設を最大限活用し、サステナブルな施設整備や維持管理を実現していくことが必要である。

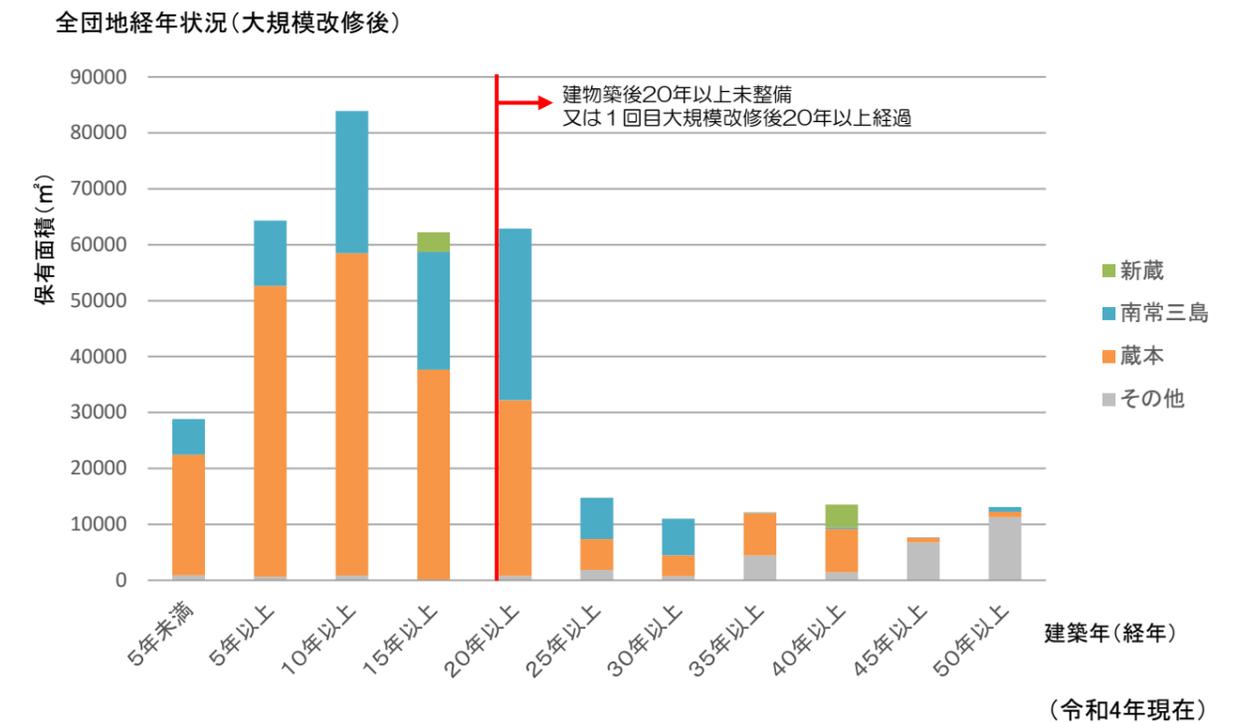
今後は、2019年度策定の「インフラ長寿命化計画(個別施設計画)」に基づき、施設の老朽化の状況や基幹設備の現状を適切に把握した上で、安全性と機能性に配慮し、トータルコストの縮減とコストの平準化を図りながら計画的な整備と維持管理を推進する。

また、建物の構造体における耐震化については、全て完了しているが、地震発生時に落下の恐れのある天井材、照明器具及び外壁仕上げ材等の非構造部材が存在しており、早急に耐震対策を講じる必要がある。

南常三島キャンパスでは、常三島キャンパス施設・環境専門委員会において、学部の改組、教研教分離による、教育研究目的や大学院設置を見据えた南常三島キャンパスにおける施設の最適化及び有効活用を図ることについて、検討が進められている。

また、蔵本キャンパスでは、蔵本キャンパス施設・環境専門委員会において、施設の整備計画や医療系3学部と大学病院を含めた共通の課題を解決するための教育研究環境の施設整備について検討が進められている。

両キャンパス共に、今後の展開によっては、キャンパス全体計画に大きな影響を与えると思われる。



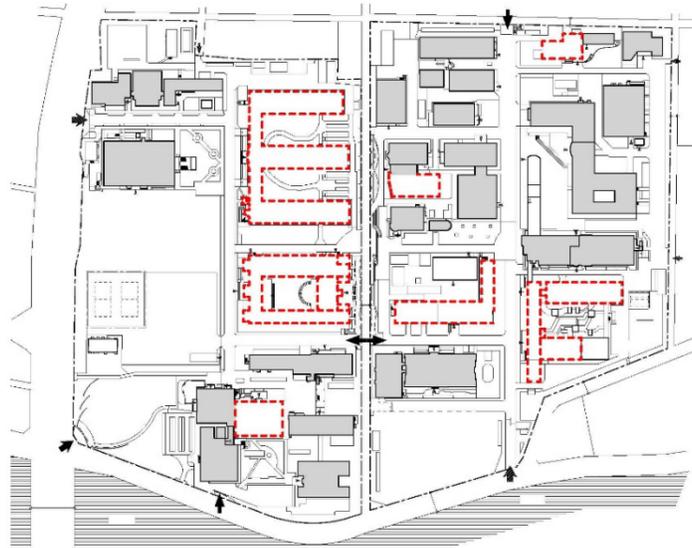
(令和4年現在)

第4章 キャンパスの将来構想(イメージ)

キャンパス将来計画の策定

- ・限られた用地、施設を有効活用するためには、建物の集約化、高層化を進め、教育・研究の充実を図るとともに新たな施設を建設するためのスペースを計画的に準備する。
- ・リノベーションの際には適正な規模の検討を行い、スペースの有効活用に向けた検討を行う。

4-1 南常三島キャンパスの将来ゾーニング



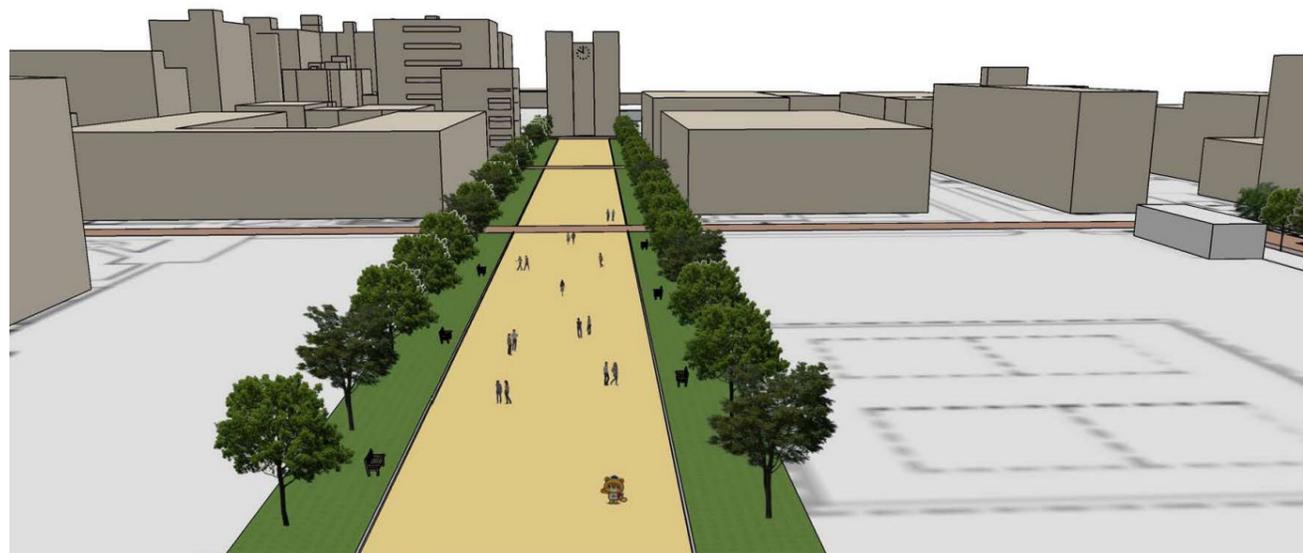
・30年後には多くの建物が建設後80年を迎える

<約80年を経過する建物>

- 総合科学部1号館
- 総合科学部3号館
- 学生会館
- 建設棟
- 電気電子棟
- 第2食堂



常三島キャンパスの現状 (2020年度時点)

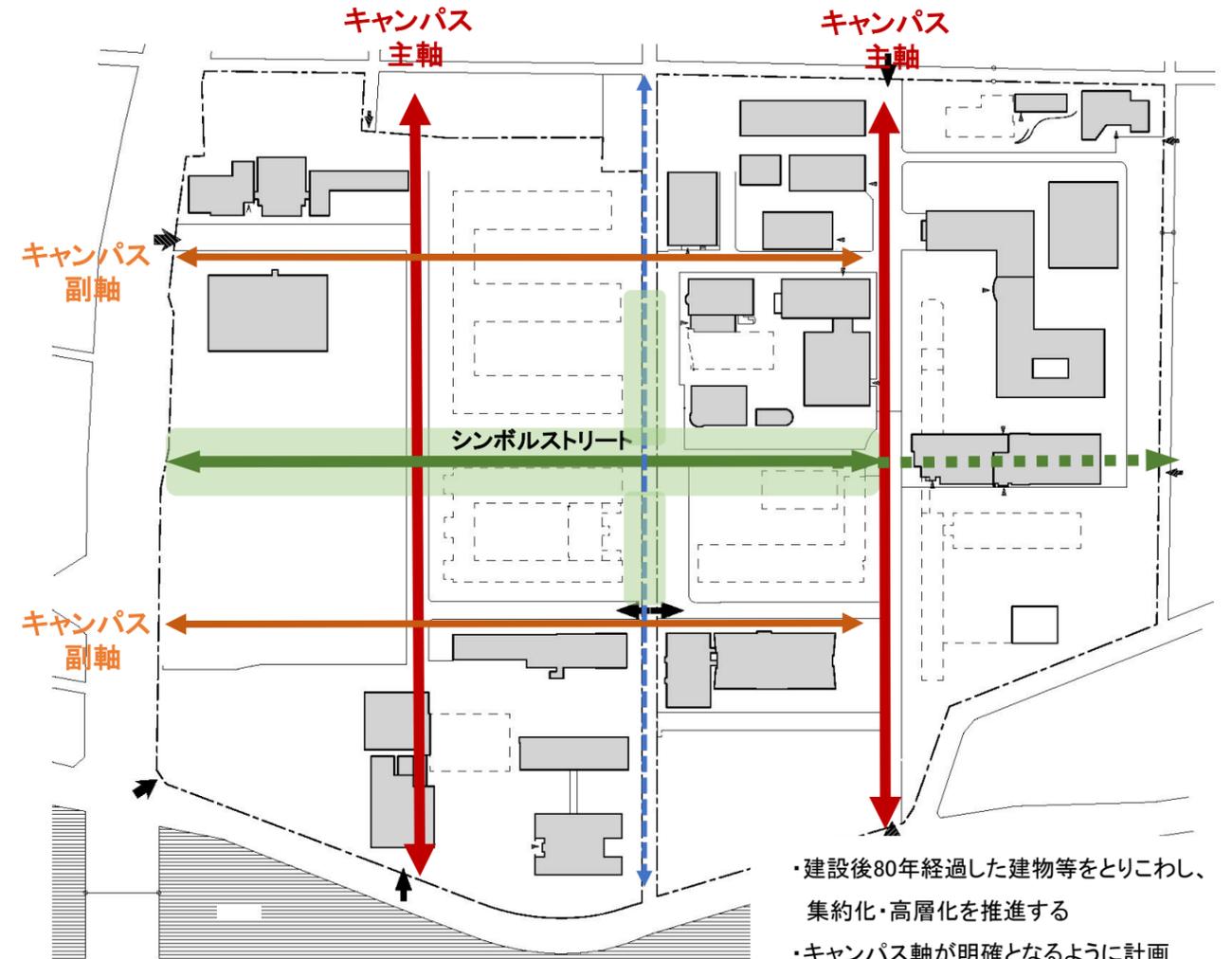


<シンボルストリート>
(将来構想)

30年後の改築にあわせて拡張を行いキャンパスのゆとりと潤いのある空間となるように計画する

(この構想案は一つの例示として表しています)

(この構想案は一つの例示として表しています)



常三島キャンパスの将来ゾーニング案(2050年度時点)

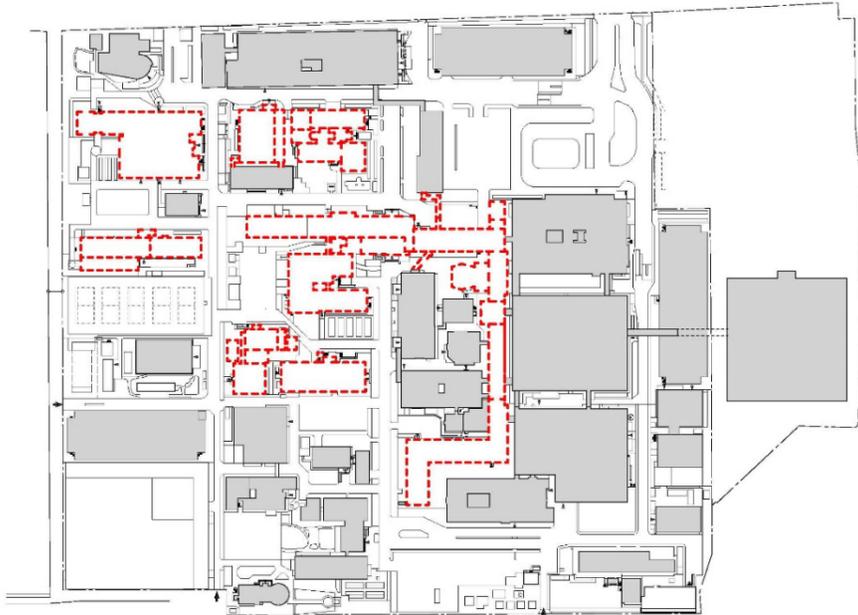
- ・建設後80年経過した建物等を取りこわし、集約化・高層化を推進する
- ・キャンパス軸が明確となるように計画する
- ・キャンパスのシンボルとなる「シンボルストリート」をキャンパスの主軸として計画する
- ・市道により分断されたキャンパスを機能的に結びつけるよう計画する



<助任の丘>

地域に開かれたキャンパスづくりのため、地域交流の促進の場となるよう更なる施設の充実を図っていく

4-2 蔵本キャンパスの将来ゾーニング

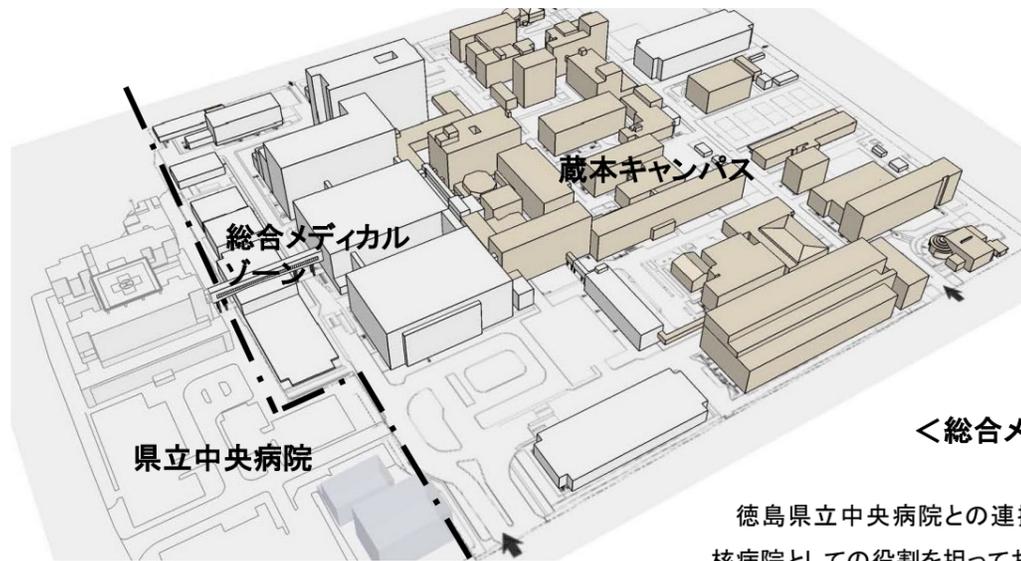
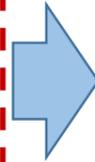


蔵本キャンパスの現状（2023年度時点）

・30年後には多くの建物が建設後80年を迎える

＜約80年を経過する建物＞

- 西外来診療棟
- 医学基礎A棟
- 医学臨床A棟
- 医学基礎B棟
- 栄養学棟
- 放射線総合センター
- 蔵本会館
- 大塚講堂
- 図書館
- 薬学部実験研究棟
- 保健学C棟

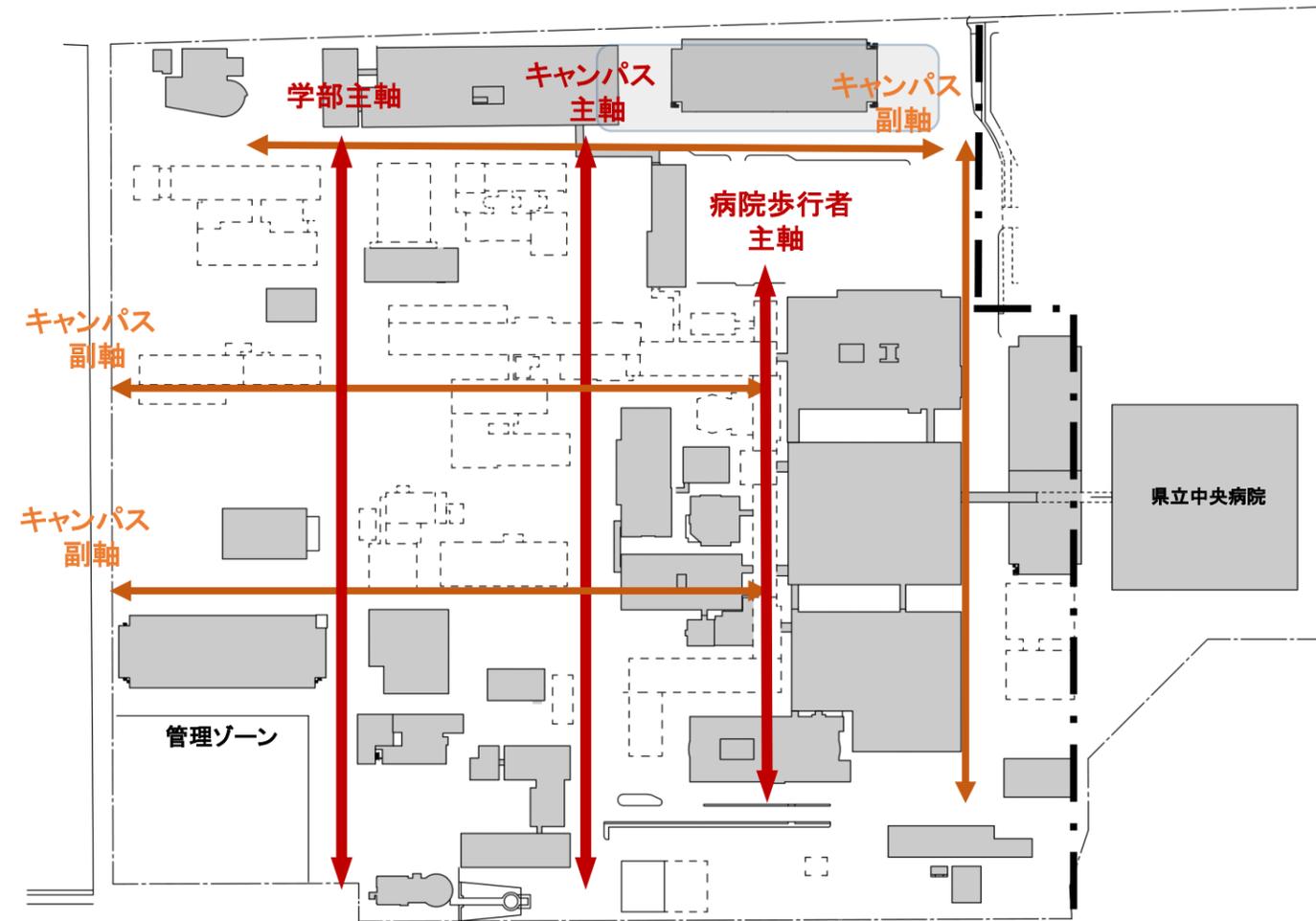


＜総合メディカルゾーン＞

徳島県立中央病院との連携による地域医療の中核病院としての役割を担っており、2病院を一体とした「医療・教育の拠点化」を目指している。

今後も計画を推進できるように、2病院をつなぐような整備を行っていく必要がある。

（この構想案は一つの例示として表しています）



蔵本キャンパスの将来ゾーニング案(2050年度時点)

- ・建設後80年程度を経過した建物等を取りこわし、集約化・高層化を推進する
- ・キャンパス軸が明確となるように計画する
- ・「メディカルゾーン」として質の高い医療と教育の場を構築できるように県立中央病院と密接に連携を図れるように計画する
- ・東病棟は20年経過し建物・設備共に老朽化が見られる。喫緊の課題として大学病院の再々開発計画を検討していく必要がある

＜キャンパス主軸(南側から)＞
(将来構想)



学部及び教育研究ゾーンと病院施設(ホスピタルゾーン)は利用者が異なるため、キャンパス主軸による明確な区分が必要である。

また、二つのゾーンが密接に機能するように、ゾーンをつなぐゆとりのある空間としても計画する必要がある。

（この構想案は一つの例示として表しています）

第5章 キャンパスの整備計画

5-1 キャンパス共通の整備計画

1. キャンパスの問題点

◆ クオリティの問題点

(1) 老朽化により教育研究に支障が生じる施設・ライフライン

- ・剥落の危険性がある外壁
- ・雨漏れの危険性がある防水
- ・25年以上経過した老朽化の著しいトイレ
- ・耐用年数が経過している空調設備・照明器具等
- ・構内道路及び歩道の老朽化(バリアフリー対策含む)
- ・落下の危険性がある非構造部材
- ・法定耐用年数を大幅に超過した給水管・排水管・ガス管・電線等

(2) 交通問題

- ・安全に通行できる歩道の不足
- ・無秩序に配置された駐輪場・駐車場
- ・歩車道分離

(3) ユニバーサルデザインへの対応

- ・留学生、外国人研究者等に対する学内案内標識への対応
- ・障がい学生の修学支援対策
- ・女性教職員、女子学生への配慮



老朽化施設への対策
(外壁)



老朽化したライフライン
への対策



男女兼用の老朽化したトイレ



自転車により安全とは言えない歩道

◆ スペースの問題点

(1) 今後需要が増えるスペースへの対応

- ・様々な教育分野でのアクティブラーニングが可能なスペース
- ・教育、研究体制の変化に柔軟に対応できるフレキシブルなスペース
- ・異分野交流スペース、共同研究利用のためのコラボレーションラボ
- ・異分野交流や産学官連携によるイノベーション創出を目指すプロジェクト研究スペース、レンタルラボ、インキュベーションスペース
- ・大学院生、ポストドクターのための研究スペース
- ・地域との交流促進及び障害学習のスペース
- ・増加する留学生、外国人研究者のため宗教、異文化へ配慮したスペース

(2) 新たに必要となる機能を備えたスペースへの対応

- ・イングリッシュカフェなどの留学生と交流を行えるスペース
- ・国際共同研究、海外の大学等と連携した教育が可能なスペース
- ・研究・学習成果の展示、サイエンスカフェなどのスペース

(3) 生物資源産業学部施設の集約化

◆ コストの問題点

- ・国の施設整備費補助金は国立大学の施設整備需要の1/3程度であるため、必要としている施設整備費補助金を確保することは困難
- ・保有面積が増加する一方、運営費交付金の維持管理費相当額は、減少傾向

<今後需要が増えてくるフレキシブルなスペース>



共同研究利用のためのオープンラボ
(藤井節郎記念医科学センター)



異分野交流、地域との交流を
目的としたフューチャーセンター
(地域創生・国際交流会館)

2. キャンパスの問題点への対応

- (1)クオリティに対する部門別計画の策定
- ・インフラ長寿命化計画(個別施設計画)
 - 防水・外壁・便所・給水管・排水管・ガス管・空調設備・照明設備等の更新計画の策定
 - ・ゾーニング計画
 - キャンパス形成時の基本方針を活かしたゾーン計画を策定
 - 各ゾーンの機能性や他ゾーンとの連携を考慮した計画を策定
 - ・キャンパス動線計画
 - 学生、教職員等が安全に通行できる動線計画の策定
 - PFI(PPP)事業等を視野に入れた駐車場計画の策定
 - 駐車場計画と連携したキャンパス周辺の駐輪場計画の策定
 - ・キャンパス空間整備計画
 - 建物表記等の基本ルールを定めたサイン計画の策定
 - 障がいのある学生等の修学支援等の充実のためのバリアフリー計画の策定
- (2)スペースの有効活用
- ・スペースの必要以上の専有や既得権意識の排除による、新たなスペースの創出
 - ・目的、用途に応じた既存スペース再配置の推進
 - ・新たに建物を増やすことなく、既存施設を機能改修することによる、新たなスペースの創出
 - ・保有面積の増大は、その後の施設管理に係るコストの増大につながるため、保有面積の総量の最適化
- (3)財源の確保
- ・運営費交付金、競争的資金の間接経費等の有効活用を推進
 - ・民間資金等PFI(PPP)事業の検討
 - ・ESCO事業の検討
 - ・施設整備費補助金等の獲得
 - ・施設維持管理費(スペースチャージ)の獲得
 - ・寄付金等の獲得

3. サステイナブルキャンパスに向けた取組

徳島大学では「地球環境の保全」というグローバルな課題の解決を図る責務があることを自覚し、エネルギー消費を抑制するとともに、施設の長寿命化を図りながら、SDGsを視野に入れて、地球環境に配慮したキャンパスの整備を進める。

- (1)環境にやさしい、人にやさしい、地域にやさしいキャンパスづくり
- 建物の新営・改修時には、高効率な省エネルギー機器の導入、屋根・外壁の断熱、遮熱性の高い窓ガラスの採用等を積極的に行い、地球環境に優しい施設整備を進める。
- (2)再生可能エネルギーの導入
- 化石燃料の使用量削減を図り、地球環境の保全に資すると共に、災害時の電力供給被害の拡大を抑制できるなどリスクの分散が期待できるため、「太陽光発電」などの再生可能エネルギーの導入を進める。
- (3)温室効果ガス排出削減の推進
- 環境・エネルギー管理委員会で決定したCO₂削減目標値等を盛り込んだ「CO₂削減行動計画」(平成29.4.1策定)で定められた削減目標を着実に実行するとともに、温室効果ガスの排出削減を進める。
- (4)自然環境との共生
- 「自然環境との共生」を実現するため、グリーンインフラ(自然環境が有する多様な機能の活用)に関する取組を推進しながら、生物の生育の場の提供、良好な景観形成及び気温上昇の抑制等を進める。



保健学C棟屋上



緑のカーテン

- (5)廃棄物の適正な処理
- 一般廃棄物・産業廃棄物等の分別区分を徹底し、独立した廃棄物集積場・薬品庫等の確保に努めるとともに、適正な処理及び資源化を推進し、併せて学内から排出される廃棄物の減量を図る(4R※)。

※～4R～

1. Refuse (リフューズ)→不要なもの、余計なものを断ること。
2. Reduce (リデュース)→ごみを減らすこと。
3. Reuse (リユース) →まだ使えるものを、くりかえし使うこと。
4. Recycle(リサイクル)→資源として、再利用すること。

4. キャンパスイメージの骨格となる軸線と外部空間

動線

動線の種類、ウェイト

動線は、中心となる大きな流れを確認し、順次細部の流れを確認する。校舎の場合、動線種類別の確認順序は次の順となる。現状の動線を人と交通で分類し、種類別を勘案しながら**主動線**、**ウェイト(量)**を指定する。

- ① 学生の動線
- ② 教職員の動線
- ③ 外部利用者の動線
- ④ サービス動線
- ⑤ 給排水・エネルギーの動線
- ⑥ 情報の動線

キャンパス主軸に沿って建物の出入り口まで自然な流れによる動きが確保されている。

正門から建物出入り口に達するまでの経路はそこに近づく人がその過程において心の準備をし、中の空間の予感を持つる**ひき**が確保されている。

空間

主外部空間、副外部空間

キャンパスイメージの骨格となる外部空間であり、キャンパスイメージの形成に大きく寄与している外部空間を、重要度に応じて主外部空間、副外部空間に分けて指定する。

内部空間: 建築物の壁やその他の区画で囲まれた内側の空間。

一般部: 内部空間のうち、外部に対して閉じている空間。外部に開放されていない空間。

(教室、居室、廊下、階段など) **右図A**

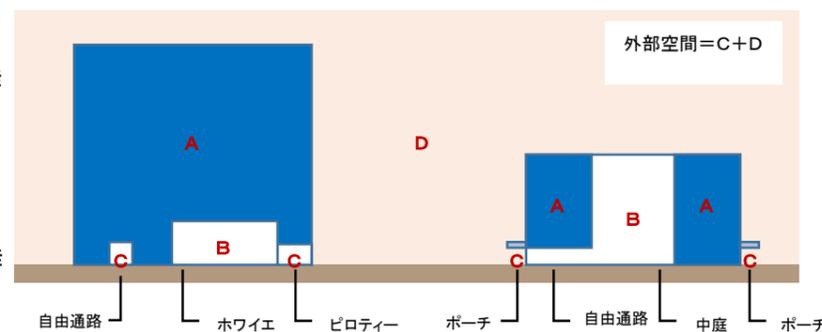
共用部: 内部空間のうち、外部に対して開いている空間。(中庭、ロビーなど) **右図B**

外部空間: 建築物の壁やその他の区画の外側の空間。

境界部: 外部空間のうち、建築物の雨垂れ線の内側を含む建物外周部。

(ピロティ、ポーチ) **右図C**

一般部: 外部空間のうち、建築物の雨垂れ線の外側の空間。 **右図D**



空間構成

空間構成は誰でも入ってきて良い『公的』スペースから特定の人だけが入ることが許される『私的』スペースまでの範囲がある。

この区分は人の動きは構内道路のような『公的スペース』から前庭や玄関ポーチなどの『半公的スペース』へ、さらに講義室、研究室などの『私的スペース』の段階構成といえる。

このような一般的な段階構成をもたない施設は施設利用者を混乱させ、人はその場所ではどんな行為が適切であるか分からなくなる。

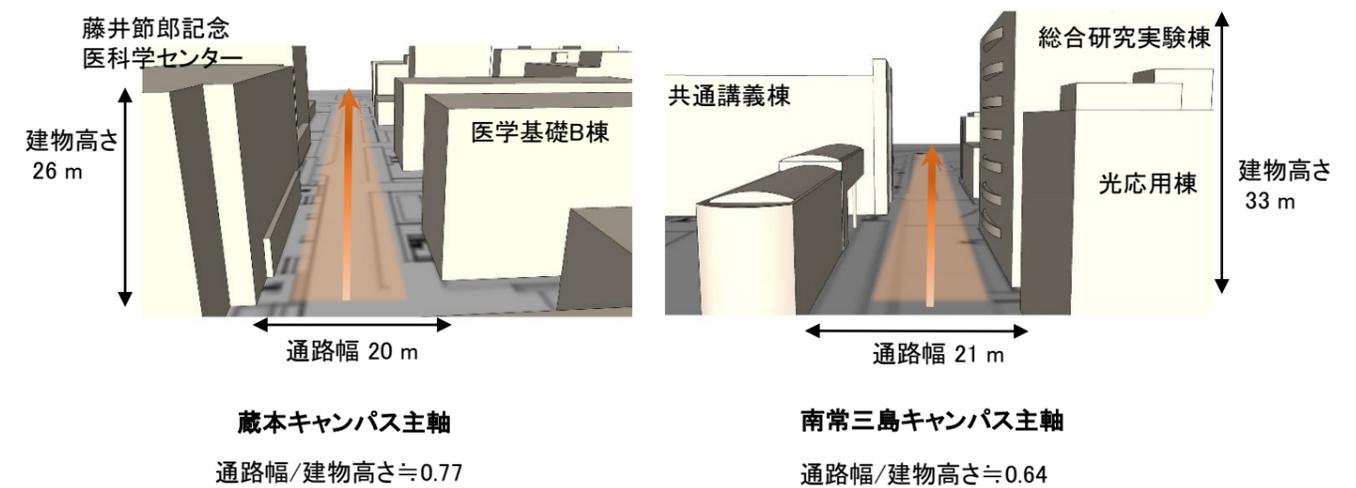
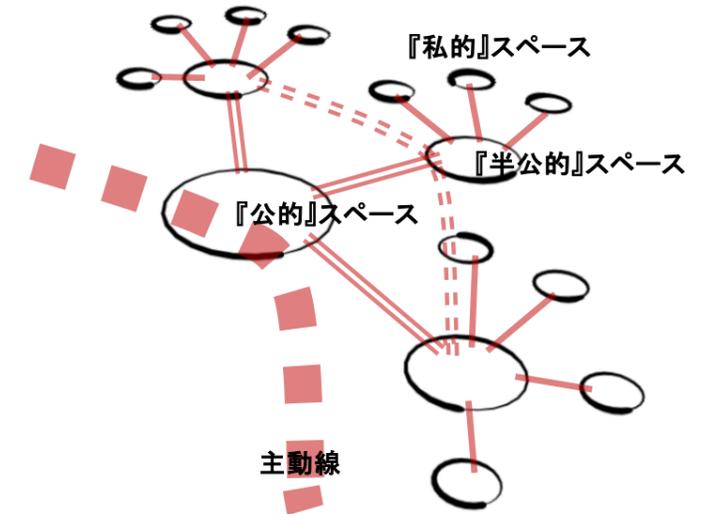
現状の空間構成は軸線、動線→各建物へのアプローチ→建物へ誘導できるフローが設定されている。

建物のボリューム感

建物に挟まれたり、囲まれた空間の閉塞感などは空間の幅、周囲建物高さに関連している。

2つのキャンパスともに主軸において、通路幅/建物高さが1を下回っている。

主軸両側の建物が視界に入り、オフィスビル街のような閉塞感を感じ、開放的なキャンパス空間とは言えない。



5. カラースキーム

色彩計画。色のもつ心理的・生理的・物理的な性質を利用して、まとまりのある雰囲気を作るなど、目的に合った配色を行うための設計。

外観

外装材
汚れ防止、ひび割れ防止等、高耐候性に優れた素材を用いる。

	蔵本キャンパス (病院系)	蔵本キャンパス (学部系)	南常三島 キャンパス
ベースカラー			
アクセントカラー			

金物や建具などにアクセントカラーを使用



■ 外観色例 ■

内装

内装仕様
床:ビニールシート張
壁:EP塗装
天井:化粧石膏ボード

	研究室系	講義室系
ベースカラー(壁)		
メインカラー(床)		
アクセントカラー		

内装イメージ



■ アクセントカラー例 ■

トイレ

内装仕様
床:ビニールシート張
壁:化粧ケイカル板張
天井:化粧石膏ボード

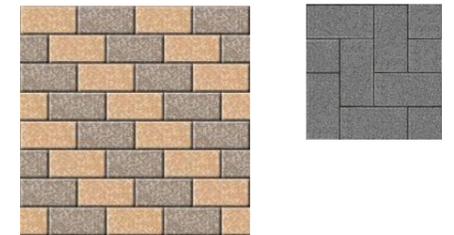
	男子トイレ	女子トイレ	多目的トイレ
ベースカラー			
アクセントカラー			



デザインコード

空間を構成する様々な要素について、配置、素材、各施設のデザインを方向づけるためのルール

- ・豊かな自然に調和する建物
- ・地域や周辺環境への配慮
- ・レンガ舗装、ウッドデッキ等、自然に近い素材
- ・建具等にユニバーシティカラーを使用し、アクセントをつける



■ 舗装イメージ ■



ユニバーシティカラーに用いられている全体の色調は、四国を発して世界に羽ばたく人材を生み出す悠久の流れを象徴する吉野川と、若人の夢を象徴する徳島の青い空、青い海、さらには徳島の誇る特産物である藍の色などをイメージしています。

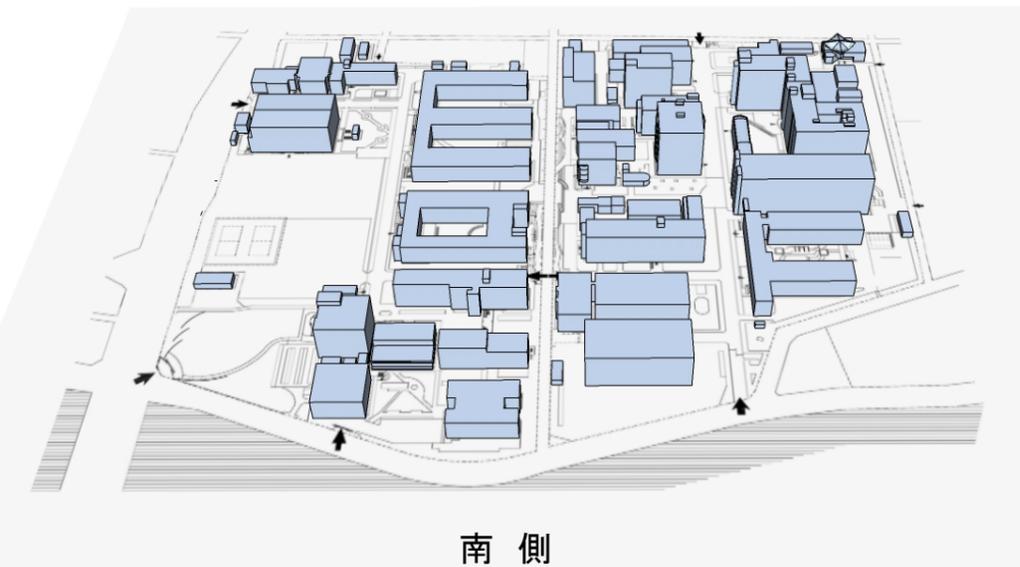
伝統に根ざした本学の誇りを象徴しています。

5-2 南常三島キャンパス

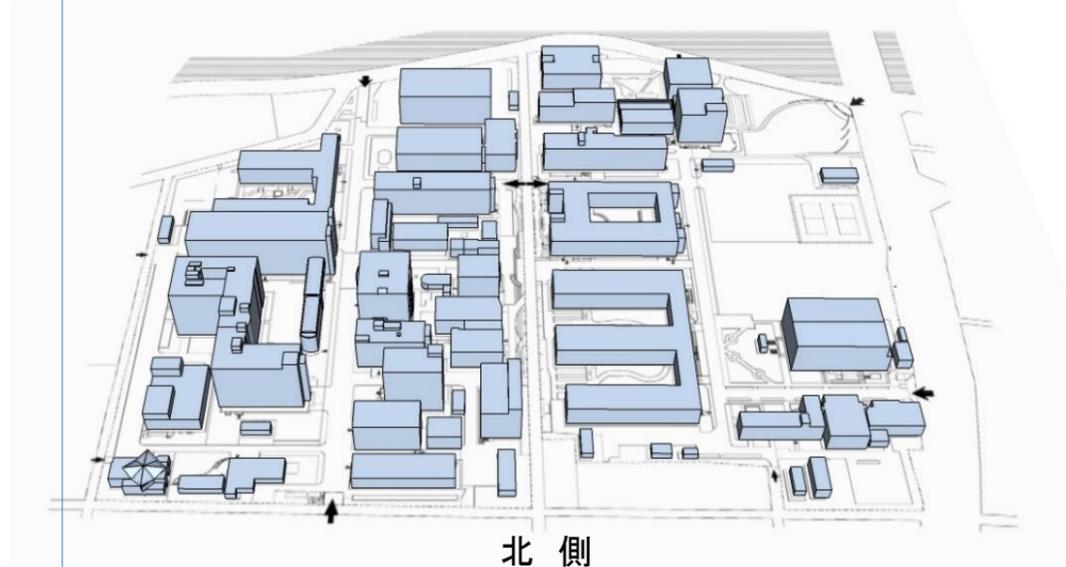
1. キャンパスの概要

南常三島キャンパスは、JR徳島駅より北東に約2kmの徳島市中心部にあり、近くには徳島城跡、南は吉野川の支流である助任川に面し、さらに徳島市のシンボルである眉山を南西に臨むなどアカデミックな雰囲気を醸し出す大学としては絶好のロケーションを持つキャンパスである。

キャンパス内には主に、総合科学部・理工学部・生物資源産業学部の3学部及び一般教育を行う教養教育院等があり、約5,300名の学生が勉学にいそしんでいる。



南側



北側



東側



西側

2. 南常三島キャンパスの現状と課題・方針

■ 現況キャンパスが持つポテンシャル



昭和天皇(皇太子時代)による植樹
(総科2号館北)



ケヤキ並木
(総科2号館南)



池、緑地帯
(第一食堂東)



門柱
(理工学部西側)



シンボルストリート



昭和天皇ご成婚を祝う記念樹
(シンボルストリート)



小溝茂橋胸像
初代学校長
(図書館東)



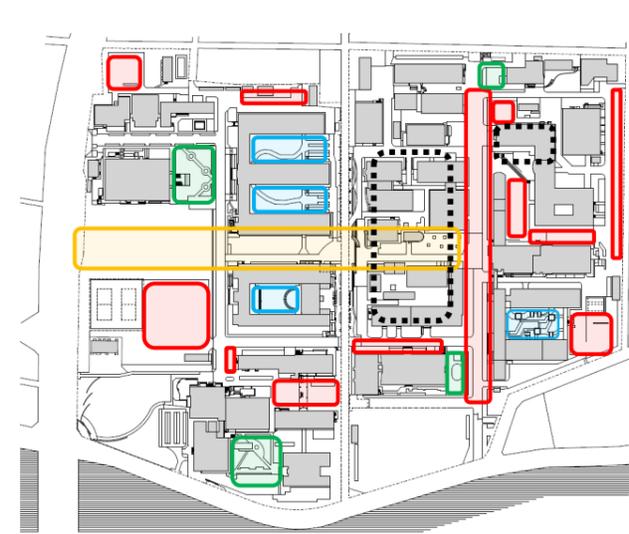
記念庭園、記念碑
(図書館東)

現状調査からポテンシャルを抽出

- ゆとりや潤いのある景観
 - ・ケヤキが茂っており、気持ちの良い歩道
 - ・ポケットパークとしてのパブリックスペース
- 整備された広場やパブリックスペース
 - ・広い緑地空間
 - ・徳島光の八十八箇所に認定されているシンボルストリート
- 普遍的価値を持つモニュメント等
 - ・大正11年徳島高等学校創設当時のまま現存する門柱
 - ・昭和天皇によって植えられた記念樹
 - ・工学部50周年を祝う記念庭園、記念碑
 - ・昭和天皇ご成婚を祝う記念樹

■ 現況キャンパスが抱える問題点

現状調査から問題点を抽出



- 交通計画・動線計画の問題
 - ・駐車場、駐輪場が敷地の中に点在しているため、車両が団地内部を通行し、歩行者と車両動線が、交差している
 - ・学生が構内を主に自転車で移動するため、各建物の出入口周辺に自転車が集中し、歩行者や車両等の通行を妨げている
 - ・十分な駐輪場が確保されていないため、自転車が歩道や車道にあふれている
- 景観が活かされていない
 - ・中庭の整備が活かされていない
- 緑地や植栽帯の計画性がなく有効利用されていない広場やパブリックスペース
 - ・植栽の種類に統一性がない
 - ・屋外空間が豊かに利用できていない
- 意匠性・統一性などのばらつき
 - ・将来の南常三島キャンパスの主軸として、植栽・舗装・建物の壁面線等を統一し景観に配慮する
- 生物資源産業学部施設の分散
 - ・生物資源産業学部の施設が各建物に点在して設置されている

■ キャンパス整備

現況キャンパスが持つポテンシャルを生かしつつ、抱える問題点から、解決していくべき課題を踏まえ、長期的な視点で計画を行う。

(1)ゾーニング

- ・緑地や木々を活用したキャンパスづくり
- ・意匠・景観に富んだキャンパスづくり
- ・各ゾーンごとに特色のあるゾーニング計画

➡ **ゾーニング計画**
P31~

(2)交通

- ・交通計画の見直しによる歩行者にやさしいキャンパスづくり
- ・各施設やキャンパスへのアクセスの向上
- ・障がいのある学生等にやさしいバリアフリー計画

➡ **キャンパス動線計画**
P35~

(3)パブリックスペース

- ・パブリックスペース、オープンスペースの維持管理
- ・空地を活かしたパブリックスペースづくり

➡ **キャンパス空間整備計画**
P39~

(4)緑地の課題

- ・緑地を活かした歩行者路の整備
- ・キャンパスに調和する植栽計画

(5)生物資源産業学部の集約化

- ・南常三島キャンパスプラン検討ワーキンググループにおいて検討

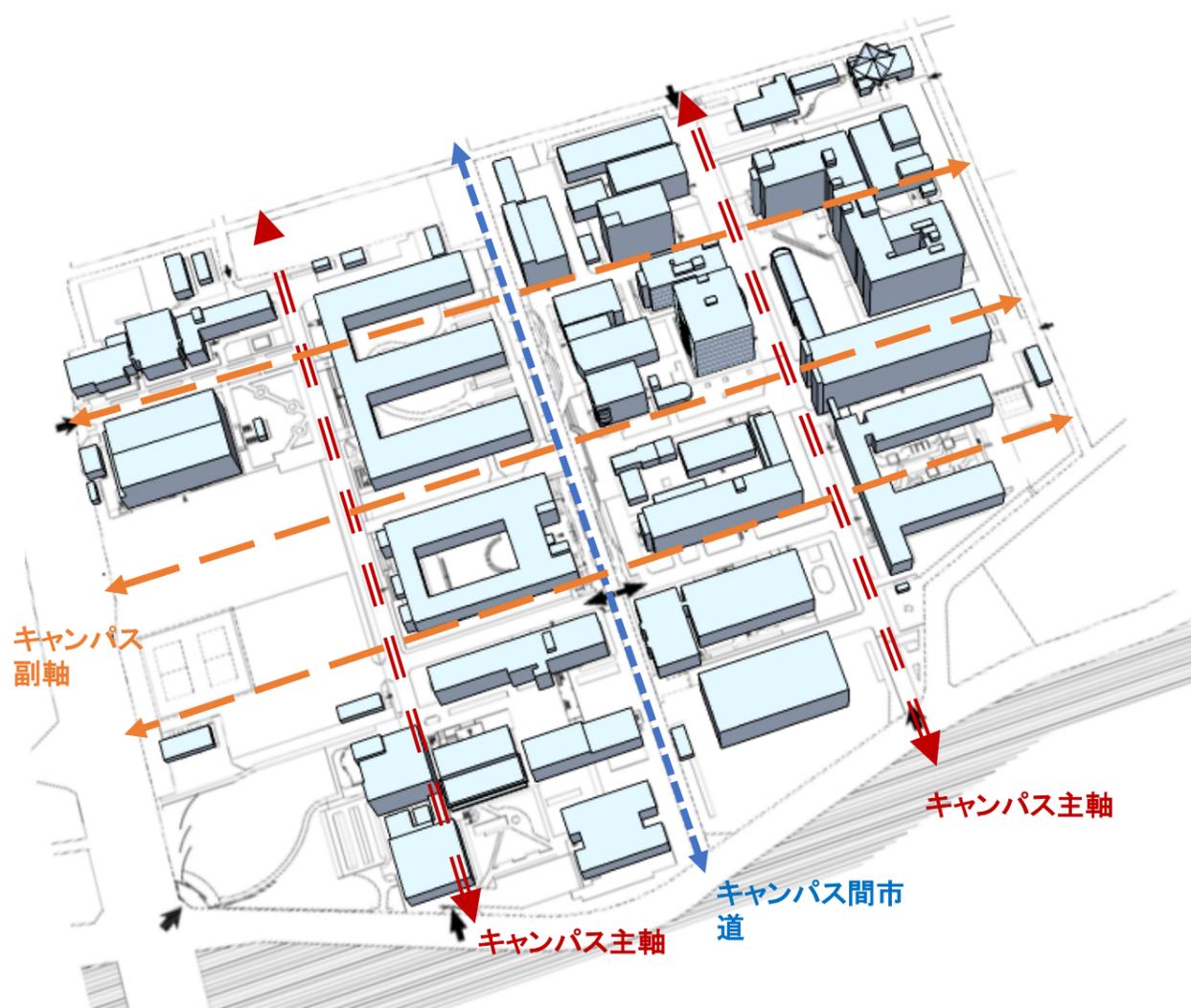
(6)その他

- ・老朽化している施設、設備について、機能を改善するための計画
- ・留学生・外国人研究者等にも対応したサイン計画
- ・シンボルストリートの再整備計画
- ・学部再編による新学部設置への対応

3. ゾーニング計画

<軸線>

キャンパス形成時からの動線をキャンパス軸として位置付け展開を図る



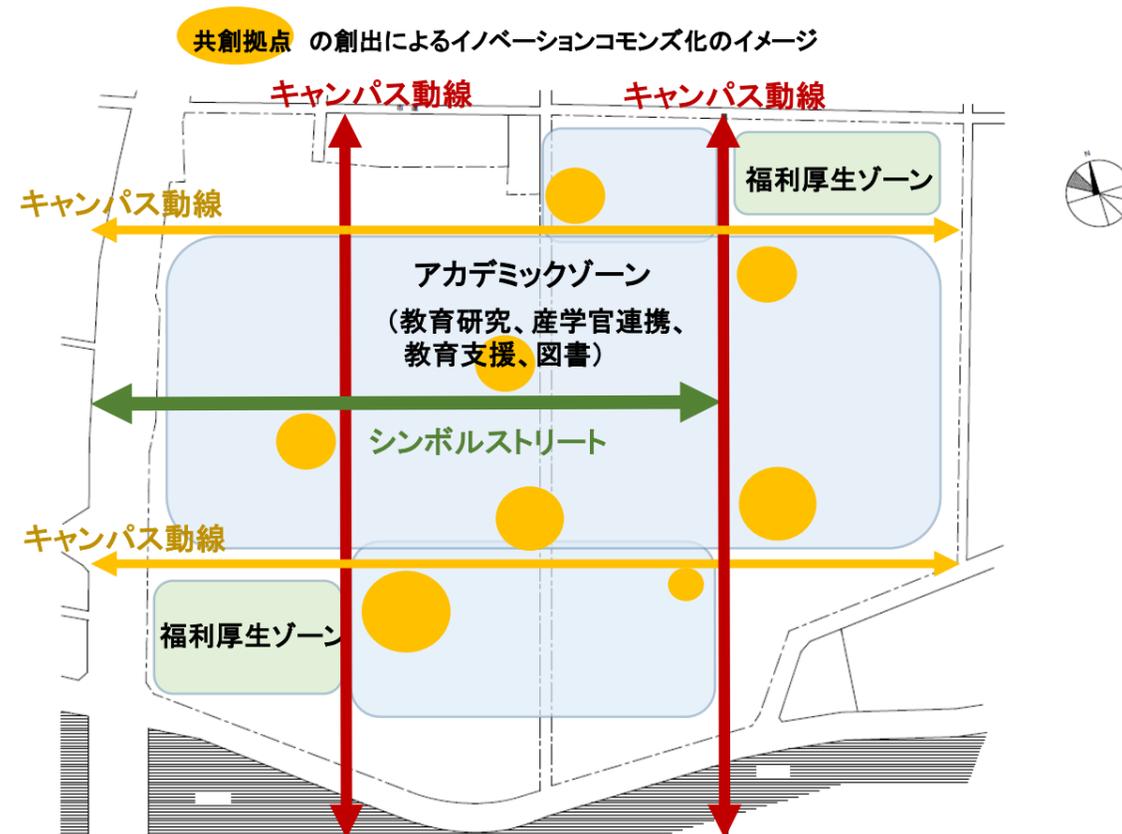
南常三島キャンパス形成当時より、キャンパスの間を、市道が分断する形で走っており、常時車も通行している。また自転車の通行量も多い。

市道に平行して、主軸が形成されており、多くの歩行者が主軸に沿って構内を移動している。

主軸と直交する形で副軸が形成されており、西側の国道や学生の下宿先の多い東側からの移動動線となっている。現在の国道側の出入口がわかりにくい等の問題点もあるため、シンボルストリートを国道まで延伸して、大きな軸を設けるなどの検討も必要である。

<ゾーニング>

あらゆるプレイヤーが共に創造活動を展開する「共創」の拠点を構築していき、キャンパス全体をイノベーション・コモンズ(共創拠点)へ推進すべく柔軟性を持たせたゾーニング計画とする



南常三島キャンパスは、キャンパス当初の計画通り、市道を挟み西側と東側を教育研究ゾーンとして形成しているが、平成28年度の新設された生物資源産業学部のゾーニングが不明確となっている。

学部にとらわれないフレキシブルな研究を推進するため、分断している市道や市道に面するスペース整備を行い、二つのキャンパスが密接につながるように計画していく必要がある。

将来ゾーニングとしては、大学の教育研究方針および社会情勢や国の方針転換等に対応できるよう柔軟性を持ったキャンパス計画を基本とする。

ゾーニングの種類としては、キャンパス全体が有機的に連携して共創活動する拠点形成の実現に向けて、現状の教育研究・産学官連携・運動施設・教育支援・図書ゾーンの区分を将来的な改築・増築の配置計画に柔軟性を持たせた一体的なゾーンとするアカデミックゾーンと、福利厚生ゾーンの大きく2つのゾーンに区分する。また、基本理念に掲げている「地域に開かれたキャンパス」のインターフェイスとして、助任の丘(パブリックスペース)にその役割を持たせている。

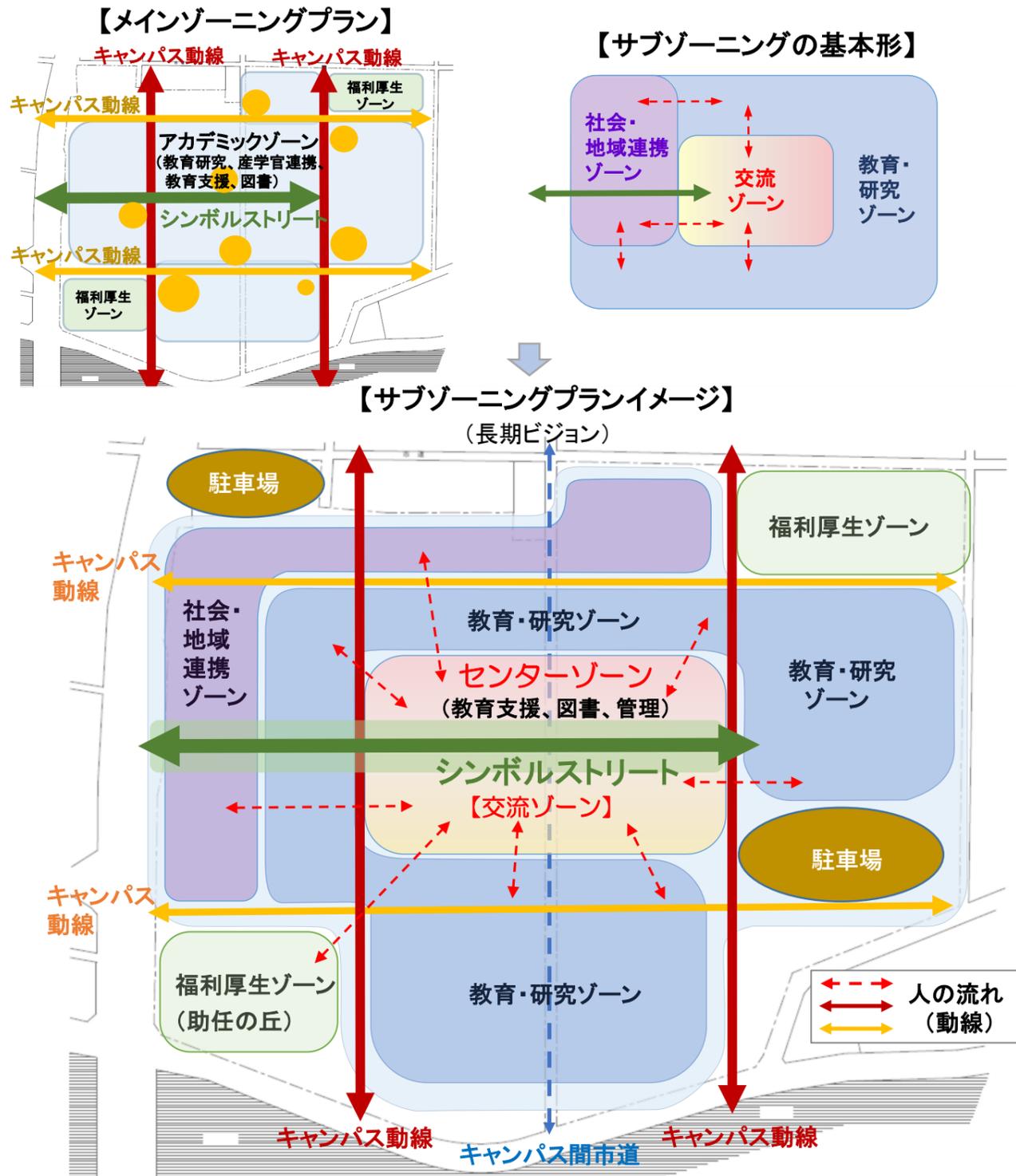
新たな施設を整備する際には、既設の類似施設を集約した上で、敷地の利用密度を高めるためにも建物の高層化を図ることとするが、シンボルストリート周囲は極力視界を遮らない計画とし、緑地帯からセットバックした広がりのあるキャンパス空間を確保する。

<長期ビジョン(ゾーニング)>

キャンパスの軸線や特性を活かしたゾーニング計画

キャンパスのゾーンフレーム(骨格)は長期にわたって不変な部分とし、アカデミックゾーンは社会の変化や大学ビジョン等、あらゆる変化に対応が可能な部分としている。

次段階において、アカデミックゾーンの発展形(長期ビジョン)として、メインゾーニングを形成するサブゾーニングプランを一つの例示として下記に示す。



【サブゾーニングプラン】

アカデミックゾーン

センターゾーン【交流ゾーン】

図書館や交流施設等のパブリックな空間や、学生の相談窓口である学生支援施設等をシンボルストリートに面したキャンパス中心部に配置することで、他のゾーンから容易にアクセスでき、学生の利便性向上および学生、教職員、企業関係者等、地域や国境を越えた大学内外の多種多様なステークホルダーが行き交い、集い、活発な活動・交流・連携を促進できる。

教育・研究ゾーン

講義棟、実験棟、研究棟、実習棟等、教育研究活動の拠点となるゾーンをセンターゾーン(交流ゾーン)をとりまく形で配置することで、キャンパス全体の利便性を図るとともに、コモンスペースを適所に配置し、閉鎖的になりがちな教育・研究ゾーンに憩いの場を創出する。

社会・地域連携ゾーン

南常三島キャンパスへのアクセス動線である国道11号線に面し、キャンパスのエントランスとしての役割かつ、学外との垣根のないオープンな空間として、大学の魅力を発信していけるよう、地域や企業、公的研究機関との活発な連携・交流を深める環境を整備し、新たなイノベーションの創出や地域創生を図る。また、教育・研究ゾーンと広く隣接させることで、様々な場所での共創活動が期待できる。

福利厚生ゾーン

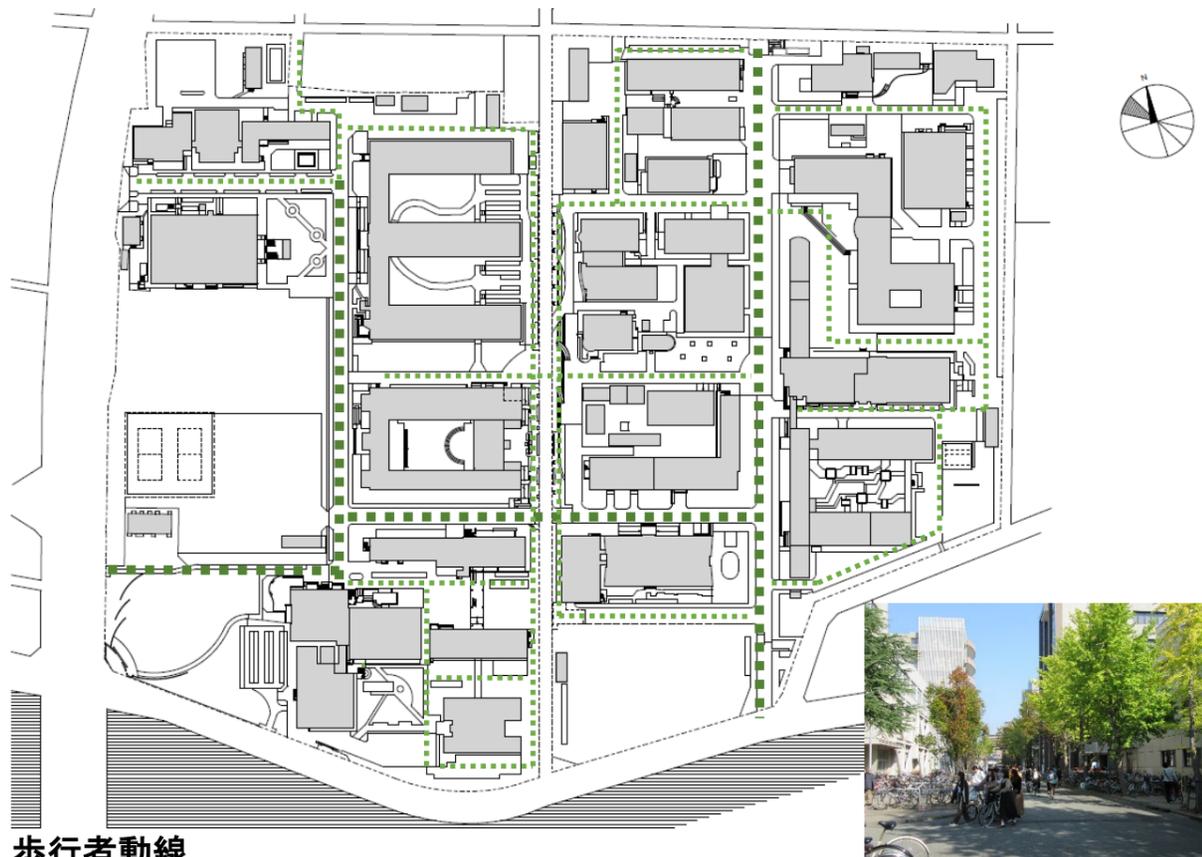
大学食堂や売店等の福利厚生施設をキャンパスの両端である南西と北東に配置し、集中する昼休み等の利用者の分散化を図るとともに、食堂周辺に憩い空間として、リフレッシュスペースや庭園等を一体的に整備を図る。助任の丘については、潤いあるグリーン空間(芝生広場)として活用を図るとともに、シンボルストリートとあわせて地域に開かれた徳島大学の「顔」として、地域交流の促進の場となるよう更なる施設の充実を図っていく。

駐車場

福利厚生ゾーンと対称に駐車場を集約配置し、キャンパス中心への車両の進入を極力抑えるとともに、特にメインとなる南東駐車場は立体化を図り、相応の駐車台数を確保する。また、駐輪場については、教育・研究ゾーン内を含め、外周部の適所に集約配置を図っていく。

4. キャンパス動線計画

(1) キャンパス動線現状



歩行者動線

<歩行者動線>

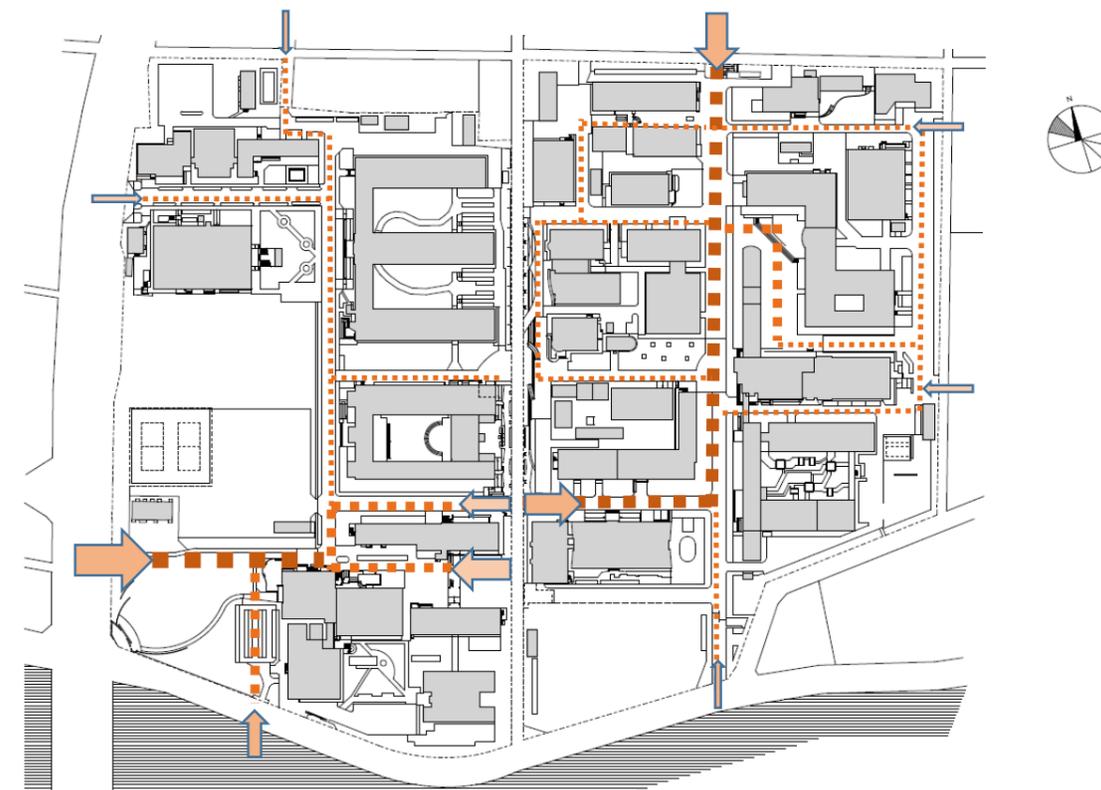
・総合科学部地区、理工学部地区の主軸は歩行者が多く、教養教育院と共通講義棟の最短コースとなる副軸の歩行者も多い。

<自転車動線>

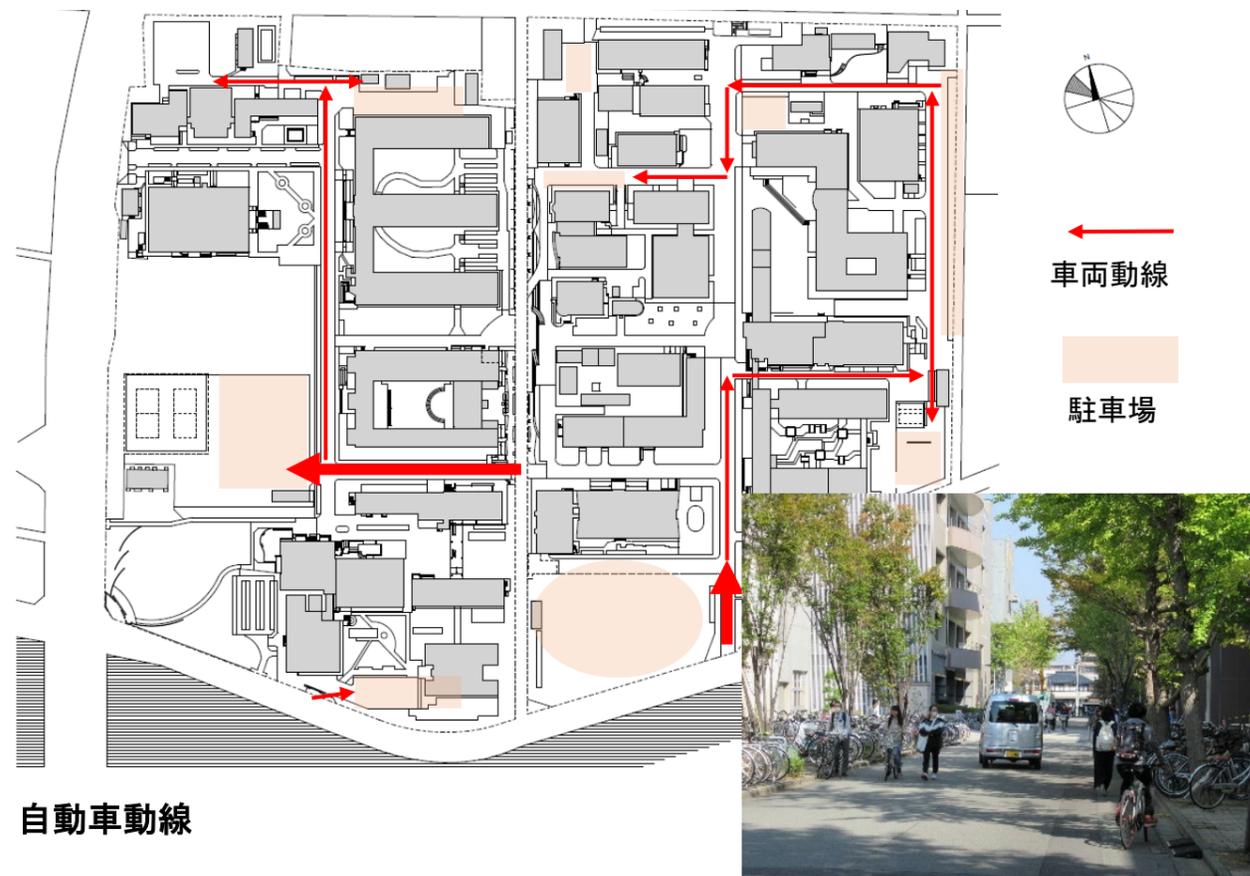
・総合科学部地区は教養教育4号館・5号館で多くの学生が授業を受けるため、南西の入り口から進入し、建物周辺に駐輪を行っている。
・理工学部側はほぼ中央に共通講義棟があるため、主動線の北側及び西側の市道からの進入が多く、共通講義棟周辺に駐輪を行っている。

<自動車動線>

・総合科学部地区はメイン駐車場がほぼ中央にあるため、自動車動線が市道からキャンパスを横断する形となっている。また、北側にも駐車場が存在するため総合科学部地区の主軸を自動車が通行している。
・理工学部地区のメイン駐車場は南側の市道に接するため、市道から直接駐車できるが、北側、東側の駐車場に進入するため主軸を自動車が通行している。



自転車動線

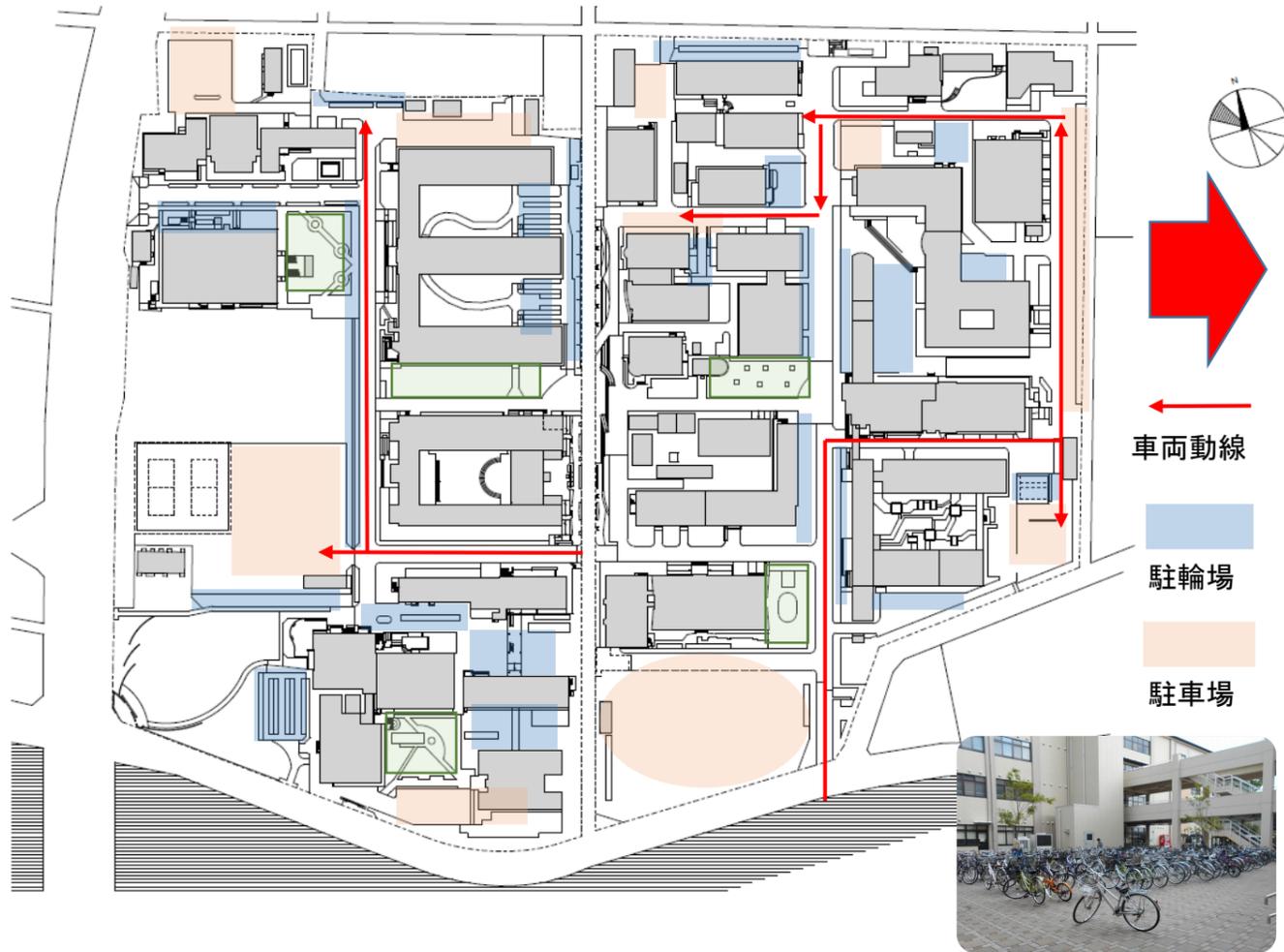


自動車動線

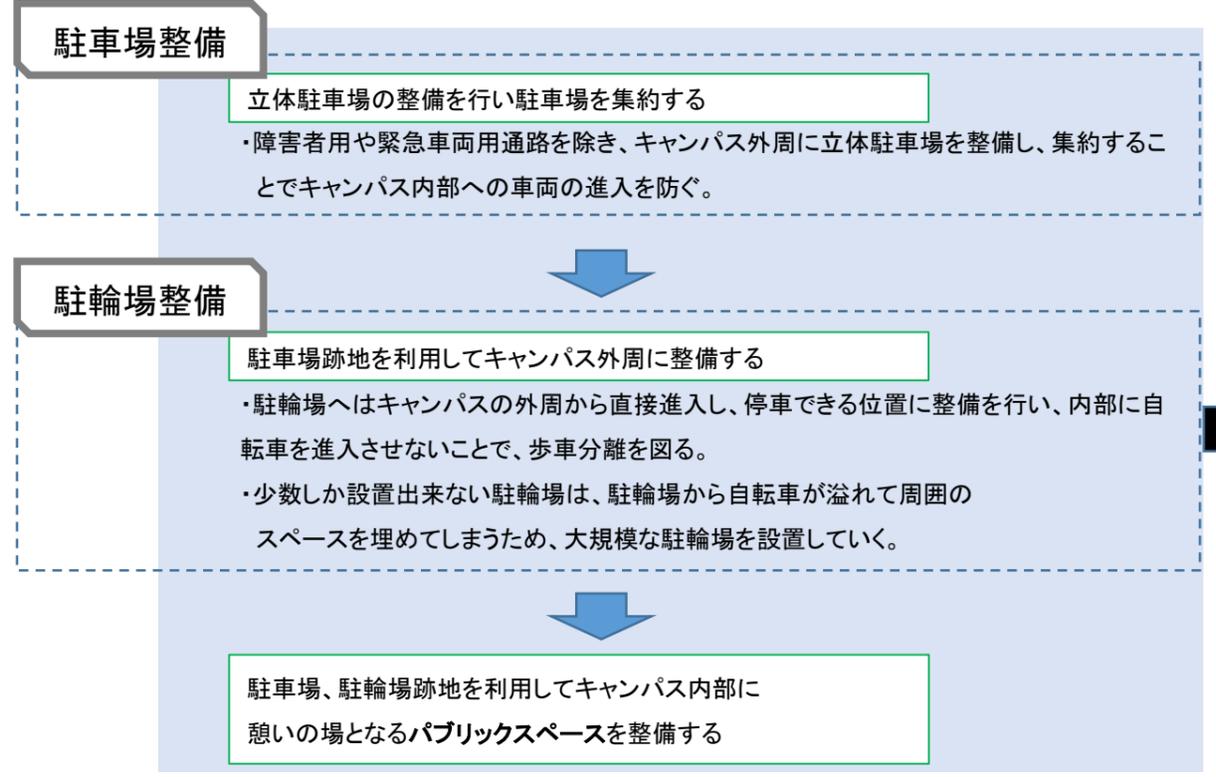
車道を車と歩行者が混在し危険な状態

(2) キャンパス動線問題点

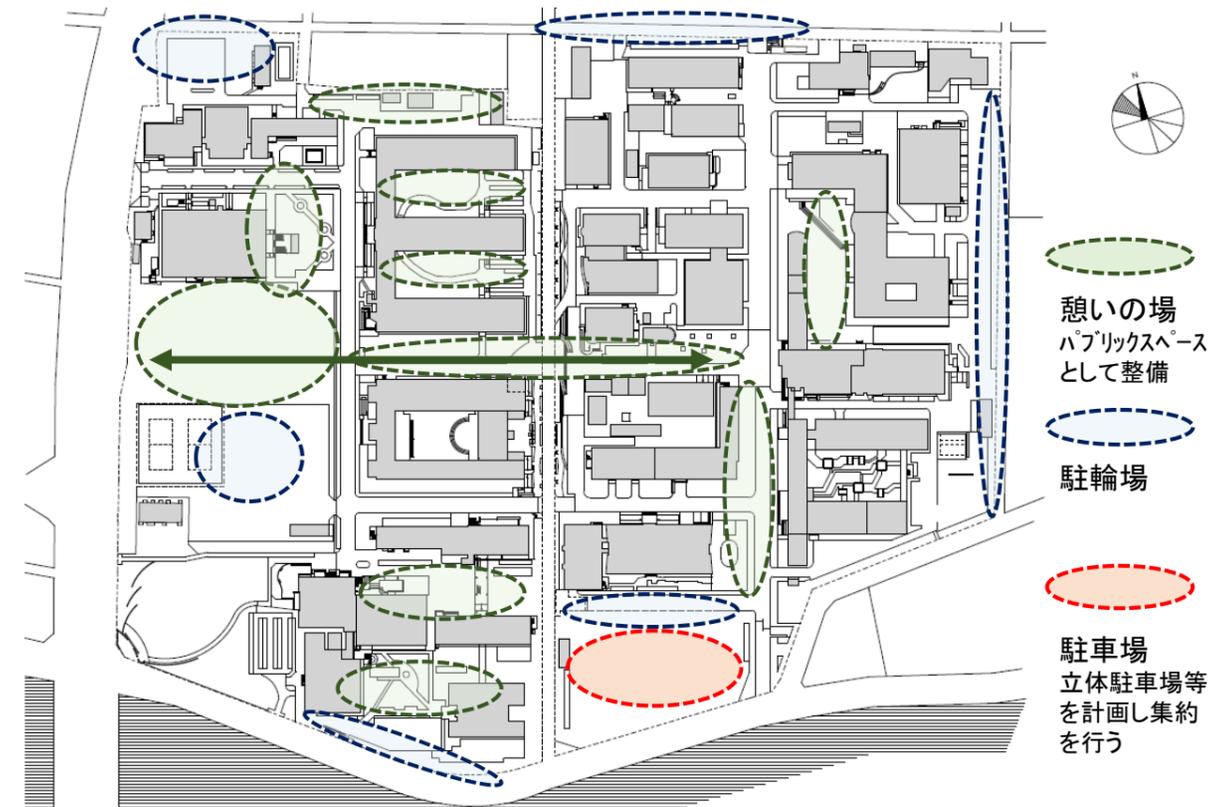
- ・駐車場、駐輪場が敷地の中に点在しているため、車両がキャンパス内部を通行し、歩行者と車両動線が交錯している。
- ・十分な駐輪場が確保されていないため、自転車が歩道や車道にあふれている。
- ・歩道が臨時駐輪場として使用されているため、歩行者通路が確保できていない。
また、避難通路がふさがれていて非常に危険な状態である。
- ・乱雑な駐輪風景が景観を損ね、アメニティ空間を圧迫している。
- ・駐車場・駐輪場を設置するまとまったスペースがない。
- ・学生が授業間の教室移動を自転車で行っているため、休憩時間の通行量が激しい。



(3) キャンパス動線整備方針



詳細は別添整備計画により立案



5. キャンパス空間整備計画(パブリックスペース・景観)

(1) キャンパス空間整備計画問題点

◎ 閉鎖的で分かりにくいキャンパス

- ・南常三島キャンパスは周辺を高い塀や柵で覆われており、外部から遮断されたキャンパスとなっている。植栽に覆われ構内の様子が視認できず、学外者は近寄りたがたい雰囲気である。特に国道に面した部分は2mほどの塀があり、地域に対して開かれていることが望まれる今、外部に対して閉鎖的で威圧的である。
- ・南常三島キャンパスの顔が分かりにくく、キャンパスのシンボルが存在しない。LED時計のある共通講義棟前のシンボルストリートも途中で分断されている状態であり、シンボルとして活用できていない。
- ・学生が集まることのできる憩いの場やシンボルとなる場所がない。
- ・食堂から溢れる学生が多く、学生が飲食などに使用できる場所を設置する必要がある。
- ・東側の入構口が狭く通行が困難であったり、市道の通行車両が確認しづらく飛び出しが多いため、統一されたサイクルゲートや車止めの整備が必要である。
- ・大学北側、東側の市道は外灯が少なく道路幅も狭い上に、多くの学生が通行しているため、安全上・防犯上問題がある。

◎ 景観

- ・運動場の使用頻度が低く、除草処理を年数回行っているが常に草が伸びている。
- ・用途不明で中途半端な土地が点在している。(図書館南駐車場の駐輪場西側、電気棟南側)
- ・高木の手入れがされておらず、幹が空洞化しており、強風で倒木の恐れがある。また、敷地外に植栽が越境したり、葉や果実の落下、鳥のフン害などの検討も必要であり、植栽に計画性や一貫性が無く、うっそうとしている場所や、景観を損ねている場所がある。
- ・キャンパス内の池が有効利用されておらず、水を張った状態で維持管理することが難しい。

◎ ユニバーサルデザイン

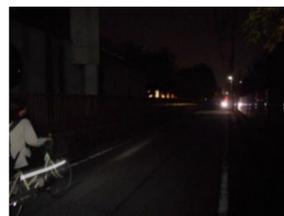
- ・施設の案内標識は、デザインに統一性がなく、配置も計画性がないため、行き先や現在地が分かりにくいキャンパスとなっている。
- ・増加する留学生・外国人研究者に対して、建物や工作物といった施設の対応が計画的に行われていない。
- ・階段の手すりがなく、障害者便所が整備されていないなど、不特定多数の方や身体の不自由な方が自由に利用できない建物や場所がある。



閉鎖的な西側の塀



有効利用されてない池



狭くて暗い東側公道

(2) キャンパス空間整備計画整備方針

パブリックスペース

- ・コストをかけずに既存スペースを利用して、人が集まれるスペースを創出していく
- ・既存樹木の活用法や今後必要な植栽の計画など維持管理費の検討も含めて計画する必要がある。
- ・学生の集まることができる憩いの場を設置する。
- ・キャンパスのシンボルとしてシンボルストリートを活用する。

困障整備

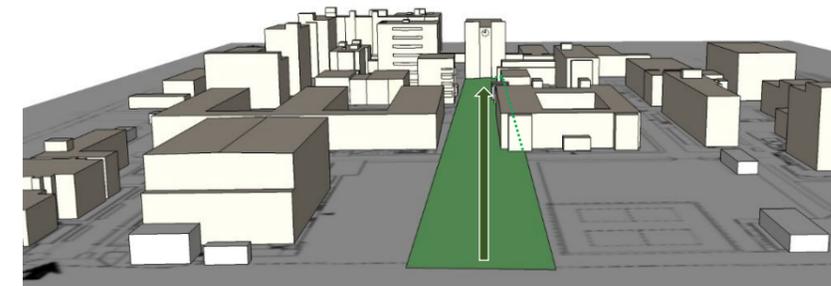
- ・国道に面した西側の塀及び植栽整備を行うことで、地域に対して開放感を出し、大学に入りやすい雰囲気作りを行う
- ・東側の塀は安全面を考慮し、視認しやすい塀に整備を行う
- ・高木の整備や高い塀は腰の高さまで撤去して、上部をフェンス等に変更する。

バリアフリー

- ・バリアフリーマップを作成して周知を行う。また、整備必要箇所の抽出及び計画を行う
- ・地域に開かれたキャンパスづくりのために、不特定多数の方や身体の不自由な方も自由に利用できる建物や場所を増やしていく。

サイン整備

- ・デザインを統一し、多言語表示を行い、キャンパスを認識しやすくする
- ・案内サインは初めての人にも分かり易いように、キャンパス入口近辺に設置する。
- ・利用者が多い場所を中心に情報を配置し、目的地まで情報がとぎれないように整備する。



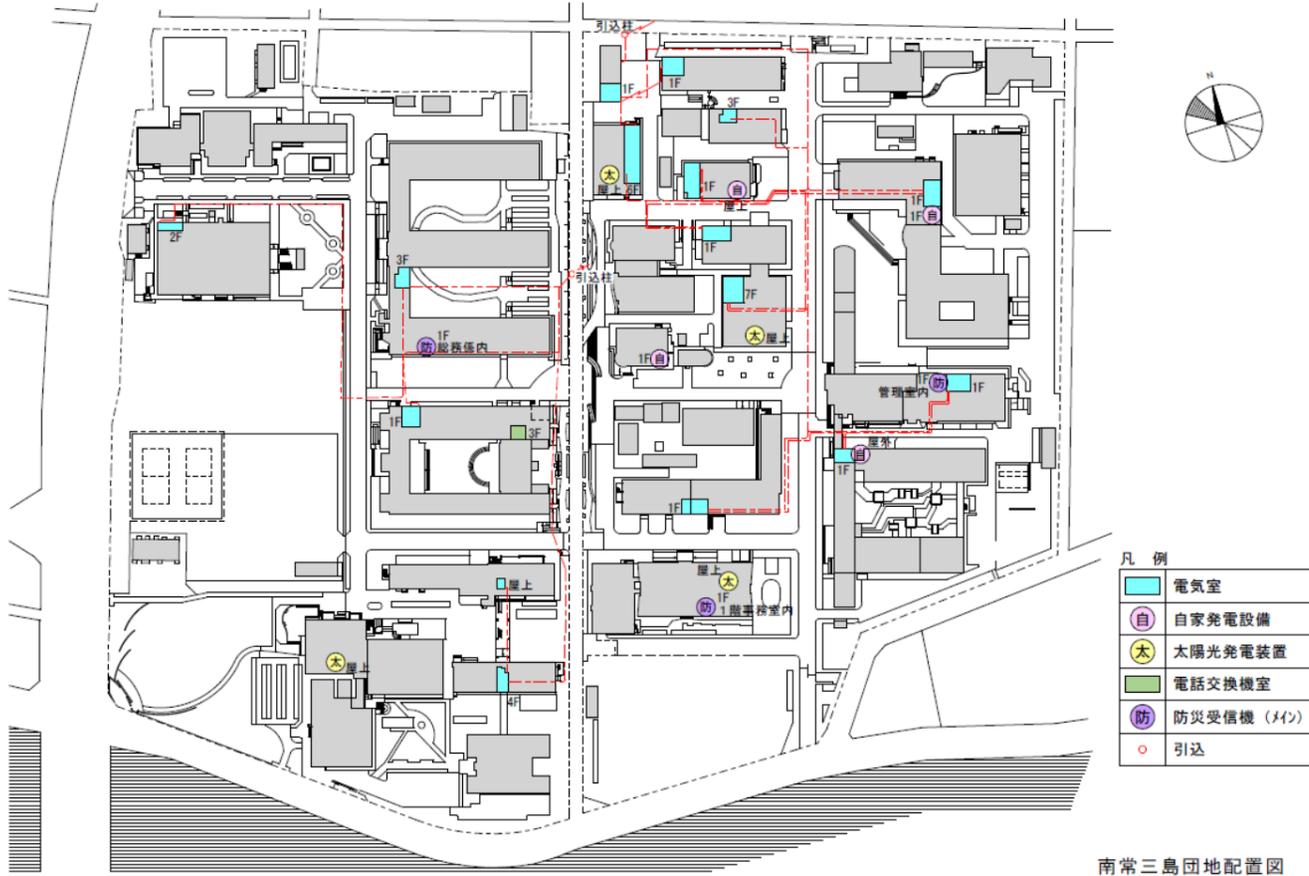
<シンボルストリート>

今後整備を行い南常三島キャンパスのシンボルとして活用していく

詳細は別添整備計画により立案

6. ライフライン計画

■ 電気設備関係



(1) 電力設備計画

- ・経年25年以上経過している配線及び自家発電設備等については、計画的に更新を行う。
- ・配線の更新に際しては、極力既設共同溝を利用し、やむをえず埋設する場合は、耐震性のある配管を使用する。
- ・電気室を改修する際は、地震・津波・洪水等の災害時にも機能停止対策を踏まえた計画とする。
- ・理工学部変電設備については、ポストLEDフォトニクス研究所6階電気室へ移転する。



情報センター院生棟 自家発電装置



ポストLEDフォトニクス研究所 6階電気室

(2) 電話・情報通信設備計画

- ・経年25年以上経過している配線については、基幹整備に合わせて、計画的に更新を行う。
- ・電話交換機及び防災受信機等については、補修用部品のメーカー保有期限を参考に計画的に更新を行う。
- ・屋外通信線(LAN)の更新と無線化の範囲拡大については、導入するネットワークシステムの構成により配線種別も異なるため、情報センターによるネットワーク基盤整備に併せて行う。



南常三島キャンパス 電話交換機設備



共通講義棟 防災受信盤

南常三島キャンパス

総合科学部地区

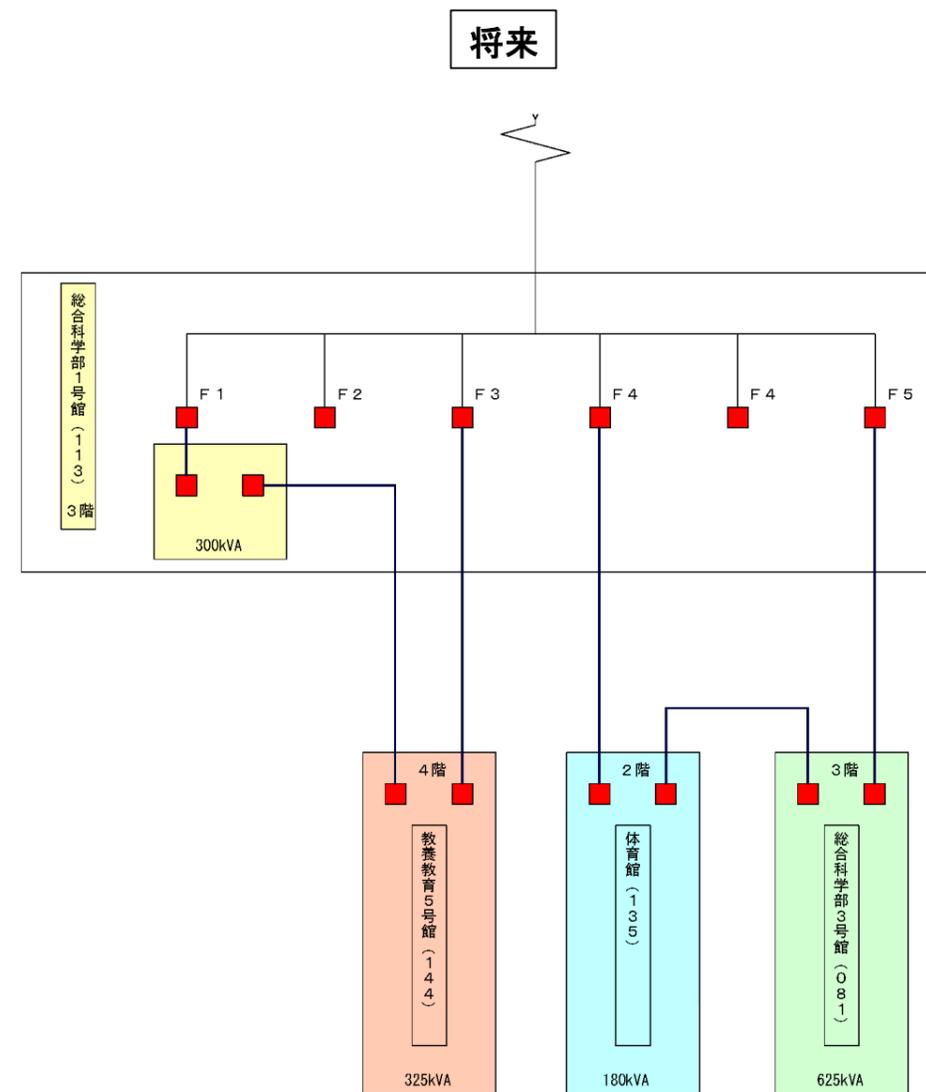
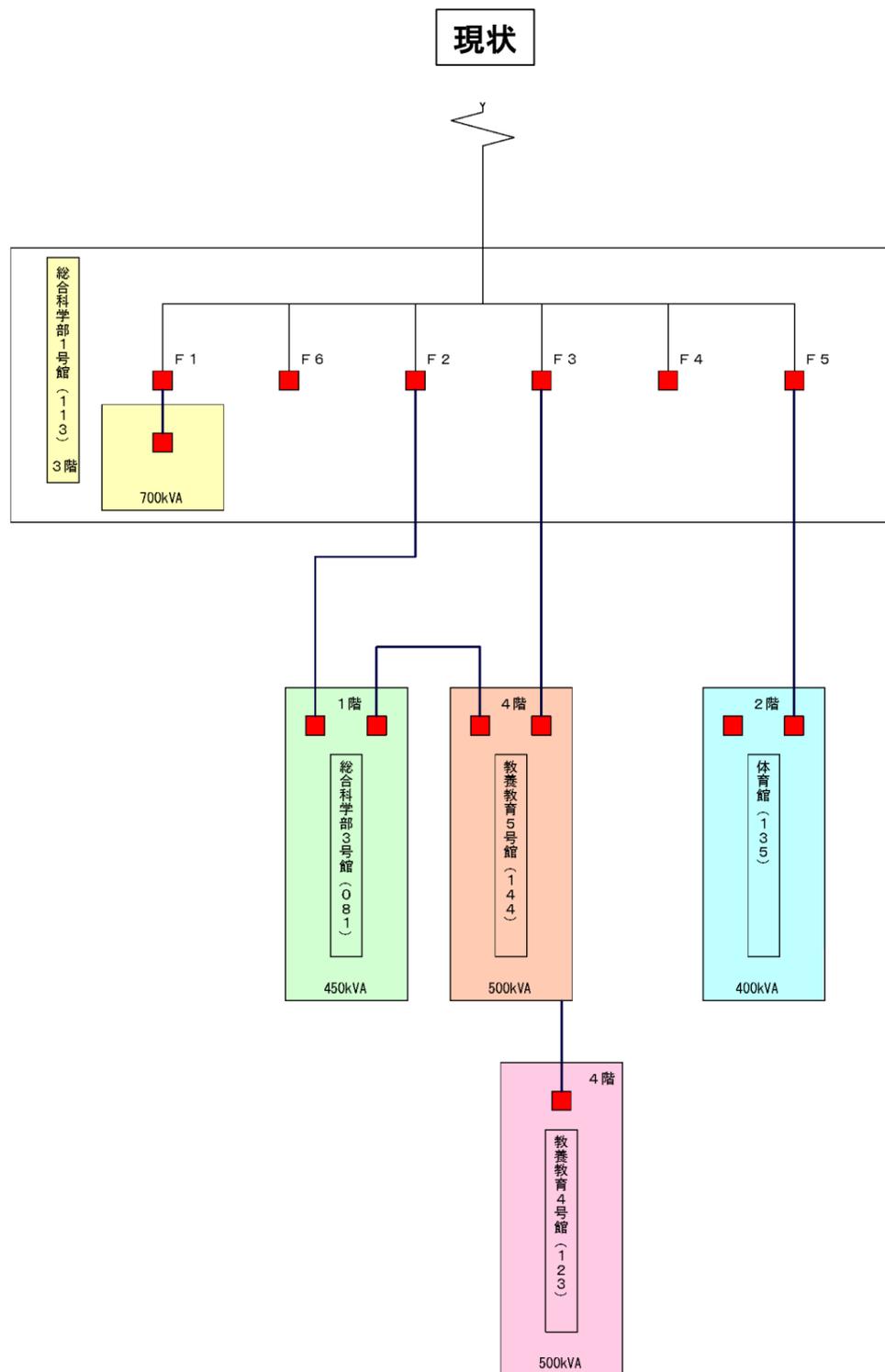
- | | |
|------------|---------------------|
| ① 引込み | ① 埋設管路式で電気室に引込み |
| ② 回線数 | ② 高圧6.6kV 1回線 |
| ③ 変電設備容量 | ③ 高圧変電設備(2, 630kVA) |
| ④ 電気室 | ④ 5箇所 ループ受電方式 |
| ⑤ 契約電力 | ⑤ 742kW |
| ⑥ 契約種別 | ⑥ 業務用高負荷率型電力 |
| ⑦ 構内配線 | ⑦ 埋設管路式 |
| ⑧ 自家発電装置 | ⑧ なし |
| ⑨ 太陽光発電装置 | ⑨ 1台 10kW(2015年) |
| ⑩ 電話交換機設備 | ⑩ 電子デジタル交換機(2003年) |
| ⑪ 情報設備 | ⑪ 学内LAN |
| ⑫ 自動火災報知設備 | ⑫ R型受信機(2009年) |
| ⑬ 放送設備 | ⑬ 非常用・業務用兼用(2009年) |

理工学部地区

- | | |
|------------|--------------------------------|
| ① 引込み | ① 埋設管路式で電気室に引込み |
| ② 回線数 | ② 高圧6.6kV 1回線 |
| ③ 変電設備容量 | ③ 高圧変電設備(7, 550kVA) |
| ④ 電気室 | ④ 11箇所 ループ受電方式 |
| ⑤ 契約電力 | ⑤ 2,141kW |
| ⑥ 契約種別 | ⑥ 高圧B季節別時間帯別電力II型(蓄熱調整契約) |
| ⑦ 構内配線 | ⑦ 埋設管路式・共同溝配線・ピット配線 |
| ⑧ 自家発電装置 | ⑧ 非常用4台 545kVA |
| ⑨ 太陽光発電装置 | ⑨ 3台 80kW(2002年・2009年・2014年) |
| ⑩ 電話交換機設備 | ⑩ 電子デジタル交換機(2003年)(総合科学部地区に設置) |
| ⑪ 情報設備 | ⑪ 学内LAN |
| ⑫ 自動火災報知設備 | ⑫ R型受信機(2019年) |
| ⑬ 放送設備 | ⑬ 非常用・業務用兼用(2013年) |

【参考】送電系統計画(将来案)

総合科学部地区 送電系統図

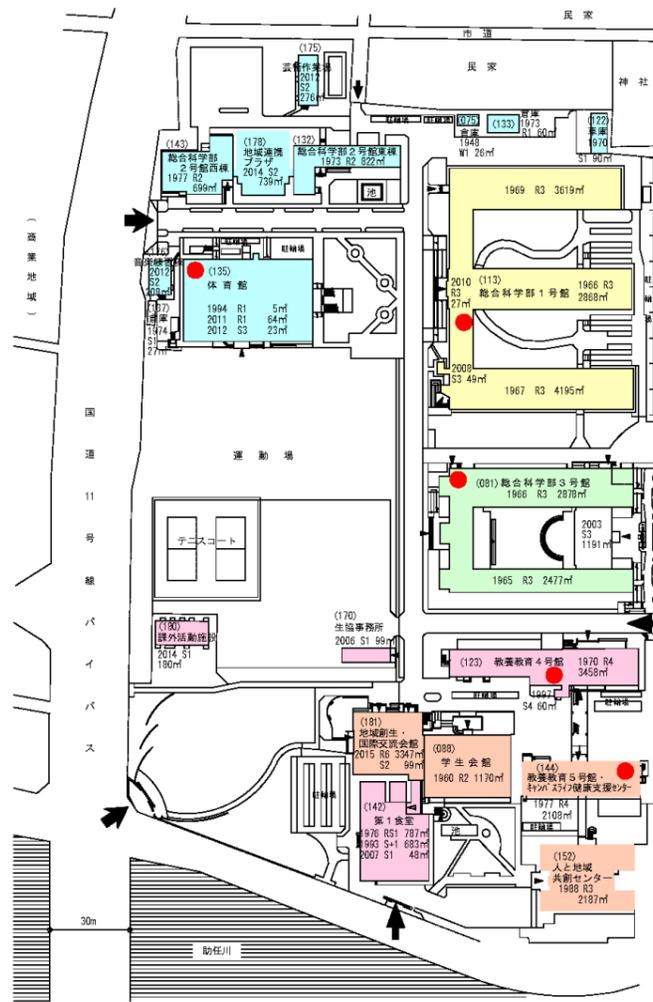


【将来構想】

- ・送電系統を見直し、各フィーダーの集約・統合および負荷容量を平準化することで、不均衡を解消する。
 - 教養教育4号館 電気室を総合科学部3号館 電気室に集約・統合
- ・フィーダー毎のサブ変電所数を2箇所(系統)までとすることで、事故時の停電リスクを回避する。
- ・フィーダー毎の送電を二重化(ループ)することで、電源供給の信頼性向上を図る。
 - 総合科学部1号館と教養教育5号館および総合科学部3号館と体育館をそれぞれ同一系統(サブ変電所2箇所まで)にまとめ、二重化
- ・受変電設備を高層化することで、大規模災害時等の浸水対策を図る。
 - 各電気室を吉野川氾濫時の想定水深5m以上の階層に配置

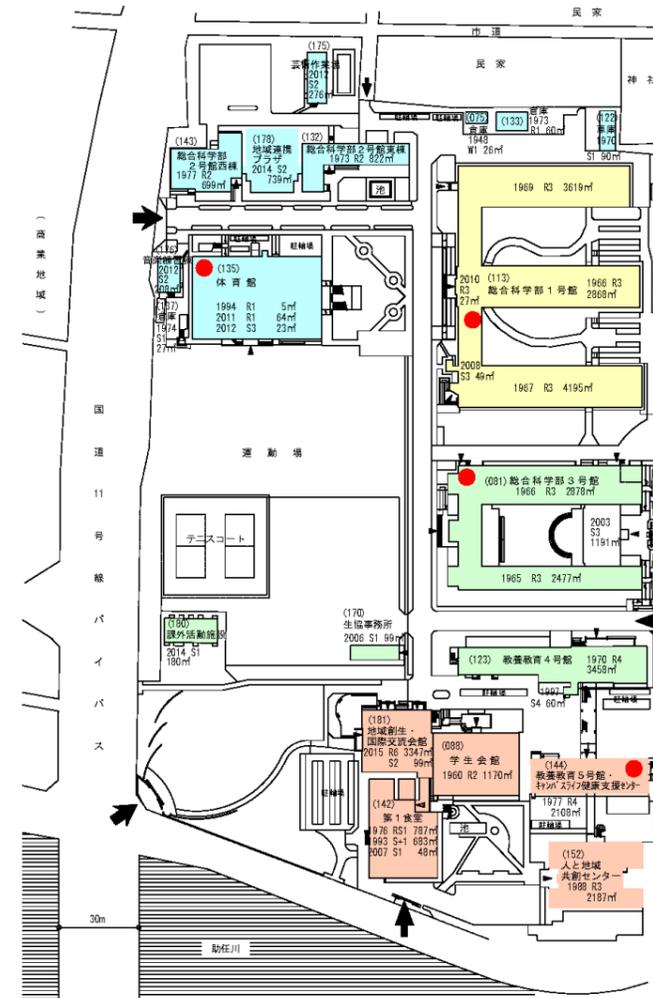
総合科学部地区 配置図(電気室)

現状



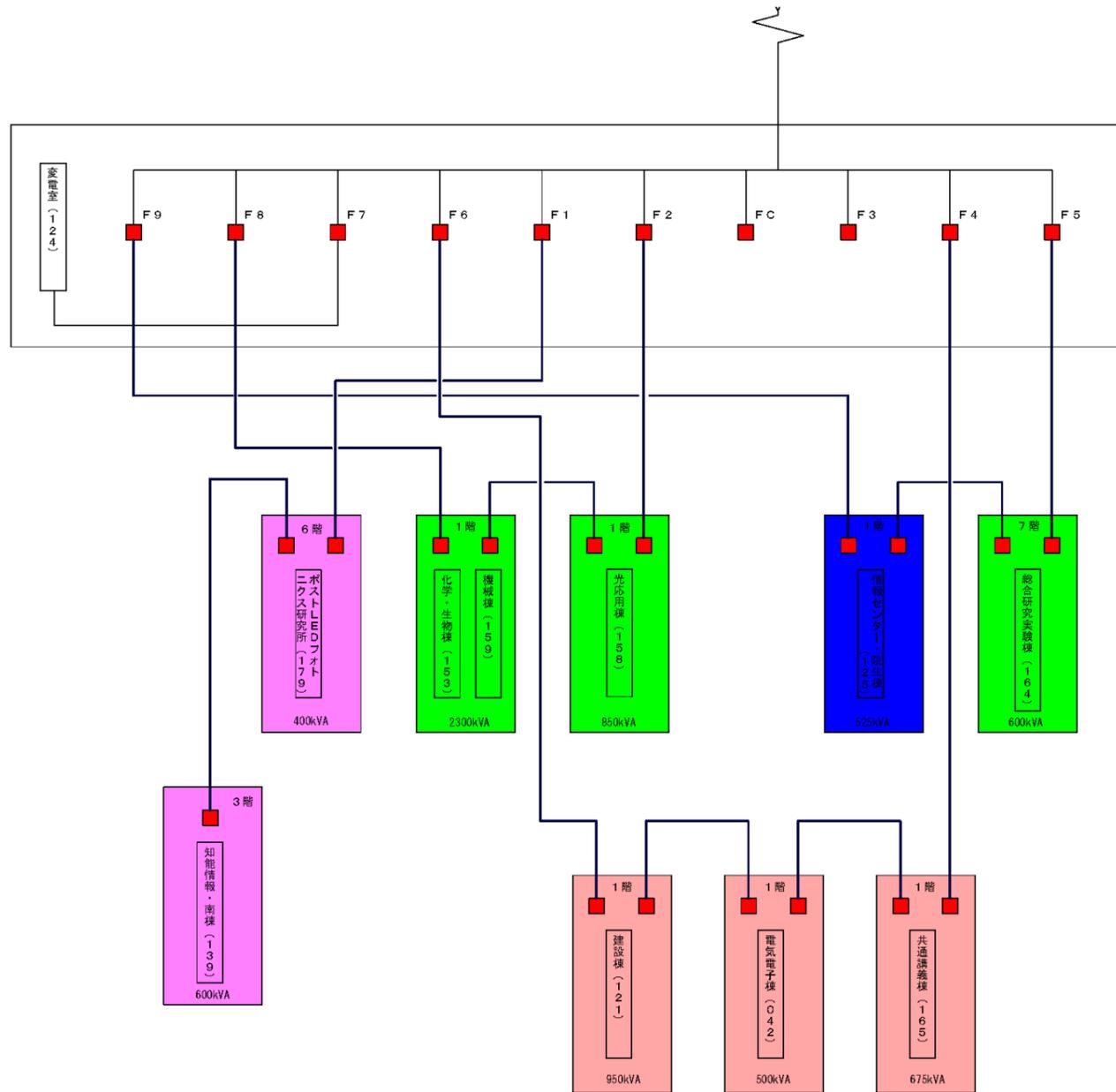
● : 電気室

将来

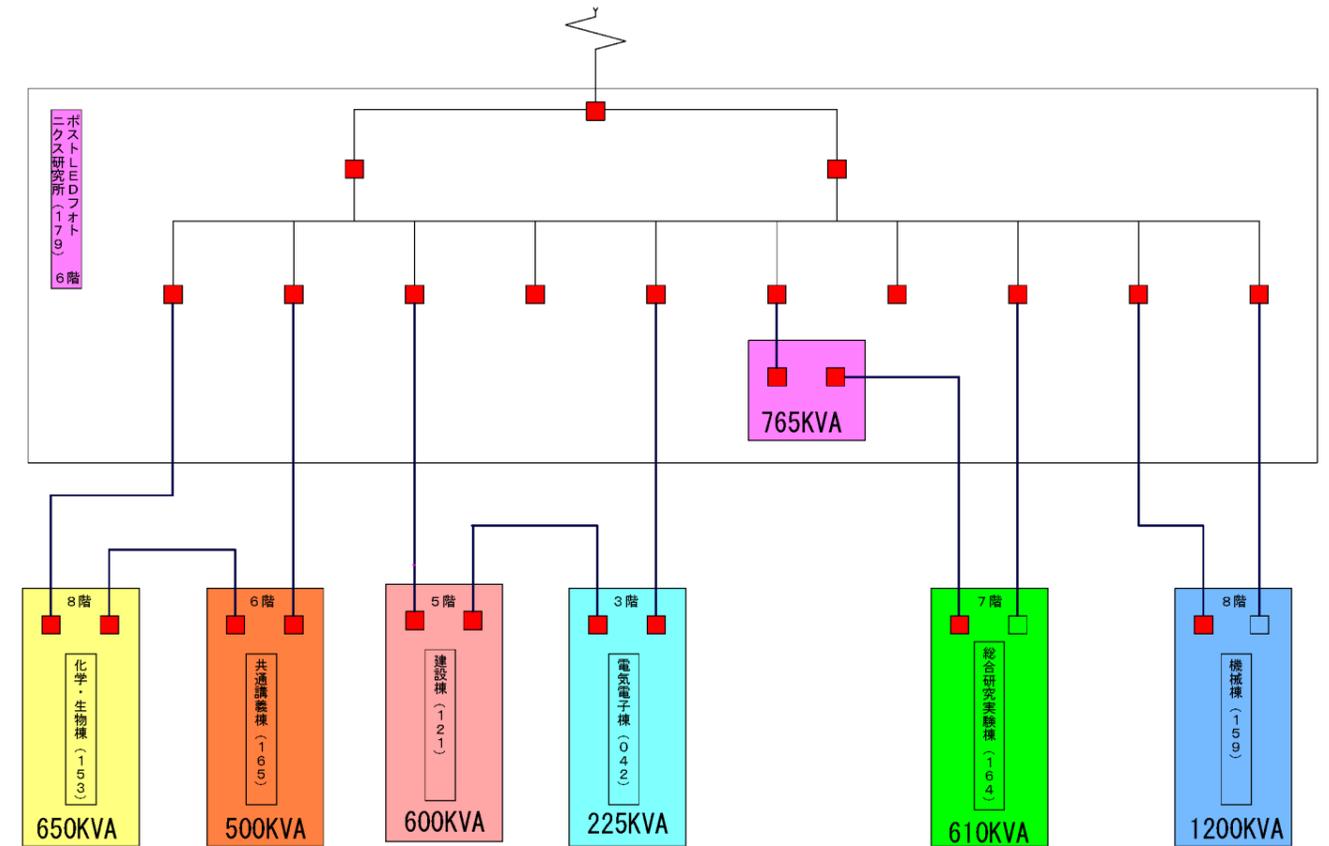


理工学部地区 送電系統図

現状



将来



【将来構想】

- ・送電系統を見直し、各フィーダーの集約・統合および負荷容量を平準化することで、不均衡を解消する。
 - 情報センター・院生棟、知能情報・南棟 各電気室をポストLEDフォトニクス研究所電気室に集約・統合
 - 光応用棟電気室を総合研究実験棟電気室に集約・統合
 - 化学・生物棟電気室から負荷の大きい機械棟容量分を切り離し、平準化
- ・フィーダー毎のサブ変電所数を2箇所(系統)までとすることで、事故時の停電リスクを回避する。
- ・フィーダー毎の送電を二重化(ループ)することで、電源供給の信頼性向上を図る。
 - 化学・生物棟と共通講義棟、建設棟と電気電子棟、およびポストLEDフォトニクス研究所と総合研究実験棟をそれぞれ同一系統(サブ変電所2箇所まで)にまとめ、二重化
 - 機械棟系統は単独系統にて二重化
- ・受変電設備を高層化することで、大規模災害時等の浸水対策を図る。
 - 変電室を、ポストLEDフォトニクス研究所6階電気室に移転
 - 各電気室を吉野川氾濫時の想定水深5m以上の階層に配置

理工学部地区 配置図(電気室)

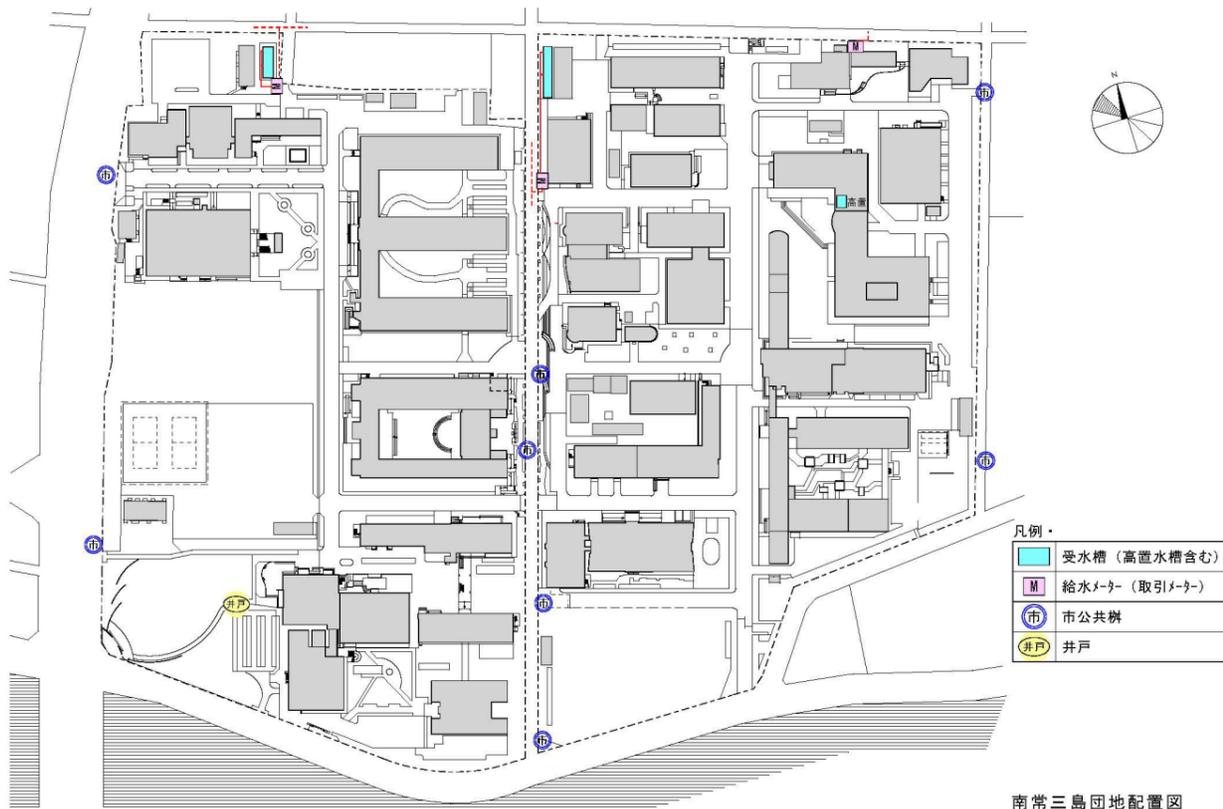
現状



将来



■ 機械設備関係

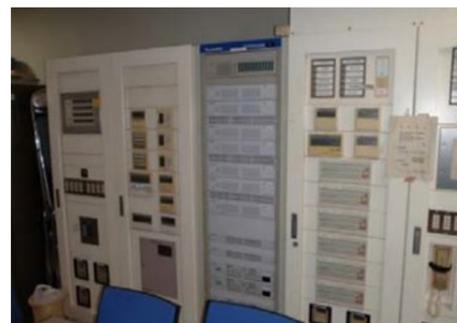


(3) 空気調和設備計画

- ・経年25年以上経過している空気調和設備については、計画的に更新を行う。
 - ・経年25年未満の空気調和設備についても、補修用部品のメーカー保有期限を参考に計画的に更新を行う。
 - ・更新に際しては、実験研究内容及び運転時間等を考慮しながら空調方式を決定する。
- また、集中リモコンを設置の上、適切な空調管理を実施し省エネルギーを進める。



機械棟 空調設備



共通講義棟 空調管理

(4) 給水設備計画

- ・経年25年以上経過している配管については、計画的に更新を行う。
 - ・配管の更新に際しては、耐震性に優れ、液状化にも対応できるポリエチレン管等を使用する。
 - ・水槽については、緊急遮断弁等を設置して災害対策を考慮した更新を行う。
- また、地震発生時の津波対策として給水ポンプ等の嵩上げを行う。



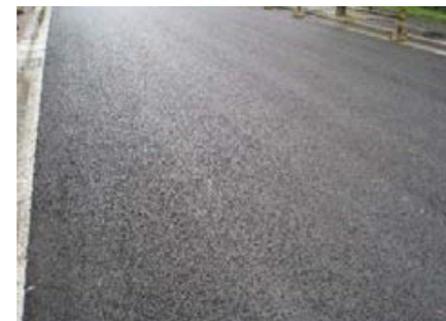
受水槽 緊急遮断弁



耐震性のあるポリエチレン管に更新

(5) 排水設備計画

- ・経年25年以上経過している配管については、計画的に更新を行う。
- ・配管の更新に際しては、集中豪雨及び床下ピット・共同溝湧水に対応した排水管路及び雨水ポンプ槽等の採用を計画的に実施する。
- ・排水管路の定期的な清掃等を計画的に実施する。



透水性アスファルト舗装



排水管増径

南常三島キャンパス

総合科学部地区

- ① 空気調和設備
- ② 給水設備
- ③ 排水設備
- ④ ガス設備
- ⑤ 消火設備

- ① 個別方式(空冷式ヒートポンプエアコンEHP・GHP)
- ② 水源 : 市水(上水、雑用水)
給水方式: 加圧ポンプ方式
- ③ 市公共下水道
- ④ 都市ガス
- ⑤ 屋内消火栓

理工学部地区

- ① 空気調和設備
- ② 給水設備
- ③ 排水設備
- ④ ガス設備
- ⑤ 消火設備

- ① 個別方式(空冷式ヒートポンプエアコンEHP・GHP)
- ② 水源 : 市水(上水、雑用水)
給水方式: 加圧ポンプ方式及び高置水槽方式
- ③ 市公共下水道
- ④ 都市ガス
- ⑤ 屋内消火栓

(6) ガス設備計画

- ・経年25年以上経過している配管については、計画的に更新を行う。
- ・配管の更新に際しては、耐震性に優れ、液状化にも対応したポリエチレン管等を使用すると共に、構内ループ配管化により、災害時の破損等による教育・研究活動への障害のリスクを軽減する。



耐震性のあるポリエチレン管に更新



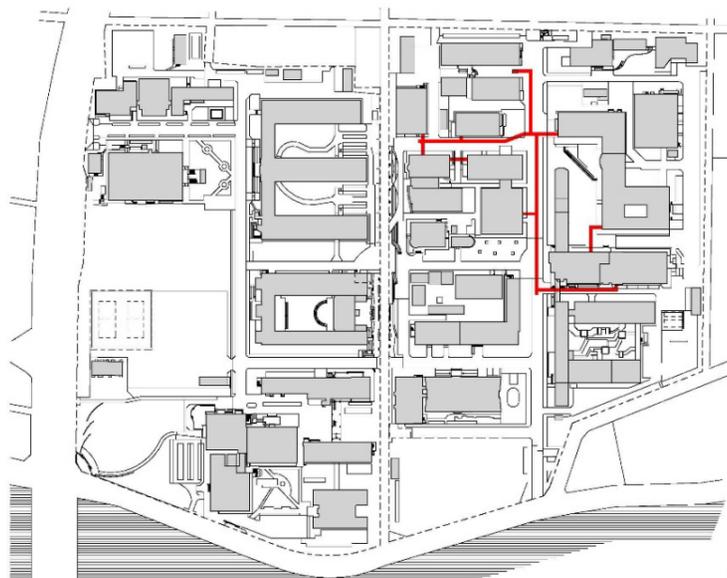
耐震性のあるポリエチレン管

(7) エレベーター設備計画

- ・設置(更新)後25年以上経過した設備は、メーカーからの部品供給が停止される部品もあるため、計画的に更新を行う。その際には、関係法令等の改正による不適合事項を解消する。
- ・設置(更新)後25年未満の設備についても、建築基準法不適合事項の解消を進めるとともに、保守部品の定期メンテナンスを確実に実施し、安全性の確保と共に設備の長寿命化に努める。

(8) 共同溝計画

- ・構内主幹配管配線の更新を計画する際は、既設共同溝のスペースを有効利用すると共に、共同溝未設置の箇所は基幹整備の際に、併せて新たに整備を進める。



南常三島団地配置図



将来計画に対応した共同溝

凡例
■ 共同溝

7. 防災

(1) 災害時の対応

- ・徳島大学の使命の1つとして、災害発生時における、学生・教職員・地域住民の生命を守るための地域の防災拠点としての役割があり、徳島市の地域防災計画の中で、南常三島キャンパスの体育館、共通講義棟及び地域創生・国際交流会館は、災害時指定避難場所として指定されており、大規模災害時において多くの地域住民の避難場所となる。

従って、上記の3棟については備蓄倉庫の整備、非構造部材・ライフライン・情報インフラ等の耐震対策、バリアフリー対策を行うとともに必要最小限の電力と給水能力を確保する必要がある。

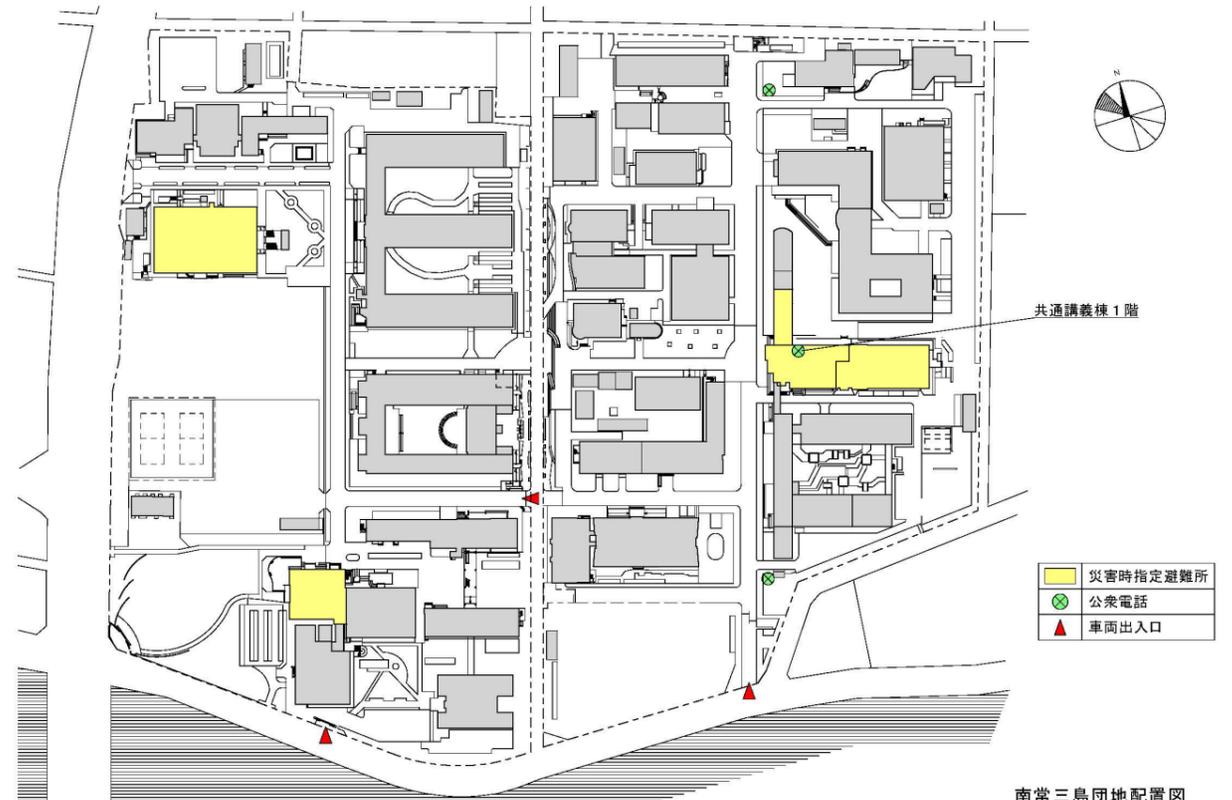
また、物資搬出入を円滑に行える施設周辺の対策等についても配慮した整備を行う。

- ・地域の防災拠点の形成に当たり、徳島市などとの役割分担や市内の大学間での相互連携・機能補完のためのネットワークを構築する。

(2) 津波対策整備計画

- ・徳島大学はその立地上南海トラフ大地震発生時には、キャンパス内が浸水すると想定されている。

特に南常三島キャンパスでは、その高さは3mと想定されており、被災時には各棟の1階に設置されている受電室、電気室、受水槽及び給水ポンプが浸水した場合、教育研究活動の停止を余儀なくされ、また復旧に長時間を要することも予想されることから、教育・研究に重大な支障を及ぼすこととなる。その対策として受電室の場所の変更や他の安全な隣接した電気室から送電できるよう整備を行う。そういった変更が不可能な場合は1階に設置されている電気室の浸水対策、ポンプ室及び給水ポンプのかさ上げなどを行い、教育・研究活動が早期に復帰できる環境を整備する必要がある。



南常三島団地配置図

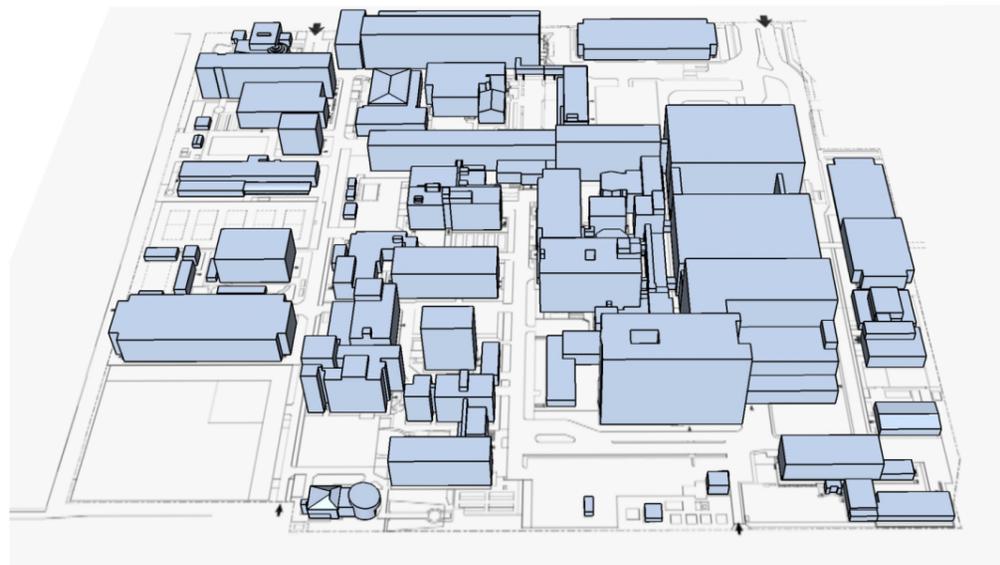
5-3 蔵本キャンパス

1. キャンパスの概要

蔵本キャンパスは、JR徳島駅より西に約4kmの位置にあり、南側には眉山の山麓、西側には県立蔵本公園、東側には県立中央病院がある。設置以前の状況は旧陸軍歩兵連隊の跡地である。

キャンパス内には、医学部・歯学部・薬学部の3部のほか先端酵素学研究所などの施設が置かれており、生命科学の一大研究拠点となっている。

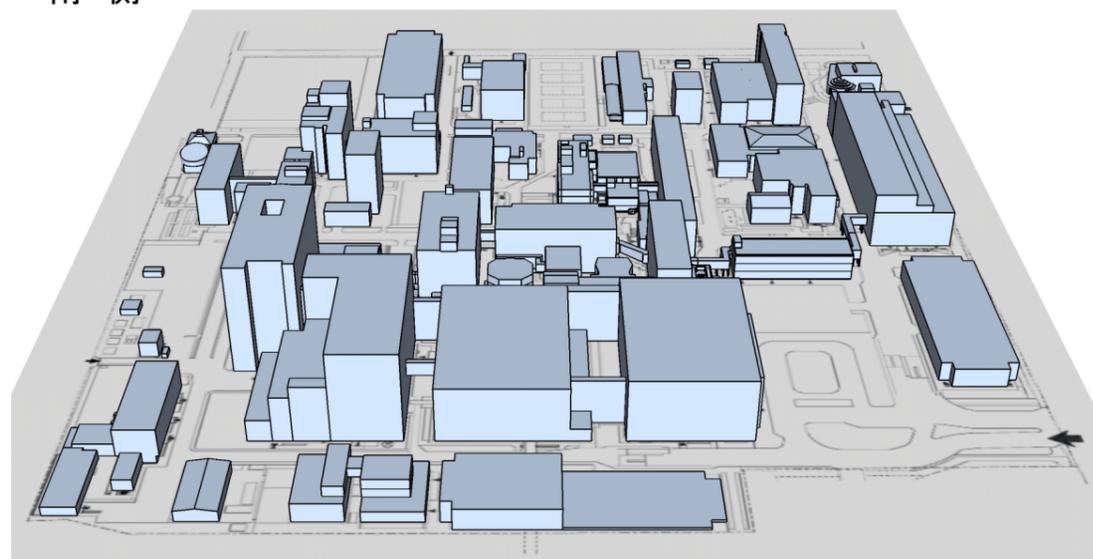
徳島大学病院は地域の特定機能病院として医学・歯学の両面から高度で先進的な医療を提供しており、学生数は約1,800名である。



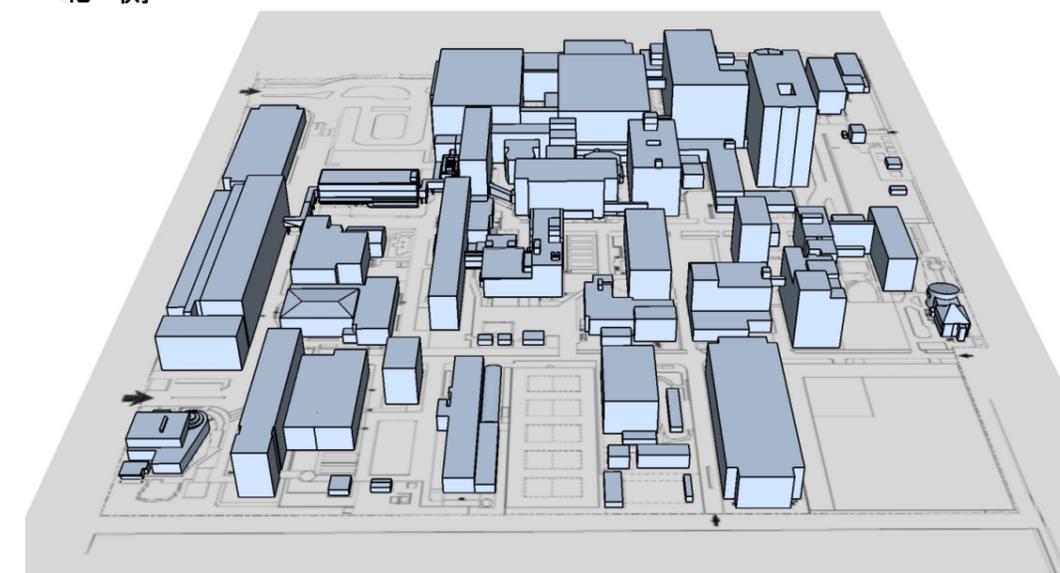
南側



北側



東側



西側

2. キャンパスの現状と課題・方針

■ 現況キャンパスが持つポテンシャル



中田博士の碑
(図書館南)



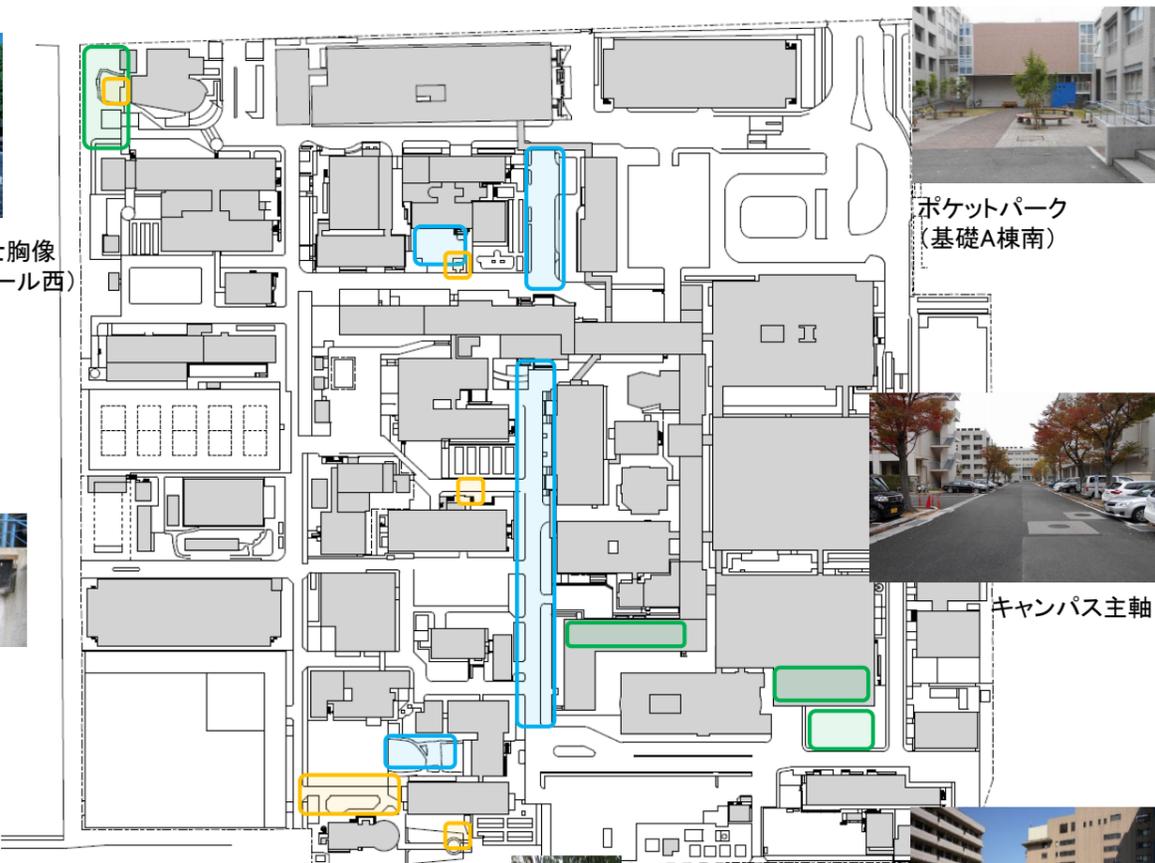
長井長義博士胸像
(長井記念ホール西)



ポケットパーク
(基礎A棟南)



児玉桂三先生
による碑
(栄養学棟北)



キャンパス主軸



卒業生による
記念碑・樹木
(青藍会館北)



解剖体慰霊碑
(保健学B棟南)



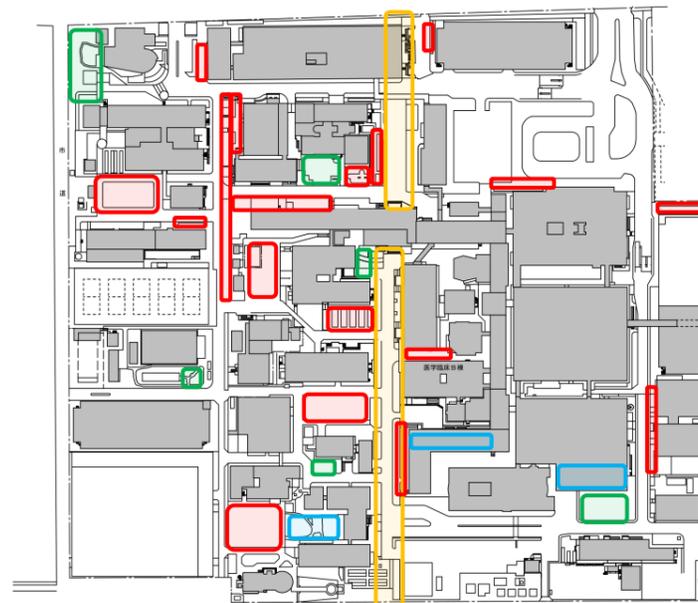
屋上緑化
(保健学C棟)

現状調査からポテンシャルを抽出

- ゆとりや潤いのある景観
 - ・木々が茂っており、気持ちの良い歩道。
 - ・ポケットパークとしてのパブリックスペース。
- 整備された広場やパブリックスペース
 - ・広い緑地空間。
 - ・屋上庭園。
- 普遍的価値を持つモニュメント等
 - ・長井長義博士の生家より頂いた青石。
 - ・長井長義博士の銅像及び関連記念碑
 - ・卒業生寄贈による記念碑や記念樹

■ 現況キャンパスが抱える問題点

現状調査から問題点を抽出

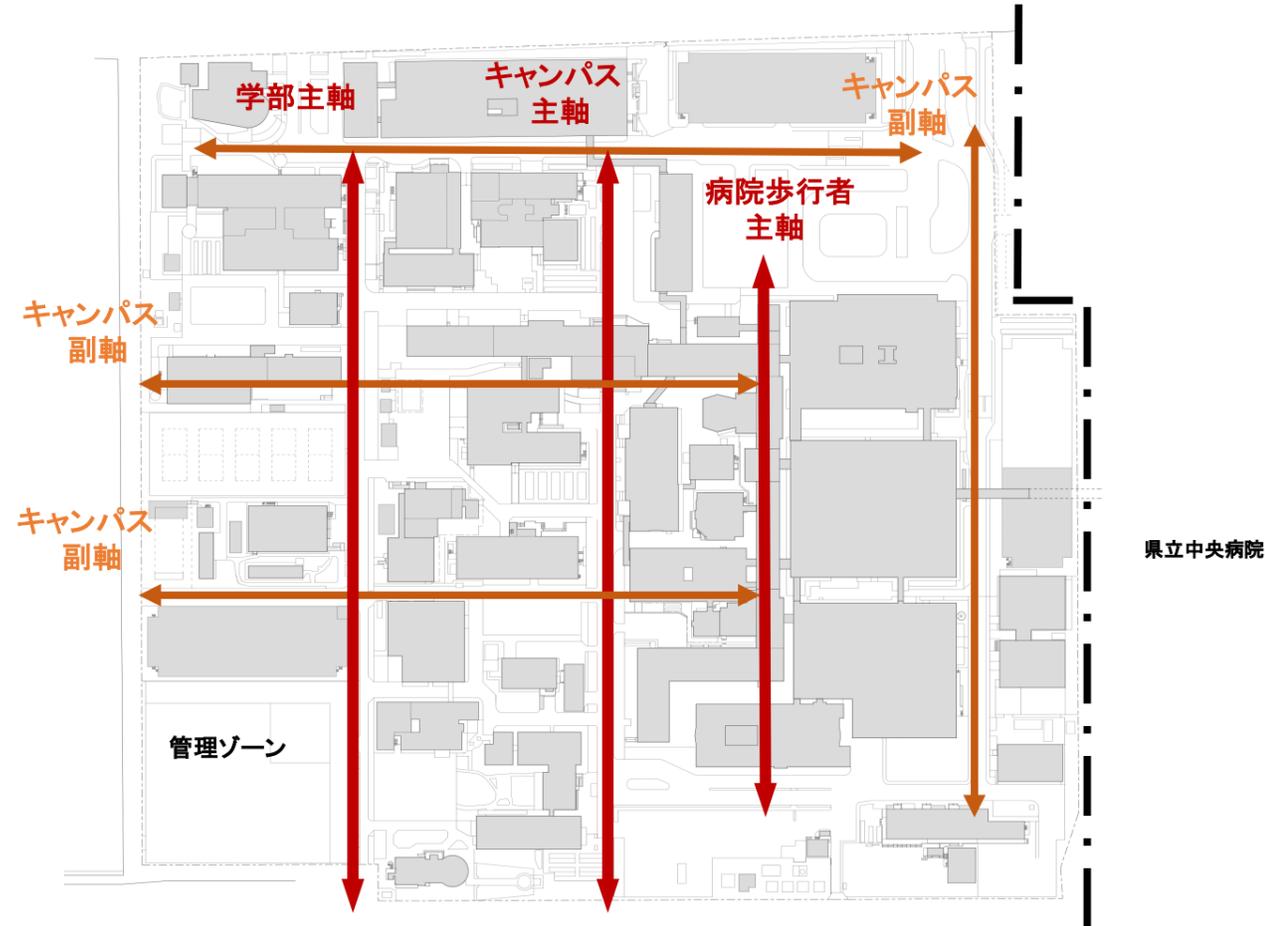


- 交通計画・動線計画の問題
 - ・駐車場、駐輪場が敷地の中に点在しているため、車両が団地内部を通行し、歩行者と車両動線が、交差している。
 - ・学生が構内を主に自転車で移動するため、各建物の出入口周辺に自転車が集中し、歩行者や車両等の通行を妨げている。
 - ・総合メディカルゾーンでは外来患者の自転車が、外来診療棟周辺にあふれ十分な歩道幅員が確保されていない。
- 景観が活かされていない
 - ・中庭の整備が活かされていない。
 - ・屋上緑化の整備が活かされていない。
- 緑地や植栽帯の計画性がなく有効利用されていない広場やパブリックスペース
 - ・植栽の種類に統一性がない。
 - ・屋外空間が豊かに利用できていない。
- 意匠性・統一性などのばらつき
 - ・将来の蔵本キャンパスの主軸として、植栽・舗装・建物の壁面線等を統一し景観に配慮する。

3. ゾーニング計画

<軸線>

キャンパス形成時からの動線をキャンパス軸として位置付け展開を図る



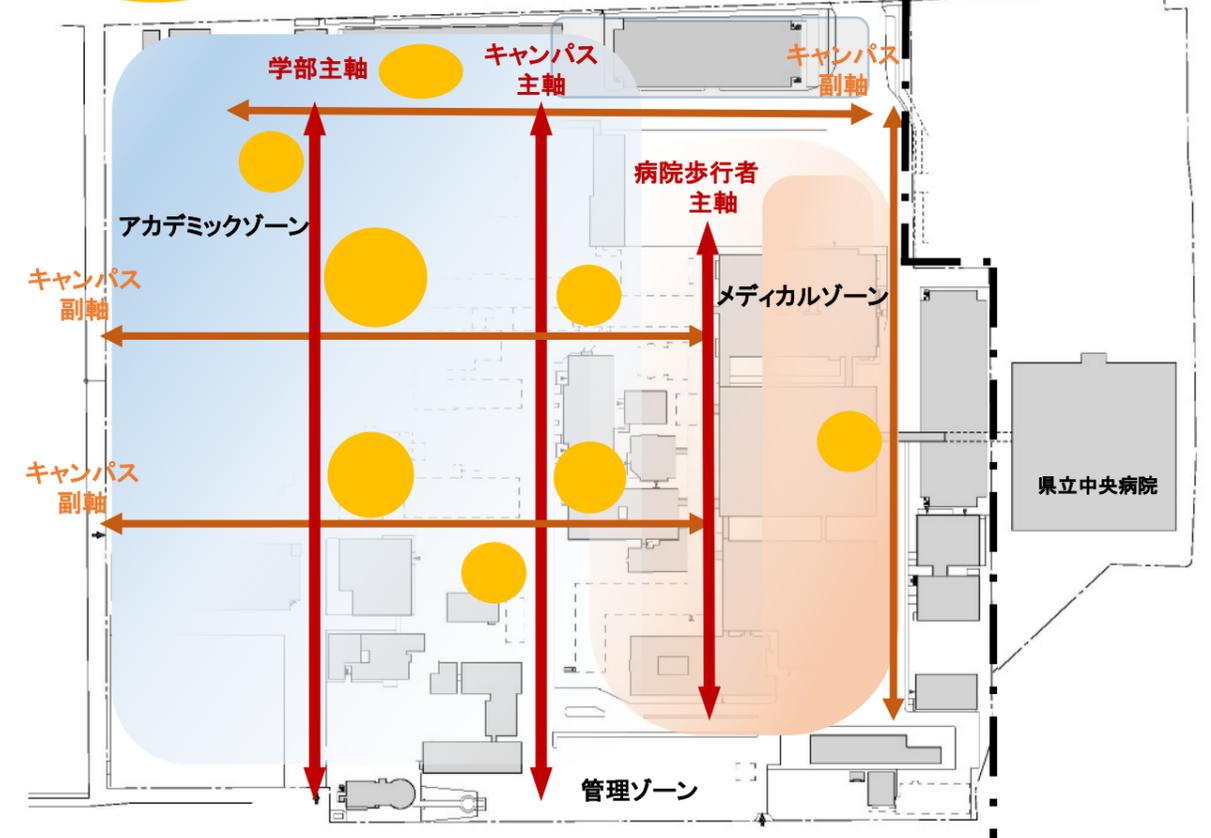
蔵本キャンパスの現状導線

蔵本キャンパスの主導線は南北に学部・キャンパス・病院の3つの主軸より形成されており、学内外問わず平日は多数の人が構内を行き交っている。また常時車やバイク・自転車の通行量も多い。

主軸と直交する形で副軸が形成されており、四方にある立体駐車場利用者と構内歩行者との動線等の問題点もあるため歩車分離も含めて検討が必要である。

<ゾーニング>

共創拠点の創出によるイノベーション・コモンズ化のイメージ

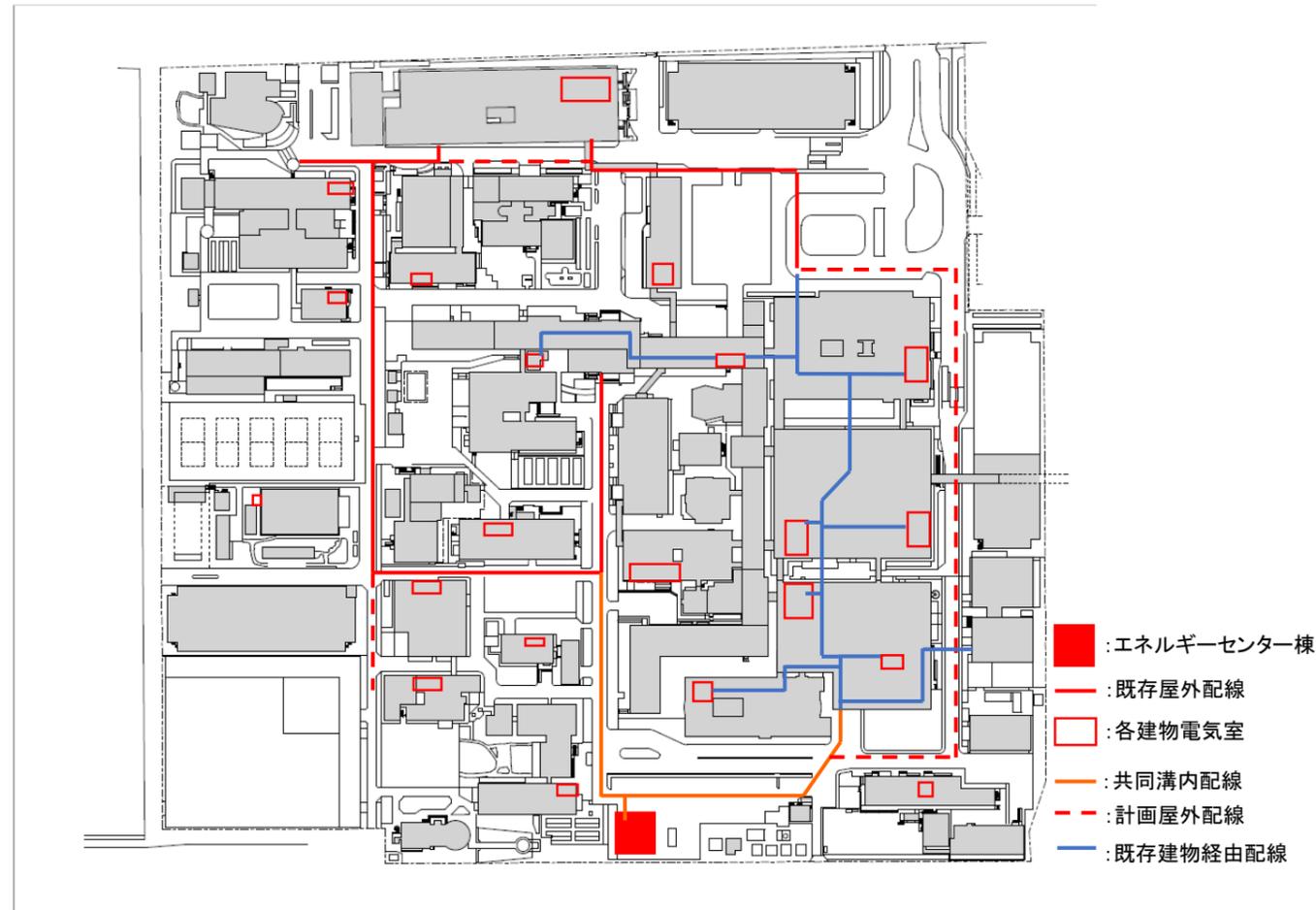


蔵本キャンパスの将来ゾーニング案(2050年度時点)

- ・建設後80年程度を経過した建物等をとりこわし、集約化・高層化を推進する
- ・キャンパス軸が明確となるように計画する
- ・「メディカルゾーン」として質の高い医療と教育の場を構築できるように県立中央病院と密接に連携を図れるように計画する
- ・東病棟は20年経過し建物・設備共に老朽化が見られる。喫緊の課題として大学病院の再々開発計画を検討していく必要がある

3. ライフライン計画

■ 電気設備関係



(1) 電力設備計画

- ・経年25年以上経過している配線及び自家発電設備等については、計画的に更新を行う。
- ・配線の更新に際しては、極力既設共同溝を利用し、やむをえず埋設する場合は、耐震性のある配管を使用する。
- ・電気室を改修する際は、地震・津波・洪水等の災害時にも機能停止対策を踏まえた計画とする。
- ・老朽化した特高受変電設備を新エネルギーセンター棟へ移設する。
- ・将来のキャンパス計画を見据え、建物内を経由している配線を、建物改修の際にキャンパスの軸となる道路下へ埋設していく計画とする。

(2) エネルギーセンター棟計画

- ・特高開閉所に近く、将来増設時の配線長が有利となる敷地中央南側の管理ゾーンに配置する。
- ・他の施設と離れているため、将来計画、保守ともにリスクが少なく、建物を新設することにより浸水被害にも対応。
- ・既設共同溝との接続が容易な配置とする。

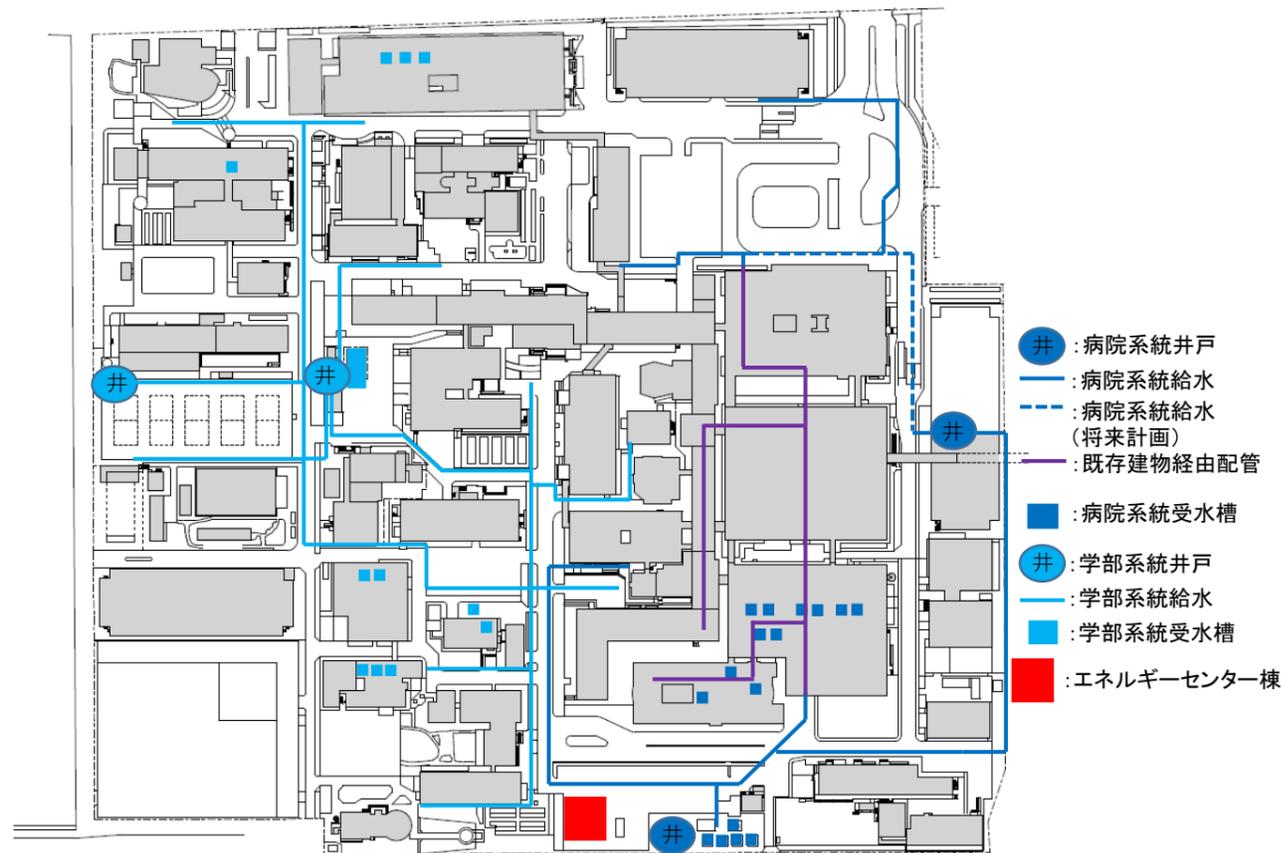
(3) 電話・情報通信設備計画

- ・経年25年以上経過している配線については、基幹整備に合わせて、計画的に更新を行う。
- ・電話交換機及び防災受信機等については、補修用部品のメーカー保有期限を参考に計画的に更新を行う。
- ・屋外通信線(LAN)の更新と無線化の範囲拡大については、導入するネットワークシステムの構成により配線種別も異なるため、情報センターによるネットワーク基盤整備に併せて行う。
- ・情報センター移転に伴いR9年度にネットワーク基盤整備の更新を計画しており、屋外配線路の更新をおこなう。

蔵本キャンパス

- | | |
|------------|--|
| ① 引込み | ① 埋設管路式で特高開閉所に引込み |
| ② 回線数 | ② 特別高圧66.6kV 2回線 |
| ③ 変電設備容量 | ③ 特高変電設備(15,000kVA), 高圧変電設備(39,465kVA) |
| ④ 電気室 | ④ 22箇所 ループ受電方式 |
| ⑤ 契約電力 | ⑤ 6,600kW |
| ⑥ 契約種別 | ⑥ 特別高圧電力B高負荷率型(蓄熱調整契約及び自家発補給電力併合) |
| ⑦ 構内配線 | ⑦ 埋設管路式・共同溝配線・ピット配線、 |
| ⑧ 自家発電装置 | ⑧ 常用及び非常用10台 6,200kVA |
| ⑨ 太陽光発電装置 | ⑨ 3台 36kW(2000年・2013年・2013年) |
| ⑩ 電話交換機設備 | ⑩ 電子デジタル交換機(2020年) |
| ⑪ 情報設備 | ⑪ 学内LAN |
| ⑫ 自動火災報知設備 | ⑫ GR型受信機(2014年) |
| ⑬ 放送設備 | ⑬ 非常用・業務用兼用(2008・2010年) |

■ 機械設備関係



(4) 給水設備計画

- ・経年25年以上経過している配管については、計画的に更新を行う。
- ・配管の更新に際しては、耐震性に優れ、液状化にも対応できるポリエチレン管等を使用すると共に、将来計画として構内ループ配管化により、災害時の破損等による教育・研究活動への障害のリスクを軽減する。
- ・水槽については、緊急遮断弁等を設置して災害対策を考慮した更新を行う。
- ・将来のキャンパス計画を見据え、建物を経由している配管を、建物改修の際にキャンパスの軸となる道路下へ埋設していく計画とする。

(5) 空気調和設備計画

- ・経年25年以上経過している空気調和設備については、計画的に更新を行う。
- ・経年25年未満の空気調和設備についても、補修用部品のメーカー保有期限を参考に計画的に更新を行う。
- ・更新に際しては、実験研究内容及び運転時間等を考慮しながら空調方式を決定する。
また、集中リモコンを設置の上、適切な空調管理を実施し省エネルギーを進める。

(6) 排水設備計画

- ・経年25年以上経過している配管については、計画的に更新を行う。
- ・配管の更新に際しては、集中豪雨及び床下ピット・共同溝湧水に対応した排水管路及び雨水ポンプ槽等の採用を計画的に実施する。
- ・排水管路の定期的な清掃等を計画的に実施する。

(7) ガス設備計画

- ・経年25年以上経過している配管については、計画的に更新を行う。
- ・配管の更新に際しては、耐震性に優れ、液状化にも対応したポリエチレン管等を使用すると共に、将来計画として構内ループ配管化により、災害時の破損等による教育・研究活動への障害のリスクを軽減する。

(8) エレベーター設備計画

- ・設置(更新)後25年以上経過した設備は、メーカーからの部品供給が停止される部品もあるため、計画的に更新を行う。その際には、関係法令等の改正による不適格事項を解消する。
- ・設置(更新)後25年未満の設備についても、建築基準法不適格事項の解消を進めると共に、保守部品の定期メンテナンスを確実に実施し、安全性の確保と共に設備の長寿命化に努める。

蔵本キャンパス

学部地区

- ① 空気調和設備
- ② 給水設備
- ③ 排水設備
- ④ ガス設備
- ⑤ 消火設備

- ① 個別方式(空冷式ヒートポンプエアコンEHP・GHP)
- ② 水源 : 井水(上水、雑用水)
給水方式: 加圧ポンプ方式及び高置水槽方式
- ③ 市公共下水道
- ④ 都市ガス
- ⑤ 屋内消火栓

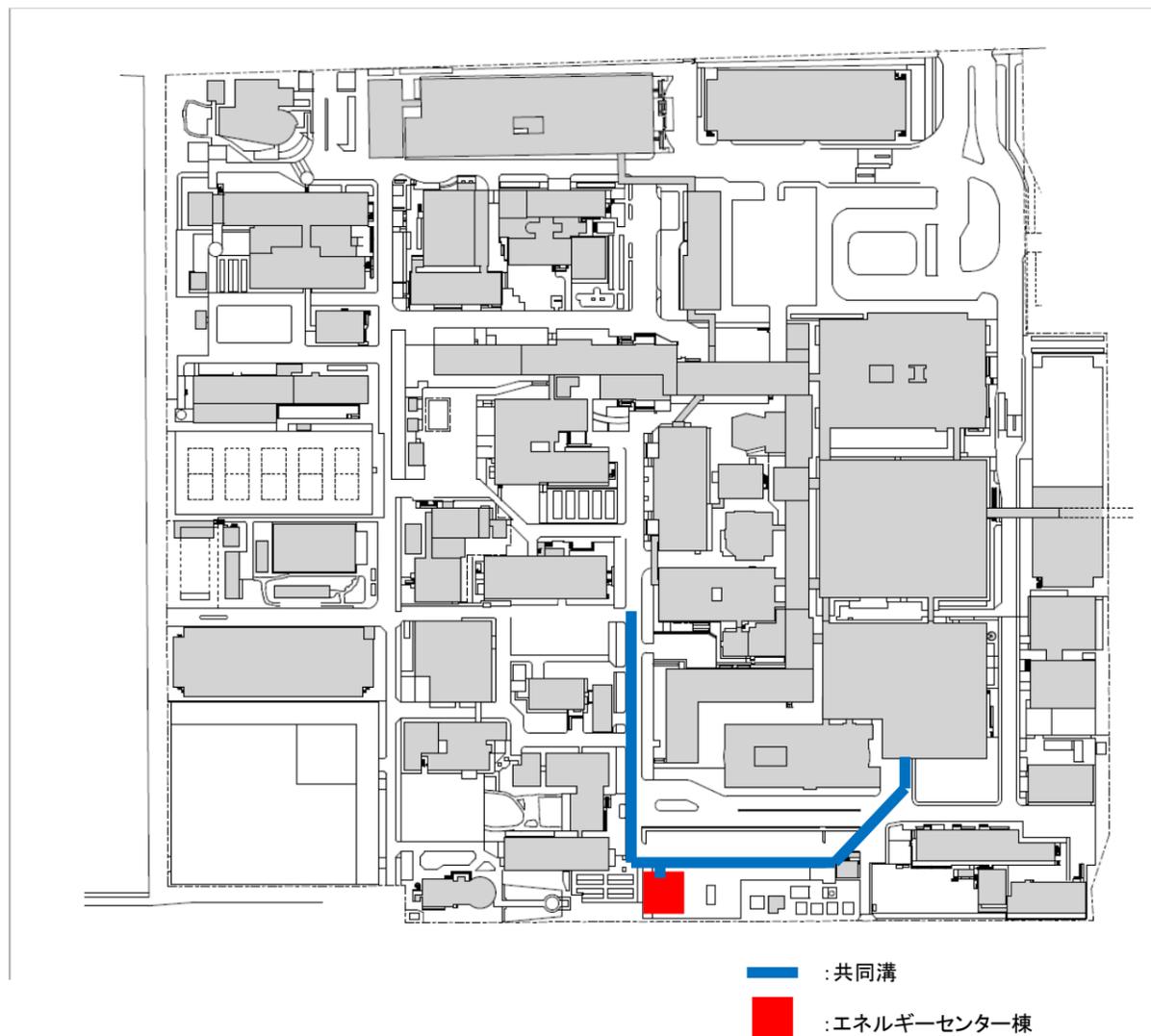
病院地区

- ① 空気調和設備
- ② 給水設備
- ③ 排水設備
- ④ ガス設備
- ⑤ 消火設備

- ① 中央方式(ボイラー、水冷・空冷チラー、吸収式冷温水機)及び個別方式(空冷式ヒートポンプエアコンEHP)
- ② 水源 : 井水・市水(上水、雑用水)
給水方式: 加圧ポンプ方式及び高置水槽方式
- ③ 市公共下水道
- ④ 都市ガス
- ⑤ 屋内消火栓、スプリンクラー

(9) 共同溝計画

- ・構内主幹配管配線の更新を計画する際は、既設共同溝のスペースを有効利用すると共に、共同溝未設置の箇所は基幹整備の際に、併せて新たに整備を進める。



改定履歴

施設委員会・役員会承認	2013.03
施設委員会・役員会承認	2016.03
施設委員会・役員会承認	2017.03
施設・環境委員会・役員会承認	2020.03
施設・環境委員会承認	2024.03
役員会承認	2024.03.27



徳島大学キャンパスマスタープラン 資料編

2020210ver.
施設環境委員会承認2020306ver.
役員会承認20240327ver.



南常三島キャンパス動線整備計画(駐車場計画)

駐車場整備

- ・南側平面駐車場敷地に立体駐車場を新設し駐車場を集約する
- ・障害者用駐車場、物品搬入用車両は道路から最短距離で進入可能の位置に設ける

立体駐車場規模: 35m × 85m 3層4段 500台

現在の駐車台数は約555台

駐車スペース555台 (R1年度 総科340台) に対し
許可台数1,028台
(R1年度 総合科学部574台、
理工学部454台)

工事計画

現地での実施工期: 約4ヶ月

工事期間中は運動場を利用した仮設駐車場を設置
(仮設駐車場は立体駐車場完成後パブリックスペースへ変更)

コスト計画

概算工事費: 600,000千円 ≒ (1,200千円/台 蔵本西側立体駐車場参考)

遺構範囲から外れているため、埋蔵文化財調査費は未計上

○コスト計画1

蔵本団地駐車料金から考慮して18,000円/年・台で計算
270,000千円 ≒ 18,000円 × 500台 × 30年間

➡ **概算工事費
330,000千円不足
(目的積立金等の学内予算を計画)**

○コスト計画2

周辺相場から考慮して4,000円/月・台で計算
620,000千円 ≒ 4,000円 × 12ヶ月 × 430台 × 30年間

➡ **概算工事費確保可能**

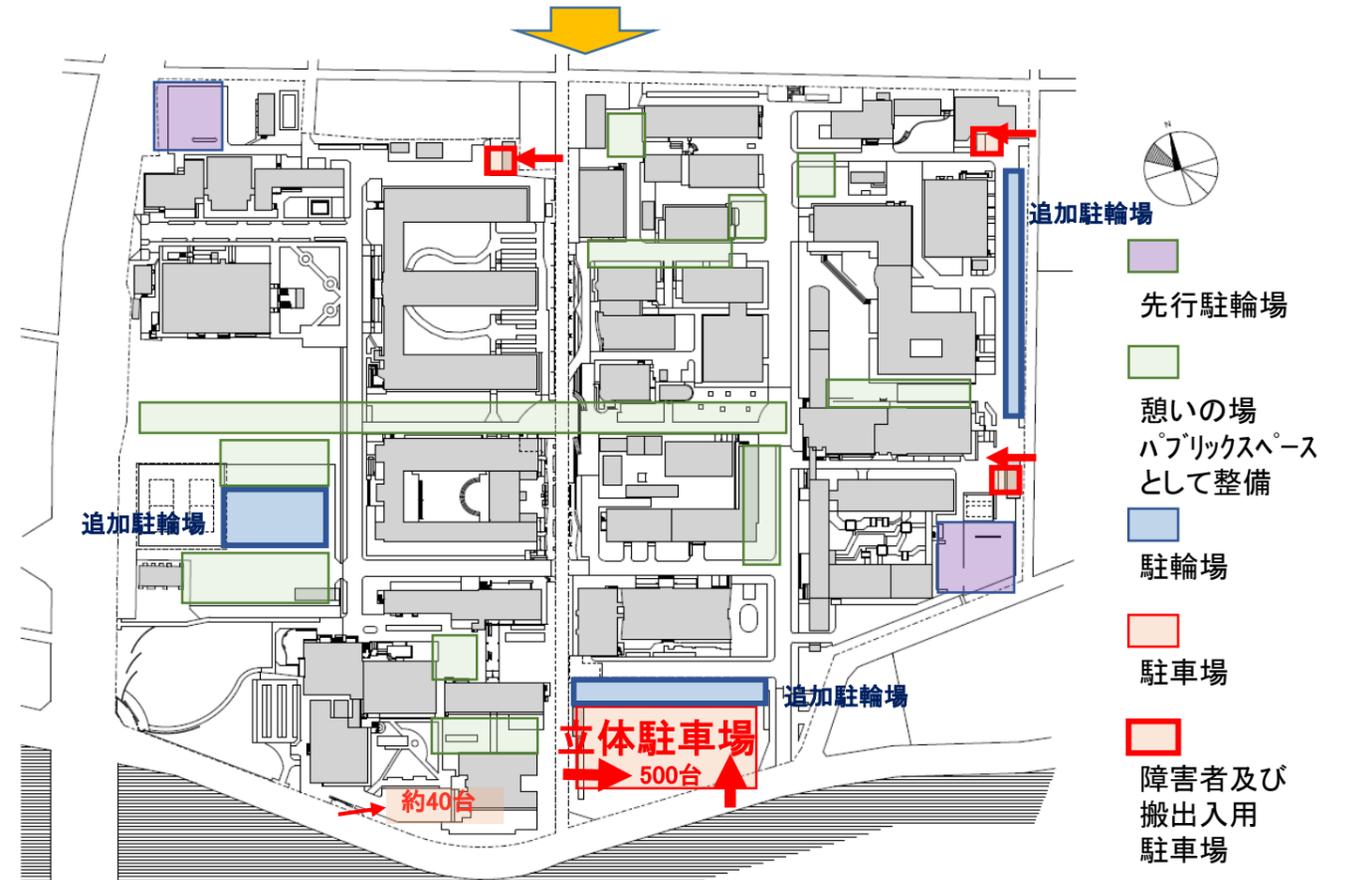
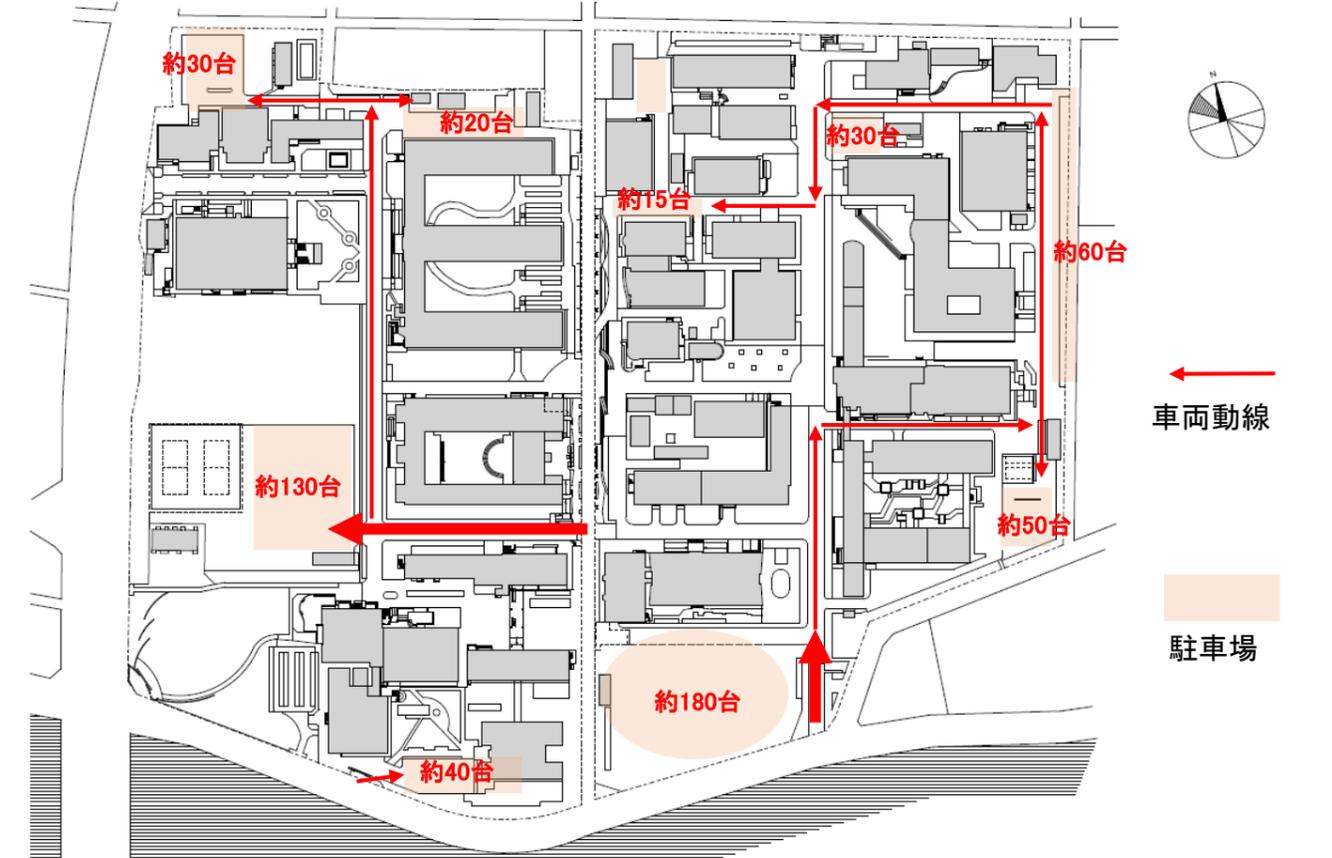
○コスト計画3

大和リース㈱によるPPP案検討(詳細は別紙)

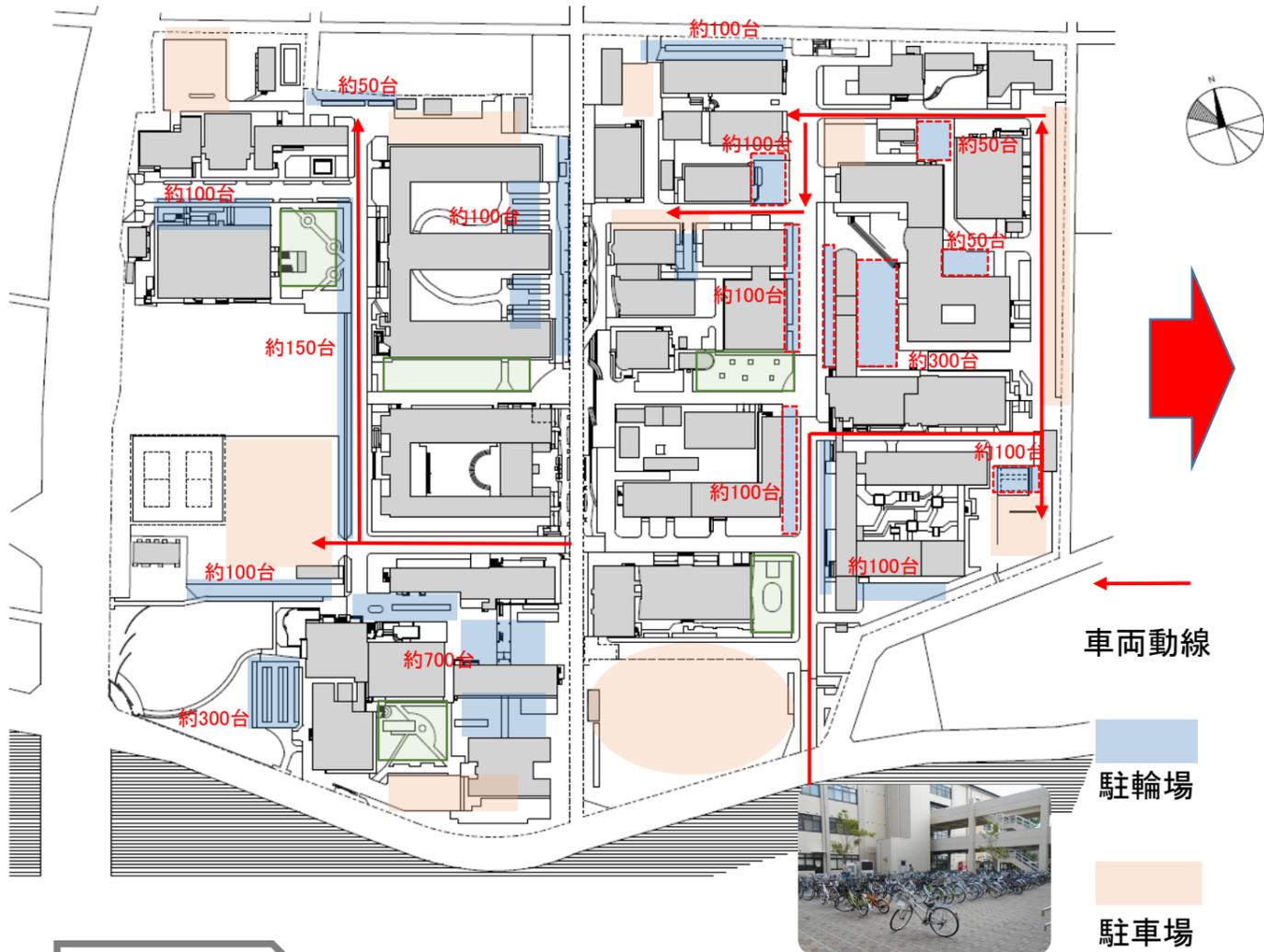
- ・1台当たり5,000円/月 90%稼働が損益分岐点
- ・民間施設誘致による複合化を行うことで駐車代金の価格を抑えることが可能

- ・民間施設の需要が不足
- ・駐車場のみの整備だと競争原理の働かないPPP案は不利

案1: 大学前の高速バス停車所を見込んで土産物店、一般開放駐車場



南常三島キャンパス動線整備計画(駐輪場計画)



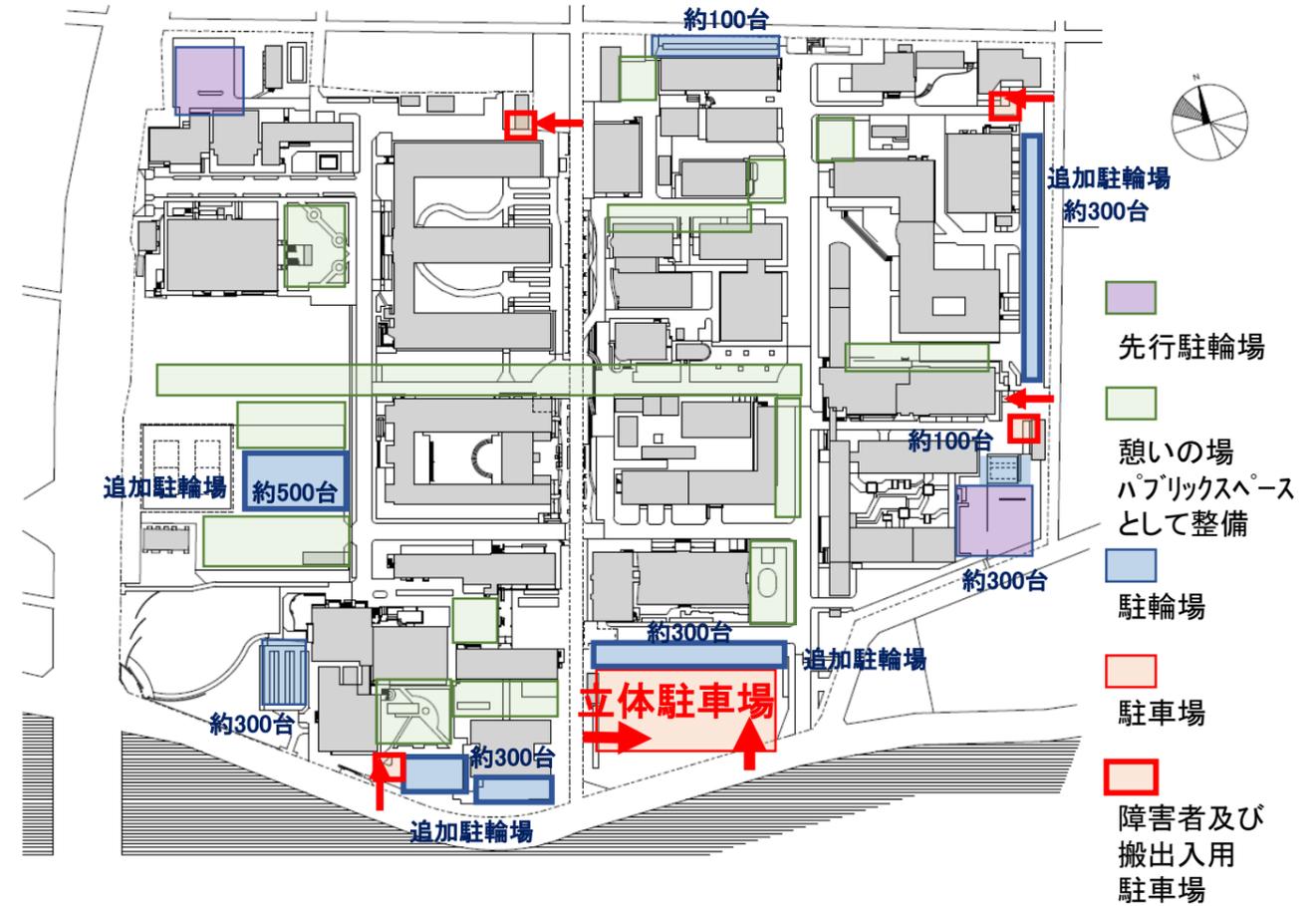
駐輪場整備

- ・駐車場跡地を利用してキャンパス外周に整備する
- ・立体駐車を整備するまでは総科2号館北や電気電子棟東側スペースを先行して駐輪場整備を行う

駐輪場規模: 2,500台以上が必要(2019年駐輪台数調べ参考)

既存駐輪場台数: 約500台(助任の丘300台、知能北100台、電気棟東100台)

追加計画駐輪台数: 約2,000台(総科2号館北300台、化生棟東300台、人と地域共創南300台、電気電子棟東側300台、図書館南300台、テニスコート東500台)



コスト計画(概算金額)

<追加台数2,000台概算工事費>

○屋根無し
整地、コンクリート舗装、ライン引、排水、車輪止め
概算金額 22.8千円/台

→ 工事費
45,600千円

○屋根有り
整地、コンクリート舗装、排水、サイクルポート
概算金額 62.5千円/台

→ 工事費
125,000千円

○立体駐輪場(自転車のみ)
概算金額 200.0千円/台

→ 工事費
400,000千円

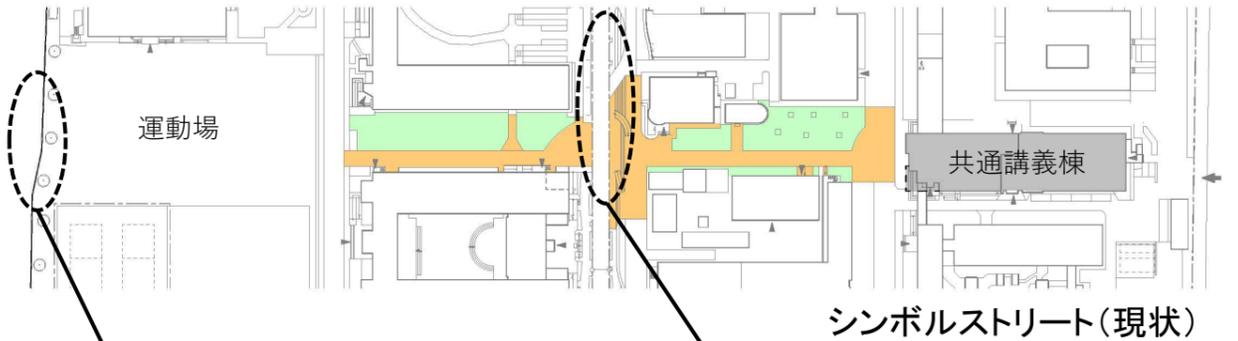
南常三島キャンパスパブリック計画

シンボルストリート

現在のシンボルストリートは運動場により寸断され、学生の集まる共通講義棟や教養教育から離れていることもあり、人通りが少なく有効利用されていない。

既存のシンボルストリートを国道へ伸ばし、地域へ開かれた大学のシンボルとなる主動線とする

- ・既存運動場にインターロッキング舗装、緑地整備を行う。
- ・国道と隔てる塀の整備を行う。



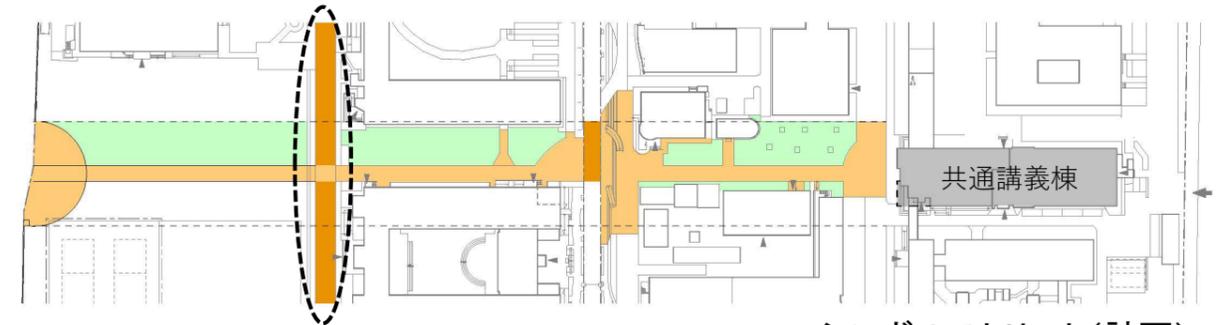
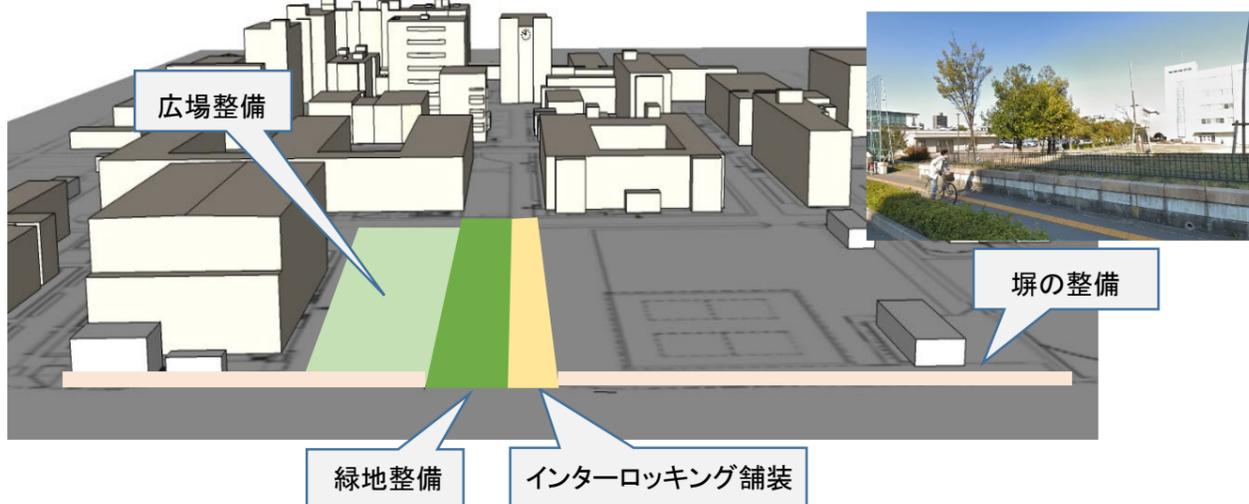
シンボルストリート(現状)



国道と隔てる塀

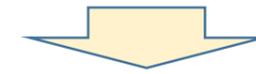


将来的に整備を行いたい市道

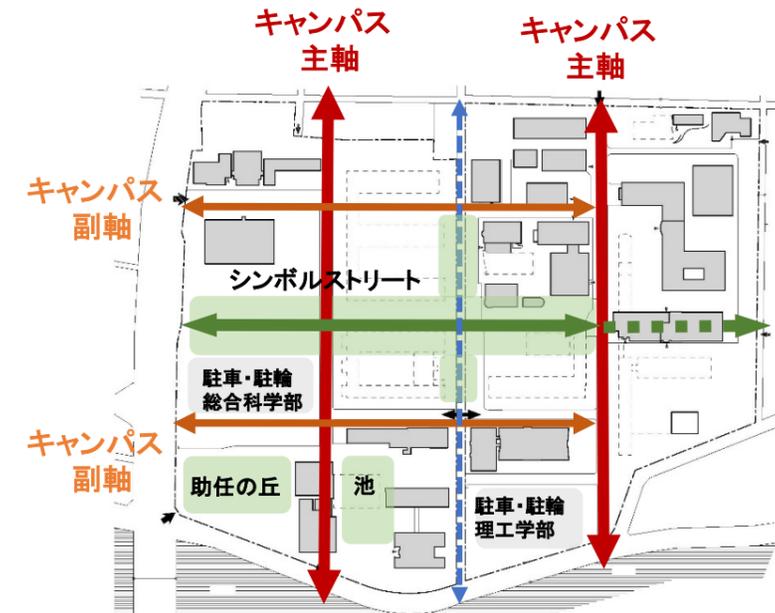


令和2年度の屋外排水に伴い舗装工事

シンボルストリート(計画)



将来的には3号館建て替え時期に合わせて、シンボルストリート南側にも緑地帯を設け拡張を図る。



助任の丘、食堂横の池をシンボルストリートと一体的に整備し、駐車・駐輪スペースから人の流れを導くことで、より普遍的価値の高いパブリックスペースとなるように全体的な計画を行う



シンボルストリート(将来構想)

パブリックスペース

<問題点>

学生が集まることができる憩いの場が少ない。
第一食堂の昼食時は混雑のため食堂内だけでは席数が不足している。

屋外に屋根付きの飲食可能な場所を設置する

<現状>



昼食時(12:10頃)



第一食堂東池周囲の全景



コスト計画(概算金額)

○屋根
間口8m 奥行き10m
概算金額 4,000千円

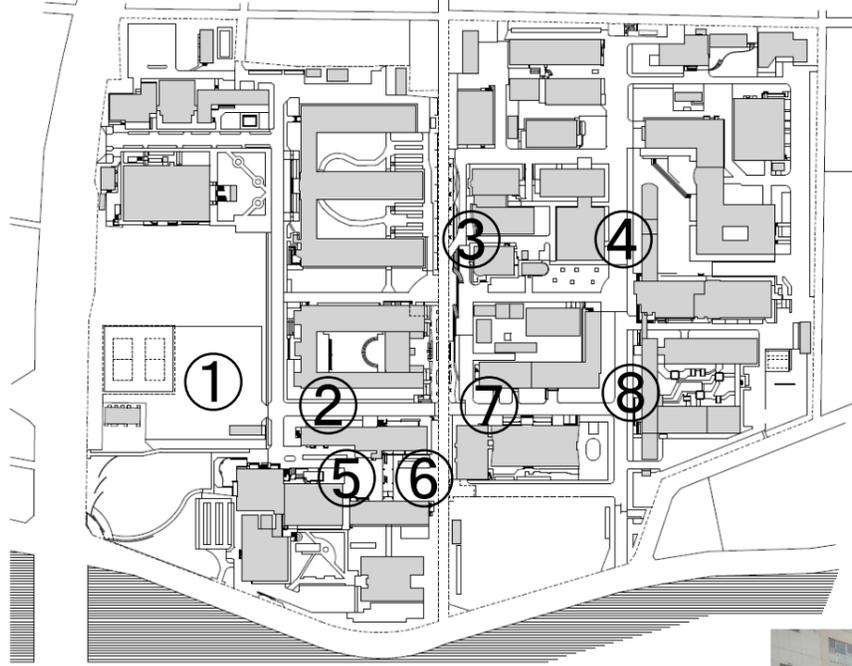
○ウッドデッキ
下地アルミ製、樹脂木製
概算金額 90.0千円/㎡

○植栽整備一式
概算金額

➡ 計画中

南常三島キャンパス現況写真

現況写真(交通)



①



総合科学部内部の駐車場

②



車と歩行者が集中する危険な場所

③



理工学部の内部にある駐車場

④



車道を通行する歩行者と自転車



⑤



教養教育院周囲の駐輪状況

⑥



教養教育院周囲の駐輪状況

⑦



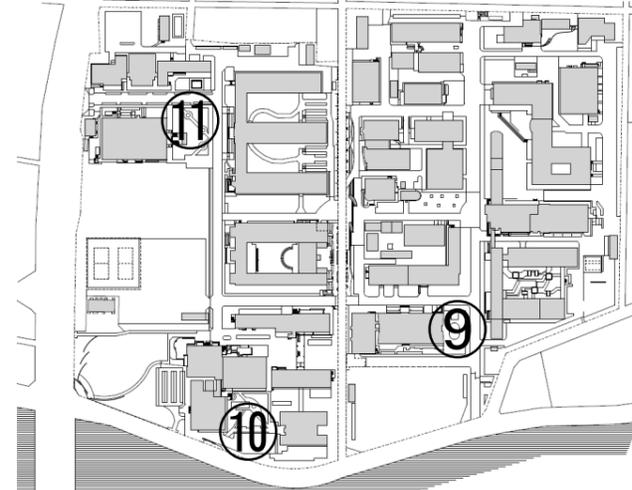
図書館前の駐輪状況

⑧



本来は歩道場所の駐輪状況

現況写真(パブリックスペース)



⑨



図書館周囲の緑地状況

⑩



食堂周囲の緑地状況

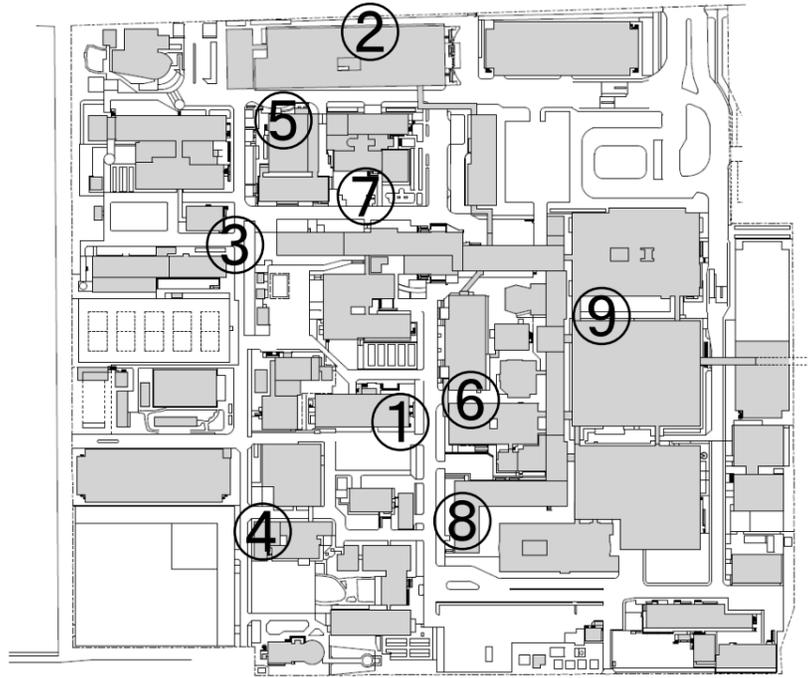
⑪



体育館周囲の緑地状況

蔵本キャンパス現況写真

現況写真(交通)



本来は歩道部分の駐車状況



奥まった場所にある駐車場



車道を通行する歩行者と自転車



駐車場以外の駐車状況



駐輪場以外の駐輪状況



駐輪場以外の駐輪状況

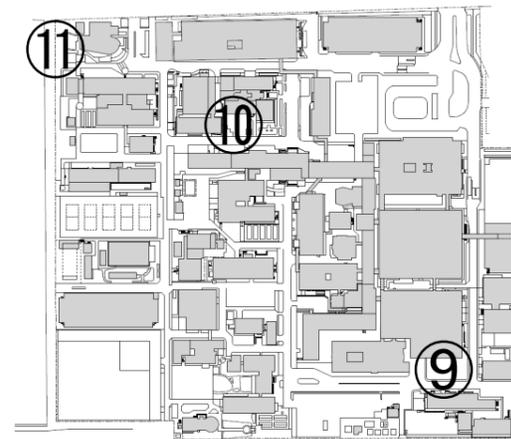


駐輪場以外の駐輪状況



本来歩道部分の駐輪状況

現況写真(パブリックスペース)



病棟南の緑地状況



図書館南の緑地状況



長井記念ホール西の緑地状況